

日本モンテッソーリ協会(学会) 50年のあゆみ

— 昨日、今日そして明日へ —



50

Japan Association Montessori
50th Anniversary

日本モンテッソーリ協会(学会) 編

日本モンテッソーリ協会(学会)

50周年記念誌





事務局界限

日本モンテッソーリ協会（学会）事務局は、平成19（2007）年5月から公益財団法人基督教イースト・エイジャ・ミッション富坂キリスト教センター2号館の2階に置かれている。

それは、富坂、堀坂、六角坂などのかかなり急な坂を上った小石川の高台にある。あたりは古さと新しさ、下町と都会が混じりあっている。高台にある事務局からはスカイツリーを望むこともできる。

隣の小学校の児童と富坂子どもの家の子どもたち、そして今年の4月から開設された富坂まきば保育園の子どもたちの元気な声が響くほかは静かだ。道路から少し離れているだけで、こんなに静かな東京がある。



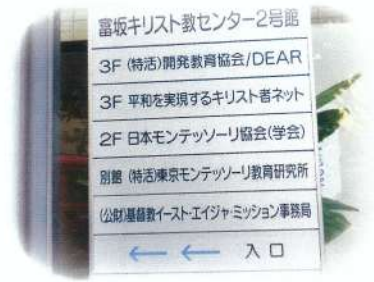
富坂下交差点



堀坂



六角坂



富坂キリスト教センター



<児童発達支援>富坂子どもの家



富坂まきば保育園



お世話になった先生方



昭和41（1966）年、うめだ「子供の家」第1回卒園式
前列左・故ハイドリッヒ神父様 同右・赤羽恵子先生



故松本尚子先生
（1968年、自宅で開いた善福寺子供の家で）



赤羽恵子先生
（1980年代、深草こどもの家の暖炉の前で）



故ルーメル神父様（1974年、九州幼児教育センター
トレーニングコース開所式にて）



故藤原元一先生（同左にて）



故川村祐一先生と川村洋子先生
（2015年、梶山モンテッソーリ
スクールにて）



約30年間にわたり当協会（学会）会長として協会の基を築かれたルーメル名誉会長は
平成23（2011）年3月1日に帰天されました。





全国大会の思い出



第6回全国大会（大分・湯布院）（1973.8.18～19）



第28回全国大会（東京）シンポジストの先生方（1995.7.31）



第26回全国大会（東京）ワークショップ（1993.7.30）



第44回全国大会（札幌）（2011.8.6～8）



第26回全国大会（東京）ランチパーティー（1993.7.30）



第44回全国大会（札幌）



第45回全国大会（名古屋）（2012.8.3～5）



第2回ルーメル・モンテッソーリ奨励基金授賞式
（第47回大会時の総会にて）（2014.8.6）



第46回全国大会（宮崎）（2013.7.30～8.1）



第48回全国大会（奈良）（2015.7.30～8.1）



第1回ルーメル・モンテッソーリ奨励基金授賞式
（第46回大会時の総会にて）（2013.7.30）



第49回全国大会（広島）（2016.8.8～10）



そして、明日へ

教員養成コースからはモンテッソーリアンが育ち、



NPO 法人東京モンテッソーリ教育研究所附属教員養成コース
第11期生入講式 (2016.4.6)



東京国際モンテッソーリ教師トレーニング
センター (2017.2)



九州幼児教育センター・トレーニングコースディプロ
マ授与式 (2013.3.24)



京都モンテッソーリ教師養成コース卒業式 (2017.3)



学校法人小百合学園広島モンテッソーリ教師養成コース
卒業生研修会 (2016.8.18~19)



純心モンテッソーリ教員養成コース (2016.4)



私たちの希望、それはこどもたち



うめだ「子供の家」(東京都足立区梅田)
冒頭の写真、うめだ「子供の家」の第1回卒園式から
50年を経て、2016年8月、新園舎が完成しました。



八幡カトリック幼稚園 (福岡県北九州市)



こじか「子どもの家」(福島市)



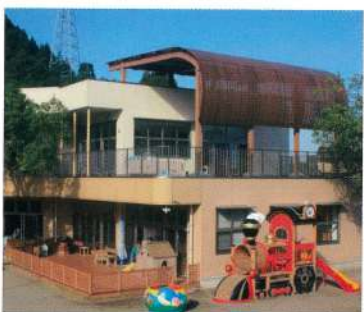
モンテッソーリ瑞穂子どもの家 (名古屋市)



亀田平和の園保育園 (新潟市)



鳴門聖母幼稚園（徳島県鳴門市）



七つの星幼稚園（宮崎市）



聖母の園保育園（横浜市）創立は1968年。
日本モンテッソーリ協会の創立と同じです。



ぼくはぼくを創る
のに忙しいんだ！



小百合幼稚園（広島市）



きらら保育園・かのん保育園（横浜市）



エミール保育園（福岡市）



聖母幼稚園（大津市）

目次

日本モンテッソーリ協会（学会）編

日本モンテッソーリ協会（学会）50年のあゆみ

—昨日、今日そして明日へ—

口 絵	3
ご挨拶 日本モンテッソーリ協会（学会）会長（理事長）前之園幸一郎	13
祝 辞	14
養老孟司、リン・ローレンス、春見静子 小川博久、荻野美佐子、片岡千鶴子、ギユンタ・ケルクマン SJ、佐藤学、汐見稔幸、 中村桂子、山内堅治、ハラルド・ルードヴィッヒ、渡辺和子、渡部満	

第1章 モンテッソーリ教育再認識の動きと日本モンテッソーリ協会の設立

(1) 日本モンテッソーリ協会設立前史 林信二郎	24
(2) 日本モンテッソーリ協会の設立と発展 平野智美	26
(3) 協会（学会）へ 松本良子	28
(4) 日本モンテッソーリ協会（学会）の現況 鈴木弘美	30

第2章 日本モンテッソーリ協会（学会）の使命

(1) 教員養成コースの設立	34
上智・東京コース 上智：江島正子 東京：天野珠子 九州コース 藤原江理子 京都コース 赤羽恵子 東京 AMI コース 松本静子 信望愛・広島コース 信望愛：下條裕紀媛 広島：下條善子 純心コース 青山キヌ	

（コース名は通称にて掲載させていただきました。）

(2) 支部の設立	40
北海道支部 前鼻百合江 東北支部 鷹薮達衛 佐々木信一郎 関東支部 町田明 松本良子 東京支部 天野珠子 江島正子 北陸支部 板東光子 中部支部 野原由利子 森下京子 近畿支部 瀧野正三郎 中国支部 下條裕紀媛 四国支部 乾盛夫 九州支部 中尾昌子	

第3章 実践園のあゆみ	
(1) 草創期の子どもの家	52
月見ヶ丘子ども家(京都市) 川村洋子	
うめだ「子供の家」(東京都足立区) 小坂礼子	
善福寺子供の家(東京都杉並区) 竹田恵	
(2) 現在の実践園から	55
宮の沢さくら保育園(札幌市) 前鼻百合江	
仙台白百合学園幼稚園(仙台市) 石岡順子	
愛珠幼稚園(東京都世田谷区) 木村悦子	
世田谷聖母幼稚園(東京都世田谷区) 高橋興子	
梶山モンテッソーリスクール(横浜市) 河田敏子	
大船ルーテル保育園(横浜市) 白井克榮	
つぼみ保育園(福井県坂井市) 前川徹	
野並保育園(名古屋市) 村田尚子	
深草こどもの家(京都市) 根岸美奈子	
奈良カトリック幼稚園(奈良市) 東裕子	
洋光幼稚園(広島市) 前田瑞枝	
山口天使幼稚園(山口市) 上田真由美	
鳴門聖母幼稚園(徳島県鳴門市) 乾盛夫	
八幡カトリック幼稚園(福岡県北九州市) 中尾昌子	
長崎純心大学付属純心幼稚園(長崎市) 池田洋子	
(各園の所在地は、道府県庁所在地は市の名前のみ、その他は都道府県名から表記いたしました。)	
第4章 モンテッソーリ教育の未来と日本モンテッソーリ協会(学会)	
(1) モンテッソーリ教育が日本の幼児教育実践に果たす役割	天野珠子 72
(2) モンテッソーリ教育が日本の幼児教育研究に果たす役割	相良敦子 74
(3) 日本モンテッソーリ協会(学会)の今後の在り方	前之園幸一郎 76
(4) 日本でのマリア・モンテッソーリの幼児教育の受け入れ について思うこと	ドメニコ・ヴィタリ SJ 78
資料編	
日本モンテッソーリ協会(学会)の紹介	82
日本モンテッソーリ協会設立趣意書・会則(現行)	83
全国大会のあゆみ	87
学会誌『モンテッソーリ教育』の目次(第38号~49号)	88
ルーメル賞 江島正子	91
日本モンテッソーリ協会(学会)ルーメル・モンテッソーリ奨励基金規定	92
ルーメル先生を偲ぶ「ルーメル通り」の誕生—フランツ・ヨゼフ・モール SJ	93
歴代理事ならびに監事	94
他学会におけるモンテッソーリ教育研究の現況について 甲斐仁子、三浦直樹、廣澤弓子	96
編集後記	98



ご挨拶



日本モンテッソーリ協会（学会）会長（理事長）
青山学院女子短期大学名誉教授
前之園 幸一郎

先人たちのご苦勞と関係者の皆さま方のご支援によりまして本協会は2018年に創立50周年を迎えます。これまで全国大会におけるご講演や出版その他の活動を通じてご指導を賜っている先生方から心温まるお励ましのご祝辞をお寄せ頂きました。日本の各モンテッソーリ教員養成コースならびに全国各地の本協会地方支部からはそれぞれに特色ある成立の歴史と現状についてのご報告を頂きました。さらに北海道から九州にいたる各地でモンテッソーリ教育による幼児教育を日常的に実践なさっておられる多くの幼稚園・保育園からその設立の経緯を含む現状について具体的にご教示を頂きました。積極的なご協力により、ここに本協会の50年の歩みを一望のうちに鳥瞰する冊子を編むことができました。ご多用中にもかかわらずご協力を賜りました皆さまに深くお礼を申し上げます。

1968年7月21、22日に上智大学において「第1回 日本モンテッソーリ協会総会並びに講習会」が開催されました。その誕生には「日本モンテッソーリ協会の設立と発展」に見られるように上智大学文学部教育学科の教授たちを中心とする「モンテッソーリ教育研究会」の存在が大きな契機となりました。初代会長には鼓常良氏が就任されました（1968年）。鼓常良会長のもとで「マリア・モンテッソーリ生誕100年祭」が京都において開催されました。第二代会長に就任されたのは平塚益徳氏です（1971年）。この時期には大阪万国博覧会開催後の経済的繁栄の余韻が未だ失せてはいませんでした。その繁栄の中で、本協会はまさに「忘れられた市民」（モンテッソーリの言葉）である幼児への注目を一段と強めていきました。

1977年に上智大学教授クラウス・ルーメル師が第三代会長に就任されます。ルーメル会長の30年にわたる在任期間中に全国組織としての本協会の現在の体制と基盤が確立されました。現在、北海道から九州まで全国に10地方支部が存在しています。会員数が100名を超える大所帯の支部から20名に満たない支部までその規模は地域により多様に異なり、その成立の経緯も同様ではありません。しかし各地方支部はそれぞれの条件の中で真摯に独自の活動を展開しております。協会本部は会員相互の積極的な研究活動を支援するために各支部からの求めに応じて援助をいたしております。地方支部の確立は、また全国大会のあり方を大きく前進させました。久しく東京開催に限定されていた全国大会は現在では各支部によって順番に各地で組織運営されています。地域的特性が色濃く反映された全国大会は年ごとに工夫が加えられ内容の充実したものとなっています。

本来ならば節目の年ごとにまとめられるべき記念誌が、今回初めて50周年記念誌として刊行されることになりました。本記念誌が日本におけるモンテッソーリ教育の発展の歩みを振り返る契機となり、また将来の幼児教育の方向を見定める一里塚となることを願っております。



祝 辞



東京大学名誉教授
養老 孟司

鎌倉市の富士愛育園というカトリック系の保育園で、およそ二十年以上にわたって理事長を勤めさせていただいている。直接に保育に関わるのではなく、人事予算その他、事業活動の大筋に関わる仕事である。

余計なことに口を出さない。それもあって、直接に園児と接する機会は少ない。それでも時に一緒に食事をし、虫採りに行ったりする。これは楽しいことで、それがなかったら理事長なんてとうの昔に辞めていると思う。

その間にモンテッソーリという言葉は何度も聞いていた。保育士さんたちが教習を受けたりするからである。具体的にどういうものかなあと思っていた。こちらは興味があっても、教習を受けている暇がない。

ある時、機会があって、子どもたちのカレンダー作りの結果を見せていただいた。こちらにはなんの予備知識もない。でも数十枚の作品を見ているうちに、さまざまなことに気が付いた。それでそのうちの三枚を除けて、これを作ったのは、どういう子ですか、と保育士さんに尋ねた。答えは明白だった。「ああ、三人とも問題のある子ですよ。それがよくわかりましたねえ。」

べつに私は問題児を発掘しようと思ったのではない。ただ素直にモンテッソーリ教育の実践の結果を見ていただけである。それですごいなあと思うと同時に、怖くなった。こういう方式で、子どもたちを計ることもできる。うっかりすると、試験に使われてしまうかもしれない。選別というヤツである。私は小さい時から、それが嫌い。子どもは自然で、自然というのとはもともとあるものだから、仕方がないのである。人は社会的動物だから、むろん社会に適應させなければならない。でももともとあるものは仕方がないので、それはそれとして受け入れる必要がある。自然とはそういうもので、そこに良し悪しはじつはない。自然食品と称して、自然を良いものとするのは、都市化が行き過ぎているだけのことである。地震も台風も自然だからである。子どももまた、自然だというしかない。

でも社会の中で生きていくと、どうしても能力を計りたくなったりする。それはそれでいいのだが、それを人生と間違える人が多くなった。詳しいことは知らない。でもモンテッソーリ教育とは、子どもを計るのではなく、子どもを理解するためのものである。それにはじつに有効だということとは、身をもって感じた。

ごく身近な存在なのに、まだまだ知らなければならないことは山のようにある。それが子どもである。そのための手段として、モンテッソーリ教育は優れたものに違いない。私はそう思っている。



祝 辞



国際モンテッソーリ協会事務局長
リン・ローレンス (Lynne Lawrence)

Fifty years – a very special moment to celebrate in anyone’s life – and perhaps even more so in the life of a group of dedicated people, as they are gathered in the Japan Association Montessori: JAM.

JAM has reached an age of distinction. They are mature, and have proven that all four planes of development have been “rounded” off. JAM is also full of energy, vibrant and continuing to promote Montessori education and reach to the deep depths of Montessori philosophy.

AMI is fortunate that a number of the driving forces of JAM have often been part of our mission and projects, and are close to our heart and endeavours. We cherish our relationship with JAM and the individuals that make up such a special group of people that study and further Maria Montessori’s work with so much love and knowledge.

We wish you, at least, another fifty years. Many congratulations on this milestone.

50歳の誕生日はすべての人の人生において記念すべき特別な年だと思ひます。同じようにモンテッソーリ教育への献身に満ち溢れた人々の集まりである日本モンテッソーリ協会（学会）：JAMにとっても、創立50周年を迎えることは大変喜ばしいことと思ひます。

日本モンテッソーリ協会（学会）は、人の発達に例えれば発達の四段階の成熟期を完成させたところであるといえるでしょう。エネルギーと生命力に満ち溢れた日本モンテッソーリ協会（学会）はモンテッソーリ教育を推進し、モンテッソーリ哲学の深淵を究め続けています。

国際モンテッソーリ協会（AMI）は日本モンテッソーリ協会（学会）の持つ機動力が私たちの使命とプロジェクトを助け、私たちと心とともに努力して下さっていることを大変幸運に思ひます。国際モンテッソーリ協会は、マリア・モンテッソーリの業績を多くの愛と知識をもって研究する特別な人々の集まりである日本モンテッソーリ協会（学会）との関係を大切にしています。

日本モンテッソーリ協会（学会）の今後50年、そしてそれ以後の更なる発展を祈念し、この特別な年へのお祝いの言葉とさせていただきます。 (訳 三浦勢津子)



モンテッソーリ治療教育の発展を願う



上智大学名誉教授
社会福祉法人からしだね理事長
春見 静子

日本モンテッソーリ協会（学会）創設50周年の金祝にあたり、前之園会長をはじめとする役員と地方支部の代表者の皆様、全国の協会メンバーの方々、そしてモンテッソーリ教育を実践している施設のすべての関係者の皆様に、心からお祝いを申し上げます。

1965年、上智大学の中に社会福祉専門学校が設立され、カトリックの精神を土台とした社会福祉主事と保育士の養成が始まりました。この専門学校の創設者はイエズス会士で、上智大学文学部の教授であったペトロ・ハイドリッヒ神父です。彼は講義は上智大学の教室で行うが、それと同じように大切なのは現場での実習であると確信し、すぐさま実習施設としての保育所の建設に取り組みました。彼はこの計画のパートナーとしてドイツの留学から帰国したばかりの赤羽恵子先生を選び、お二人の見事なチームワークにより、1965年8月15日、東京都足立区に、モンテッソーリ教育に基づく保育所、うめだ「子供の家」が誕生しました。

この地域は、下町の、どちらかというと経済的に裕福な子供たちはあまり多くなく、また、教育方法などへの親の干渉も少ない地域であったために、その当時は世の中ではまだあまり知られていなかったこのモンテッソーリ教育を保護者や家族やそしてなにより子供たちがごく自然にまた好意的に受け入れてくれました。しかし、地域の人以上に大きい関心を示したのは幼児教育に携わる専門家の人々でした。全国からたくさんの保育士や幼稚園教師たちが赤羽先生のモンテッソーリのクラスを見学するために訪ねてくるようになりました。こうしてうめだ「子供の家」は、保育所の設立の本来の目的であった社会福祉専門学校の実習施設という役割に加えて、モンテッソーリ教育の実践を学びたいという人々のための研修施設になっていきました。それはやがてモンテッソーリ教員養成コースへと発展し、さらに全国の研究者や実践者をつなぐ日本モンテッソーリ協会の設立を促すきっかけともなりました。

このうめだ「子供の家」の開所数年後には、ふと気が付くと自閉症やダウン症や視覚障害のあるお子さんが入園してくるようになっていて、保育士たちはもっと専門的な教育と指導がこの子供たちに必要だと訴えるようになりました。その時ハイドリッヒ神父は、モンテッソーリ教育はハンディキャップのある乳幼児の療育にも重要なカギを握っていると確信し、世界に目を転じて、すでにそのような実践をしている施設を探し始めました。そして、ドイツのミュンヘン小児センターを見つけ、その所長であり、ミュンヘン大学医学部の教授であった小児科医、テオドール・ヘルブリュッゲ氏と親交を深めることになりました。ヘルブリュッゲ氏は、モンテッソーリ教具の障害児への適応、障害のある子供とない子供のインテグレーション、個別とスモールグループによるモンテッソーリセラピーなどを提唱し、実践していました。彼との交流を通して1976年、うめだ「子供の家」の隣接地に待望の発達障害児のための通園施設うめだ・あけぼの学園が建設され、モンテッソーリ教育に基づく毎日通園のクラスやうめだ「子供の家」との組織的なインテグレーションが始まりました。その間、ヘルブリュッゲ氏自身は3度来日し、上智大学から名誉博士の称号を与えられました。彼は2014年94歳でその生涯を閉じるまで、日本におけるモンテッソーリ治療教育の確立とその発展を熱望していました。

私の願いは、今後の日本モンテッソーリ協会の活動の中で、これまで以上にモンテッソーリ治療教育の研究と実践を発展させていただきたいということです。



日本モンテッソーリ協会（学会）50周年によせて

東京学芸大学名誉教授 小川 博久

協会50周年おめでとうございます。思えば今から40余年前協会発足の間もない頃、私は北海道教育大学から東京学芸大学幼稚園教育教員養成課程に転職した折から協会と接点を持たして頂きました。教育学者として幼児教育を専門とするに当たってM.モンテッソーリの理論と実践は、この分野の研究者としてビギナーであった私にとって、基本的なテキストでありました。以来、幾度か協会と一緒に仕事もさせていただきました。お陰様で自分の理論構成に当たって遊具の設置を恒常的に変更しないといったモンテッソーリの考え方からは大きな影響を受けました。大学のゼミでは『モンテッソーリ・メソッド』の講読を定年近くまで続けました。また室内環境をどう構成するかについての知見を学ぶことが出来たのもモンテッソーリに負うところが大きいのです。協会の今後の発展を祈ります。

日本モンテッソーリ協会（学会）50周年

上智大学教授 荻野 美佐子

50周年、おめでとうございます。

たまたま書記をしていたことから、2002年の協会の第1回国内各コース責任者会議の議事録が手元に残っていました。会長のルーメル先生、AMIの松本静子先生、九州コースの藤原元一先生、乾盛夫先生、渡邊満智子先生、広島コースのヴィタリ先生、下條善子先生、前田瑞枝先生、京都コースの赤羽恵子先生、岡山真理子先生、板東光子先生、上智コースからは松本良子先生、荻野が参加し、5コース13名が、名古屋の全国大会の会場となった名鉄犬山ホテルで、各コースのレベル向上のために何をしていくべきかを話し合いました。錚々たる先生方から、それぞれのコースをどのように充実させるかの熱い思いを感じ、この時のことを印象深く覚えております。遠い昔のようでもあり、ごく最近のようでもあります。上智コースは2007年3月に34期生（ディプロマ番号996番まで）をもって閉講したことから、私自身は上智コース、そして協会との関わりは実際には数年だけであるにもかかわらず、濃密な時間を共有させていただきました。それらの日々とそこでの豊かな出会いに感謝し、当時の熱い思いを引き継いでますます充実、発展されていくことを祈念しております。



よろこびと感謝のうちに

—『こどものせかい』に溯るご縁から—

純心女子学園 理事長 Sr.片岡 千鶴子

日本モンテッソーリ協会（学会）の設立50周年を喜び言祝ぎます。長崎純心大学は日本モンテッソーリ協会（学会）会員校として人文学部児童保育学科に「純心モンテッソーリ教員養成コース」を設置し、教員養成の一翼を担っておりますが、協会のご協力なしにはなし得ぬことと感謝申し上げます。思えば、本学のモンテッソーリ教育との出会いは、至光社から初代学園長シスター江角ヤスに贈呈されていた『こどものせかい』の絵本に溯ります。私は学園長の机の上に置かれた絵本を何度も目にした記憶がありますが、武市八十雄先生とモンテッソーリ教育との関わりについては無知でした。ところが1972年、本学に教育学専攻の教員が着任すると、早速シスター江角の発案で学内にモンテッソーリ教育を主題とする「幼児教育研究会」が発足、翌年には純心聖母会員二人を「上智モンテッソーリ教員養成コース」に派遣、継続的に教員養成に取り組むと同時に幼稚園現場にモンテッソーリ教育を導入して参りました。その後、33年の歳月を経て純心大学にモンテッソーリ教員養成コースが開設され、毎年10名余の教員資格取得者が卒業しています。今後ともモンテッソーリ協会（学会）の発展を祈ると共に会員校の責務を担って参る所存でございます。

自由と自立

日本モンテッソーリ協会（学会） 監事

イエズス会司祭 ギュンタ・ケルクマン SJ
(Günther Kerkmann SJ)

私と末弟は16歳離れています。その弟が初めて歩いた日のことは、今もよく覚えています。私はソファに座り、1メートルほど離れた所に弟を立たせ、「ここまでおいで」と手を伸ばしました。最初、彼は全身を預けるように私の手の中に倒れ込んできましたが、何回目かに2～3歩歩いて、私の膝につかまりました。さらに続けると、突然、トコトコトコ！と5～6歩歩き、「ヘッ」とつぶやいてから傍のリビングテーブルの周りを勢いよく走り始めたのです。この出来事には人生の重大なポイントが現れています。「自由」と「自立」です。それはモンテッソーリ教育が一貫して目指してきたことでもあります。

私たちは皆、自らの人生を自由に歩む権利があり、同時に自立して生きる責任を負っています。真の愛とは、相手をありのままに受け容れ、その人の自由な歩みと自立を温かく見守ることです。親が子どもの人格や個性や能力を無視して、勝手な理想を押し付けるのは束縛にすぎません。

初めて歩いた直後に弟が言った「ヘッ」という一言は、私には「歩くということがわかったぞ」という、喜びの声に聞こえました。自由に歩くと多くの発見や気づきがあります。そしてそれが心を育み、感性を磨き知恵を伸ばしてくれるのです。自由と自立は人間の成長を促してくれるものに他なりません。



日本モンテッソーリ協会創立50周年に寄せて

学習院大学教授 佐藤 学

日本モンテッソーリ協会が創立50周年を迎えられたこと、心からお祝い申し上げます。

モンテッソーリが1907年に貧しい子どもたちのために創設した「子どもの家 (Casa dei bambini)」の「家 (casa)」は、アメリカの教育学者ジェーン・ローランド・マーティンが指摘するように「ホーム (home)」を含意していたと思います。だからこそ、「子どもの家」では数々の教具が柔らかく子どもたちを迎え入れ、一人ひとりの居場所を提供し、もの静かで穏やかモノと人の繋がりの中での発達が保障されていました。人は誰しも家族 (family) なしでも生きていけるでしょうが、心の絆となる居場所 (home) なしでは生きていけません。子どもの発達にとっては尚更です。モンテッソーリの「子どもの家」の歴史的意義は、今の日本において、いっそう輝きを増していることを確信しています。

祝辞

白梅学園大学学長 汐見 稔幸

モンテッソーリ女史が子どもの家をローマに開いてほぼ110年。

100年以上経つのに、その影響が衰えるどころか広がりつつあるのは、考えてみたらすごいことだと思います。それはひとえに女史の人間学 (人類学) とその教育観の確かさ故でしょう。

私は女史の思想に出会う前から、子どもはどう育つ存在かということを私なりに模索してきました。最近の脳科学や発達学も同じように、子どもはどう育つ存在かということをそれぞれの方法で模索しています。今気がつくと、私自身気がついたことと、脳科学等が発見したことと、モンテッソーリ女史が発見したことが、不思議なことに、かなり重なっています。いや、不思議ではないのかもしれませんが。子どもに対する共感的で温かいなまなざしを介して冷静に見いだしたことには普遍性があることが、現在になって確認されているだけなのかもしれません。知人の脳科学者は、脳科学的に見ても、発達に敏感期があることがわかっていて、それを脳科学では臨界期と名付けていることを教えてくれました。これからは、モンテッソーリ教育と名付けなくとも、女史がめざしていた保育・教育の内実が世界の教育界にじわじわと広がっていく時代になっていくのではないかと感じます。



今こそ自然や人との関わりを大切に

JT 生命誌研究館館長 中村 桂子

日本モンテッソーリ協会（学会）が50周年をお迎えになりましたことを心からお祝いを申し上げます。子どもたちの明るい声が響き、笑顔が広がる社会であることを願う者として、100年以上前に子どもの本質を捉えた教育を始められたマリア・モンテッソーリのすばらしさに心打たれます。そして、その考えを受け継いで日本の子どもたちのために長い間活動を続けて来られた皆さまに、心からの敬意を表します。

生きもの研究をしながら、生きものとしての子どもたちが持つ力を伸ばすことが最も大切だと思っている立場から見ると、モンテッソーリが「子どもの家」を設立した約100年前や、日本モンテッソーリ協会（学会）が誕生した50年前に比べて、今、子どもたちの環境が大きく変わっていることが気になります。生活が都市化・機械化し、自然離れしています。子どもたちの適切な環境として、自然と接する、人と人との関わりを大事にするという、本来あたりまえとされてきたことを、改めて考える必要がある時代になってしまいました。

モンテッソーリ教育にある、日常の中の自然や人との関わりを大切にするという視点を今後の活動の中でより一層重視して下さることをお願いし、これからの御発展をお祈りいたします。

「お母さまと子どものため」

サンパウロ『家庭の友』編集長 山内 堅治

日本モンテッソーリ協会（学会）50周年、おめでとうございます。

カトリックの月刊誌『家庭の友』にモンテッソーリ教育の記事が掲載されるようになったのは、1971年1月号からです。それ以来、今日に至るまで約45年間、モンテッソーリに関する記事を掲載し続けています。その間、日本モンテッソーリ協会の方々にも執筆していただきましたことを心から感謝いたします。

小誌の1971年1月号表紙に、「世界的に有名な、お母さんと子どもたちのための『モンテッソーリ教育法』」とあり、最初の記事は「お母さまと子どものためのモンテッソーリ教育」と題して松本静子先生が執筆しています。

「ことしの夏やすみに、駆け足で弟妹たちの家庭を訪問し、育ちつつある幼い姪や甥を見て感じたことは、なんとかして、せっかく勉強してきたモンテッソーリ式教育法を、妹たちをはじめ、若いお母さまがたにお家でなさっていただけたら、どんなによいだろうということでした」と記されています。そして、今も何らかの形で「お母さまと子どものため」に貢献していることが感じられます。

変動の激しい時代にあって、いつも原点に返りながら、多くの方々にモンテッソーリ教育の魅力が浸透していくことを願っています。



祝辞

ドイツ・ミュンスター大学 名誉教授 ハラルド・ルードヴィッヒ
(Prof. em. Dr. Harald Ludwig)

日本モンテッソーリ協会（学会）創立50周年おめでとうございます。日本と昔から関係の深いミュンスター大学のモンテッソーリアンを代表しご挨拶を申し上げます。

日本とドイツの間には50年以上、否60年に渡っての密接な関係が存続しています。

モンテッソーリ教育の理論分野では、小生を含めてこのミュンスター大学からはパウロ・オスワルドやギュンター・シュルツ-ベネシュやヒルデガルト・ホルシュテーク、ミュンヘン大学のテオドル・ヘルブルック、ヴュルツブルグ大学のウィンフリット・ベームの各教授が日本の堤常良や上智大学のクラウス・ルーメル SJ、平野智美や江島正子のそれぞれの大学教授とモンテッソーリ著作物の出版を通して親しい交流が行われています。また、実践分野では、京都の赤羽恵子や長谷川（旧姓 根岸）美枝子の各先生方と深く連絡を取り合っています。日本モンテッソーリ協会がこのような交流を一つの根っことしながらここに金祝を迎えられることは大変嬉しいことです。そして私たちにとっても日本とのご縁が持てて大変に光栄です。

オランダのノルドヴェークアーンゼーにあるモンテッソーリの墓石に刻まれているように、子どもたちの教育によって、未来の世界へ向けて、ご一緒に平和な世界を築く努力を行っていきましょう。
(訳 江島正子)

教具を通して心を育てる

ノートルダム清心学園 理事長 渡辺 和子

学会の50周年を、心からおよろこびいたします。今から数10年前にアメリカから日本にいらして、その当時、まだ知る人の少なかったモンテッソーリ教育を教えて下さったシスター・クリスチナマリーは、この記念式典をどんなにか、お喜びだろうと思います。

私は、その節、通訳をするように命ぜられて、苦勞をいたしました。私自身は4人姉妹の末っ子として生まれ、育ち、幼い子どもたちの教育と無縁の環境にいたからです。そんな私は、幼い子どもたちが秘めている力、それを年齢に応じていかに開花させるかを教師の立場として考えることを習いました。また、子どもたちがすでに持っている成長力、集中力が教師の愛と信頼によって成長してゆくを見るのは、すばらしいことでした。子どもたち一人ひとりが皆それなりの思考力、自分で仕事を完成する意欲と喜びを持っています。

通訳をしていて感じたことは、シスターが、いつもモンテッソーリを、教具の単なる使い方としてでなく、宇宙をつかさどる大いなるもの、神の造化としてお示しになっていたことです。今後とも、この教育が子どもたちの心に喜びと同時に畏敬の念を持たせるものであるよう祈ります。

(渡辺和子先生は本誌編集集中の平成28年12月30日ご帰天なさいました。心から哀悼の意を表します。)



さらなる活動を願って

株式会社教文館代表取締役社長 渡部 満

日本モンテッソーリ協会（学会）が50周年の記念の年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。児童の観察から生まれ、科学的知見に基づきながら、自主性・独立心・知的好奇心を重んじるモンテッソーリの独自の教育は、社会に貢献する多くの人材を育む苗床の働きをしてこられたと思います。カトリックの信仰を背後に持つことも、日本の社会においては大きな意味を持つことと思います。商業主義に毒されがちな日本の幼児教育において、これからもさらに意義ある活動を続けられますよう、心から願っております。

(小川博久先生以下お名前の50音順に掲載させていただきました。)

マリア・モンテッソーリの珠玉のことばから

La maestra insegna poco, osserva molto, e soprattutto, ha la funzione di dirigere le attività psichiche dei bambini e il loro sviluppo fisiologico. Perciò ho cambiato il nome di maestro in quello di direttore.

(*Il metodo*, edizione, critica, p.437)

先生はほとんど教えないでしっかり観察します。とりわけ子どもの心理的諸活動と身体的発達を導く役割を担っています。ですから私は、先生をマエストロではなくディレクターと呼ぶことに改めました。

第1章



モンテッソーリ教育再認識の動きと
日本モンテッソーリ協会の設立



(1) 日本モンテッソーリ協会設立前史

埼玉大学名誉教授 林 信二郎

我が国にモンテッソーリ教育が初めて紹介されたのは、ローマで最初の「子どもの家」が開設されてからわずか5年後の明治45（1912）年のことであった。それから約半世紀後の昭和43（1968）年に「日本モンテッソーリ協会」が設立された。そして今年、平成29（2017）年、協会設立50周年を迎えることとなった。

ここでは、本協会設立に先立つ約半世紀間の我が国におけるモンテッソーリ教育の歴史を概観し、これからの「日本モンテッソーリ協会」の果たすべき役割に何らかの示唆となるものとした。その歴史については、吉岡剛の諸労作が残されており¹⁾、それを引き継ぐ形で、西川ひろ子の研究²⁾や前之園幸一郎の研究³⁾などがある。本稿はそれらの成果を主な参考資料とした。

I 受容と挫折の大正期

1 最初の熱心な受容

我が国への最初の紹介は、「萬朝報」がその「言論欄」で小学校教育の改革の視点から「モンテッソーリ教育」と題して取り上げたものであった。これを発端として、東京女子師範学校講師の倉橋惣三が幼児教育の立場から、京都帝国大学助教授の野上俊夫は教育心理学の立場から、日本女子大学付属豊明小学校主事の河野清丸は小学校教育の立場から、この教育に大きな関心を持ち、積極的にその紹介にあたり、最初の導入に一定の役割を果たした。

倉橋は、いち早く明治45（1912）年京阪神聯合保育会で「保育の新目標」なる講演で、モンテッソーリ教育を取り上げ、保育者たちの関心を引き起こした。

野上は、大正元（1912）年「モンテッソーリ女史の科学的教育学を読む」なる論文を『教育学術界』に掲載するとともに、その教具にも関心を示し、研究室で作成した教具を持参して、講習会などでその紹介に努めた。

河野は、「大正八大教育思潮」における「自

動教育論」で知られるが、小学校教育の改革の契機としてこの教育に期待し、大正3（1914）年『モンテッソーリ法と其応用』を出版している。

当時のこの教育に対する関心や期待は、①自発性・自由・個性の尊重、賞罰の廃止、教師の位置と役割などの教育の原則と方法論 ②観察の重要性などの科学的研究方法と心理学的研究成果 ③モンテッソーリ教具への関心と評価、などであった。

先に挙げた3者に代表される研究者たちが、主に京阪神に於いて、講演会・講習会を開き、そこに参加した多くの受講者は大きな期待をもって受け止めた。例えば、神戸市立幼稚園長望月くには、工夫して教具を自作し、感覚教育の成果を含めて「驚くばかりの好結果を得ました」と報告している。また、大阪市立江戸堀幼稚園長の膳たけも、この教育法を組み込んだ結果、児童の状態が改善されたと報告している。大正2（1913）年には、東京のフレーベル館が「モンテッソーリー式教具」の販売を始めてもいる。

2 急激な関心の低下と衰退

このような関心の高まりの中で、急激な関心の低下をもたらせるきっかけとして、野上俊夫によるイタリア訪問記がある。彼は、すでに述べたように、いち早くこの教育の優れている点を評価し、積極的に導入の役割を果たしてきた。ところが、視察に出かけたイタリアでは、モンテッソーリに会えず、そこで見たものは彼の期待を大きく裏切るものであった。それを大正6（1917）年「大阪毎日新聞」に3日間にわたって「赤裸々に見たモンテッソーリ教育—本家本元の伊太利国を視察して驚き帰った土産話—」なる記事を連載し、イタリアの教育的現実に理解を示しつつも大きな失望を感じたと報じた。

実践者たちからも、この教育の限界の指摘や失望が報告されるようになった。例えば、前述

の望月くには、大正4年に開かれた幼稚園関係者大会に於いて、「根本に於いて何ら新しい点はなく、モンテッソーリが行ったから効果があったのであって、私たちが不用意にこの教具を用いても芳しい成果は期待できないであろう」とした。そこには、「モンテッソーリ教具」は一般の幼稚園では入手することが困難であったことや、その正しい活用法を学べる教員養成機関のような場が用意されていなかったことも、その一因としてあろう。

以上のような経過の下、この教育への関心は低下し、師範学校の授業の中で取り上げられることはあっても、保育界で大きな話題となることはほとんどなくなっていった。

II 停滞と再認識・再評価の昭和期前半

1 停滞期（終戦・昭和20年まで）

昭和期に入ると軍国主義的色彩が濃厚となってきた。国策としても、教育政策としても、精神主義、鍛錬主義、集団主義的傾向を強め、その中で、個人の自由と自発性の尊重を掲げるモンテッソーリ教育はその時代精神と合わないものとして排斥されていった。研究者の中にも、国策に応じた教育論を展開する者が多くなっていった。さらに、当時支配的であった発達観が、内的成長力を信頼する発達観とは相容れないものであった。

2 再認識・再評価期（戦後・昭和20（1945）年から昭和40（1965）年頃まで）

昭和27（1952）年5月、モンテッソーリは82歳の生涯を閉じた。それを契機に平塚益徳が、NHKで「モンテッソーリ女史を偲ぶ」と題するラジオ放送をし、この教育は時代を超えた普遍性を持つものであるとした。

幼児教育界においては、戦後文部省から出された『保育要領』は、平和国家、民主国家として再出発するにあたり、幼児期から子どもの自由・自発性を大切にしなければならないとの理念に基づくものであった。しかし、それがその後、保育者中心の教え込み的設定保育へと変容していった。そのような幼児教育の在り方に疑問を持つ保育者たちがモンテッソーリ教育に改めて出会い、そこから学び実践を深めようとする動きが出てきた。

このような流れの中、昭和32（1957）年、鼓常良が『幼児の秘密』を出版し、昭和39年にはドイツのモンテッソーリ教員養成コースを出て帰国した赤羽恵子を招いて京都の桂に「月見が丘子供の家」を発足させた。

このころから、この教育に関する多くの翻訳書や著書が出版され、学会での研究発表もなされるようになった。一方、海外のモンテッソーリ養成機関を出てディプロマを取得して帰国する実践者も増えてきた。このように、モンテッソーリ教育の理論と実践を学べる条件が整ってくるにつれ、組織的な啓蒙普及活動と研究的活動のできる場の必要性が高まった。それが「日本モンテッソーリ協会」設立への動きとなっていったのである。

以上、我が国のモンテッソーリ教育の、受容と挫折の大正期、停滞と再認識の昭和期という約半世紀に及ぶ歴史の流れを見てきた。そこから見えてくるものは、モンテッソーリ教育もまた時代精神や国家の教育への期待から無関係ではいられないという現実である。そうであるなら、その認識を明確に持つとともに、それらに対峙できるしっかりとした教育観とその実践力が必要とされるということである。

註)

- 1) 吉岡剛「我が国における Montessori Method の移入」—その歴史と現在の動向— (2) 聖母女学院短大『研究紀要』第5輯 昭和48年(1973年)
吉岡剛「モンテッソーリ法への『第1期』対応」—受容と挫折の1サイクル—
池田進・本山幸彦編著『日本の教育』第一法規 昭和53年(1978年) pp.431-483
- 2) 西川ひろ子「野上俊夫と大正期のモンテッソーリ法」『乳幼児教育学研究』第5号 平成8年(1996年)
- 3) 前之園幸一郎「戦前日本におけるモンテッソーリ教育の歴史」『モンテッソーリ教育』第48号 日本モンテッソーリ協会 平成27年(2015年)



(2) 日本モンテッソーリ協会の設立と発展

元事務局長（昭和53年4月～平成4年7月）・上智大学名誉教授 平野 智美

I 上智大学文学部教育学科教員の動向

日本モンテッソーリ協会の設立に当たって、最大の献身的努力をしたのが、上智大学文学部社会福祉学科教授ペトロ・ハイドリッヒ師であった。師の要請に応じたのは上智大学文学部教育学科教員たちであった。協会設立の1年前1967年に、学科の教員たちは「モンテッソーリ研究会」を創ってモンテッソーリの幼児教育についての研究会を開催していた。研究会の事務局は同大学教育学研究室にあった。

この「モンテッソーリ教育研究会」という名称は当初から決定されていたわけではなく、神藤克彦教授（教育課程・方法）とハイドリッヒ師の2人のみがモンテッソーリの名前をつけるべきだと主張したが、平井久教授（学習心理・実験心理学）は教育という広い概念の中にモンテッソーリ教育をも含めればよいと主張した。こうした動きがあって、結局、1967年の会議で「児童発達研究所」という名称になった。会議の出席者は、ハイドリッヒ師、平井久教授、クラウス・ルーメル師（西洋教育史）、平野智美教授（教育哲学）、山下栄一教授（教育心理学）、菊野正隆教授（理工学部・化学）、赤羽恵子氏（モンテッソーリ教育実践）の7氏であった。

II 上智大学児童発達研究所主催の全国大会の開催

モンテッソーリ教育法を中心とした研究会はその事務局が上智大学教育学研究室に移転するまでは、ハイドリッヒ師の努力で上智大学附属保育所うめだ「子供の家」におかれていた。研究会を要望する全国各地の保育者の熱意に応じて、最初の全国研究会が下記の要項で開催された。

日時 昭和42（1967）年7月31日～8月4日、午前9時～午後3時30分
場所 上智大学附属保育所うめだ「子供の家」

講師 クラウス・ルーメル（上智大学教授）、中修三（前大阪市立大学教授・大阪三国丘病院長）、神藤克彦（上智大学教授）、赤羽恵子（国際モンテッソーリ研究会会員、うめだ「子供の家」主任）、松本尚子（国際モンテッソーリ研究会会員）

この講師陣から、この全国研究大会が、上智大学の教員だけの研究会というような、閉鎖的グループの活動ではなく、開かれた、開放的な活動を行ったということがうかがえる。

III 日本モンテッソーリ協会設立

日本モンテッソーリ協会設立趣旨書（1967年8月4日付け）によれば、「幼児の教育、幼児の世界について、今日ほど関心が寄せられていることはありません。けれどもいかに教育していくかということになると、幼児に関するおびただしい書物の発行にもかかわらず、種々困難にぶつかっているのです」。設立準備会を発足させた人たちはモンテッソーリ教育の研究成果も披露しながら、さらに「子供には自分を教育する力があるという見解と、その可能性を実証して、現代の教育界に新しい光を与えているのがモンテッソーリ女史の思想とその遺した業績の意味に他ならない」、「私たちはこの真に子供の自然と本質に根ざした教育法を深く研究し、よって、次の時代に明るい希望をつなぐことができると信じております」と訴えていた。

設立準備会の発起人は、鼓常良（京都・桂幼児教育研究所）、ハイドリッヒ師、クラウス・ルーメル師、神藤克彦、菊野正隆（上智大学）、伊藤保郎（京都）、塚本伊和男師（東京）、平塚益徳（国立教育研究所）、マルコム・マックファーデン師（奈良）、鷹嘴達衛師（仙台）、中沢儀三朗（山形）、小谷善一（愛知県立大学）、松本尚子（東京）、赤羽恵子（東京）、浅井陽子（東京）、野辺地きみ子（東京）、満代彰子（大阪）であった。事務・会計担当は南郷治代（東京）。

事務局は上智大学教育学研究室。そして、これらの人々が後の「日本モンテッソーリ協会」の役員になった。

1968年7月21日に開催された「日本モンテッソーリ協会」設立総会の審議・決定に従って「会則」が定められた。役員構成や「会則」の制定についての詳細はルーメル師の『モンテッソーリ教育』(41号)掲載の「教育エッセイ」をご覧ください。

日本モンテッソーリ協会の設立に関して、月見ヶ丘子どもの家の創設者である鼓常良氏(初代会長)は、ペトロ・ハイドリッヒ師同様献身的な努力をした。この「子どもの家」はモンテッソーリ教育法の実践のためのものである。また鼓氏はモンテッソーリの著作の訳書をすでに1957年に『子供の秘密』として出版したが、その新装改訂版として1968年、協会創設直後に『幼児の秘密』が国土社から刊行された。

IV マリア・モンテッソーリ生誕100年祭の開催

1970年は、モンテッソーリ生誕100年であった。鼓会長はこの機会をモンテッソーリ教育の理論と実践の研修と普及のための好機と考え、「生誕100年記念祭」を企画した。その会場を日本初の国際会議施設、「国立京都国際会館」に決定した。大会プログラム等はルーメル師の『モンテッソーリ教育』(41号)の「教育エッセイ」を参照されたい。

国際会議はそれなりの成果を上げたが、懸念されていたように50万円の赤字となり、協会の財産は0になった。正義感の強い鼓会長は責任を取られて、会長を辞任された。第2代会長には坂本堯師(上智大学教授・『モンテッソーリ教育』編集長・事務局長等)の強い推薦により、平塚益徳氏(九州大学教授(比較教育学))の就任が決定した。氏は学研創業者と親しい間柄にあった。理事長は神藤克彦氏が継続。事務局も坂本研究室に移動した。

学研からもモンテッソーリ教育に大きな貢献がなされたが、日本モンテッソーリ協会は例えば、モンテッソーリ教育の普及のための「通信教育」開講について学研と同意見ではなかった。これを巡る協会と学研とのぎくしゃくとし

た関係については、『モンテッソーリ教育』(41・43号)の「教育エッセイ」において、ルーメル師が詳しく述べておられるので、参照されたい。

日本モンテッソーリ協会の事務局は1975年に学研に移った。1977年、平塚会長は自ら辞任した。その後の理事会において、第3代日本モンテッソーリ協会会長にクラウス・ルーメル師(上智大学教授)が選任され、ルーメル師は承諾した。事務局は再度上智大学内の上智会館へと移行した。

V モンテッソーリ「教員(師)養成」コースの設立

日本モンテッソーリ協会の創立後の使命は、「教員(師)養成コース」の設立であった。

モンテッソーリ教育は理論と実践が不可分の関係で構成されている。コース運営に際して、理論面は協会設立に関わった大学教授たちが担当できた。しかし実践指導者になるには、外国で「ディプロマ」を取得する以外になかった。モンテッソーリ教師養成コース組織化への動きも、前述のペトロ・ハイドリッヒ師によって始まった。

ルーメル師の『モンテッソーリ教育』(42号)の「教育エッセイ」は、すべてがこの「教員(教師)養成コース」の発足に充てられている。紙幅の都合上ここで詳らかに紹介することはできないので直接に同書をご覧ください。ハイドリッヒ師とマリオ氏(当時国際モンテッソーリ協会書記長)との間には「行き違い」があり、取り交わされた「仮契約案」(Vertragsentwurf)は現実とはかなりの乖離がある。それでも1970年4月、「上智モンテッソーリ教員養成コース」が開講された。

その後、協会が認可した4コースを加え、誕生した各支部とともに日本モンテッソーリ協会の活動を相互に支えあってきた。

(本稿の執筆に際しては『モンテッソーリ教育』(41号～43号)を参照した。)



(3) 協会（学会）へ

前事務局長（平成4年8月～平成22年7月） 松本 良子

§ はじめに

今回の起稿に当たって、先ず念頭に浮かびましたことは、「その端初は、平成4年7月30日（木）16時40分、『広島国際会議場に於いて開催の平成4年度総会決議決定』にある」でした。当日会場後方通路側に座していた私に、ルーメル会長は響めたお声で、きっぱりと「今日総括をやって下さい、さもないと会長も辞任します、『No』と言ってはいけません。」と、おっしゃると即足早に檀上所定の位置に着かれました。私はお言葉の真意を計りかねましたが、議事進行に伴うその意味判明結果には、戸惑いながらも、次第に様々な事実を想起しつつ、自らの思い・考えの鎮静を覚えました。結果的には弱い信仰に、見えざる天からの強い力と、身近な親しい友垣からの励ましと働き、強い決心に至ったのでした。

同年9月1日（月）午前10時から、協会事務局に於いて、ルーメル会長お立ち合いの下で、平野智美前事務局長との引継ぎをさせていただきましたが、「全て監査済みであるから」との理由で、引き継がれました物は、残高が初頁第一行目に印字された真新しい郵便貯金通帳と、整理半ばの会員名簿原稿のみでした。私が今後のご指導を乞うと快く「分からないことは聞いてください」とおっしゃられ安堵いたしました。翌日、引き継ぎに関します事実をまとめ、会長に御覧頂きますと、ルーメル先生は、「いや～全くゼロからのスタートですねー！」と笑いながら優しくおっしゃり、「上記の通り相違ありません」の文をご覧になられ、すぐに自筆自署して下さいました。

§ 胎動期

計らずも急遽、大会事務局に遣わされた者への会長のお心配りは、職務に長けた人格者山辺二郎様のご紹介、又上智コース同窓会長・副会長・コース講師方を委員に、御自ら委員長とられて実行委員会を立ち上げられ、SJハウス

会議室お手配もなさり、初委員会開催となりました。当時の私は、「何とかして全国大会の名義後援を得たい」と切望していましたので、平成5年3月15日（月）友人夫君紹介で、東京都総務局学事部学事第二課へ、同18日（木）と6月7日（月）には、杉山敦子会員知人の国会議員氏の紹介を得て、文部省初等中等局幼稚園課へ各願い出ましたがお断りでした。私は諦めず平成7年5月15日（月）文部省新任の水島和夫課長に願い出ますと、「このモンテッソーリという固有名詞を外して、単に、乳幼児教育とすれば可能だが…」とのことで、当方としましては、その固有名詞こそが大切、と申して下りました。以後第33回迄、毎年A4版1枚に当該大会内容が一目で判る報告書を持参提出致しました。因みに厚生省の担当者諸井奥氏もだめでした。然し、前述の山辺氏のご協力もあり、会長中心一丸となった委員の努力は、満席参加者の満足度も大変高く、一同感謝の終了でした。

§ 始動期

平成7年7月29日（土）～31日（月）の第28回全国大会開催中の一日・新旧全国理事会に於いて、藤原元一理事は、「本会の学会申請希望」を提案され、旧理事会は新理事会に全委任。同理事は翌日昼休みの新理事会に於いては、学会申請具体的活動員として、クラウド・ルーメル、松本良子、天野珠子、藤原元一を希望するとの提案をなさり、承認されましたので、同日16時から開催の平成7年度総会に上程、議決・承認され、上記4名は委嘱されました。

§ 実働期

日本学術会議（以下、学会と略す）第17期（本会初）の登録申請は、概ね以下の通りに行いました。

1. 平成8年2月13日（火）14時～16時於学

会講堂「申請説明会」に、天野珠子、松本良子出席。

2. 平成8年3月25日(月)13時～約40分、於学会、天野、松本は、3年間の総会議事録、収支決算書、会員名簿持参し、日本学術会議協力財団の宮、倉林氏の指導を受けますと、両氏は、(1)このままでは通らぬ公算大である。(2)理由は、会員に就いての規制なし、何を以ってこれらの会員を研究者と見なすのかが不明。と言われましたので、私たちは、心からの熱い思いで穏やかに、代る代る大体次の事を申しました。《1》M・モンテッソーリは、自らの教育に就いて科学的教育、と言ひ、医師として培った理念から、実際に多くの子どもを規律ある自由環境下で詳細・正確な観察結果から、私は子どもたちから学んだと、子どもに関して貴重な多くの新発見をなした。その事実は現在も否定されるものではなく、みな肯定済み。《2》当会会員は、その教育法修得の理論家・実践者である。とりわけ日々子どもと育ち合う者たちの誠実な地道な取り組みは、勤務園・支部研修会・全国大会に於ける研究発表・実践報告の場での切磋琢磨が本会の現状であると申しましたら、両氏は、分かりました、と穏やかでした。

3. 平成8年5月9日(木)申請書類持参提出。提出物：(1)会則(2)役員一覧(3)役員カード(4)第25～27回全国大会発表要旨集録(5)『モンテッソーリ教育』第25～27号(6)平成4年度総会議事録・収支決算報告書(7)会員名簿・入会申込書以上を纏めて持参し、この日、私は協力財団へのお顔出しを願って会長にも同道して頂きました。会長は、「大変な努力でしたねー」と労って下さいました。

4. 平成9年2月7日(金)学会から依頼された次の3種書類送付。(1)会員候補者カード、(2)承諾書(3)推薦人・同予備者承諾書。上記は全て、常任理事会承認済みで、(1)は、当会会員のお二方、(3)は、会長・事務局長でした。

5. 平成9年3月17日(月)学会会員推薦委員会より、当会推薦のお二方の有資格通知を受信。

6. 平成9年5月7日(水)14時～16時学会の推薦人会議にルーメル会長は出席なさいました。

7. 平成9年7月18日付、学会推薦管理委員会の近藤次郎委員長より、第17期日本学術会議会員124名の決定通知書を受信。本会からの推薦両氏の記載は残念ながらありませんでしたが、本会は、学術研究団体として登録されました。

そして、本会は以後、第18期(平成11年～平成13年)、第19期(平成13年～15年)も、同様に会員登録の申請を行いました。

第18期の推薦者は、第17期と同じお二方。そして第19期では、お三方が推薦者となられましたが、お三方とも会員候補者としての資格あり、とされながらも、会員決定には至らず残念な結果に終わりました。第18期・19期とも、登録申請のために提出する書類、又その日程等は、殆ど変わらずでした故、紙面の関係上省略させて頂きました。

§おわりに

平成22年7月29日(木)17時～18時『徳島県あわぎんホール』に於いて開催された平成21年度定期総会に於ける私の辞任決意は、最適後任者・鈴木弘美先生を用意された天の計らいへの感謝の故でした。その末席を汚しておりました17年間のうちの8年間は、標題のために微力を尽くさせて頂いた事を、今、改めて想起し、3期連続の登録達成は、実に本会創立時からの諸先生方の学術研究団体に相応しい会運営と全会員方のご努力の賜物と実感し感謝の念に溢れております。そして、国内外共激動の昨今、少子・高齢化社会の将来を考え、地球生物最後の登場種であります人類、又その一員である者はみな、今、この瞬間も如何に生きるのか…と、深くふかく考えさせられ、思い悩み乍らもなお生かされてある限り、やはり、幼い生命が尊ばれ、愛されて育まれます様にと祈りつつ、本稿の機会を感謝して擱筆させて頂きます。有り難うございました。

(4) 日本モンテッソーリ協会（学会）の現況 —今までとこれからの狭間で—



日本モンテッソーリ協会（学会）事務局長（平成22年8月～） 鈴木 弘美

平成22年7月29日の当協会（学会）第43回大会（徳島）時に行われた総会において、私は協会（学会）事務局長として承認された。平成28年5月現在、そろそろ2期目が終わろうとしている。

私は今から約40年前、5年間ほど、上智モンテッソーリ教員養成コースの事務をお手伝いしていた。そのころ上智会館1階に上智モンテッソーリ教員養成コースと日本モンテッソーリ協会の共同の事務局が存在していた。私は当時、教育学研究科の大学院生であった。隣の机が協会の事務局であった。平野先生が事務局長をされていたころ、大会のお手伝いをしたこともあった。

しかし、昭和58年、私は大きな節目を迎え、やっと手に入れることができた短大講師の仕事も断念して、12年振りに帰郷した。それ以来約30年、家の中でのみ暮らしてきたので、事務局長をお引き受けしたのはずいぶん向こう見ずな決断であったように思う。私はおそらく、事務局長であることとお手伝いをするこの違いをわかっていなかったのだろう。事務局長として仕事をしていて私がしばしば感じること、それは、「知らない」とか「わからない」ということが大抵許されない、ということである。

当協会（学会）の会員数は、平成28年6月1日の時点で、個人会員808名、団体会員192団体（264口）、維持会員53団体（56口）である。そして、多くの先達のお骨折りの成果である5教員養成コースと10支部を組織の中心として当協会は活動を展開している。また、日本学術協力財団の一員である。全国大会は今夏49回大会が開催される予定であり、学会誌『モンテッソーリ教育』は48号まで発行されている。ホームページは平成22年8月に開設され、事務局の執務日や教員養成コースの情報が掲載され、最新号の学会誌は誰でも閲覧できる。理事・監事は同時点において28名である。平成25年から、『教育学研究』（日本教育学会学会

誌）に大会の開催予定や報告を掲載して、他学会の会員にも参加を呼びかけている。事務局はこれらの頂点に立っているのではなく、むしろ根元で支えたいと願っている。しかし、事務局にそれほどの存在感がないというのが実情ではないだろうか。

さて、私が事務局長になってから、2つの大きな出来事が起こった。まず、平成23年3月1日、名誉会長のルーメル先生が94歳の天寿を全うされたことである。そのころルーメル先生は武蔵野赤十字病院に入院されていた。私はその約1週間前、2月26日にお電話をいただいた。お声はとてもお元気そうだった。ご病状は良い方向に向かっているのではないかと思われたので、私にとっては突然のご逝去だった。ルーメル先生は事務局の実務に加担されることはほとんどなかったが、神父様が大きな存在だったので、私のみならず多くの人たちにとって喪失感は大きかったと思う。

もう1つは、ルーメル先生が亡くなられてから10日後、同年3月11日、あの「東日本大震災」が起こったことだ。これは日本モンテッソーリ協会（学会）に直接の動揺を与えるものではなかったが、地震・津波・原子力発電所の事故による想定外の破壊力は、私たちに様々な問題を提起した。東北支部の幼稚園等の施設には地震や津波による被害があった。他県へ避難した園児もいたことから、園児の減少という問題も生じた。園児たちの心のケアの必要も生じた。さっそく援助の手を差し伸べた会員もおられたが、協会が募金を始めたのはしばらくたってからのことであった。しかも、東北支部からの要請を受けてからのことであった。なぜすぐに募金活動が始められなかったのか、忸怩たる思いである。日本では、しばしば自然の災害には苦しめられるのだが、この大震災がもたらしたものは特別であった。私たちそれぞれの考え方も、少なからぬ影響を受けた。

さて、前述のルーメル名誉会長のご逝去のあ

と、当時の理事から「ルーメル神父のお名前を何らかの形で我々の活動にお残しできないだろうか」という声が上がった。そこで、「ルーメル・モンテッソーリ奨励基金」並びに「ルーメル賞」が設置され、「ルーメル賞」の受賞者には、賞状と金一封が授与されることとなった。第1回目は平成25年であり、今までに3回計5名が受賞した。現在、学会誌『モンテッソーリ教育』に掲載された論文や実践報告が審査の対象となっている。この賞の存在が、若い研究者を勇気づけ、学会誌への投稿を喚起し、その質の向上に資することを願わずにはられない。

平成25年度には、「法人化検討委員会」を設置し、当協会の法人化を検討した。もちろん法人化が必要だという意見が理事の間から上がったからである。当時の議論は「予想される事務的な煩雑さに比してメリットが大きい」とは言い難い」ということで収束した。私なりに総括するならば法人化の意味は「一法人一会計」にするということだ。つまり、支部の会計を協会の会計に吸収することになる。その場合、支部は現在の所持金をすべて協会に寄付をすることになる。そして、何らかの基準を作って協会は支部に運営費を支給することになる。これにあたって、どの支部にも不満のないような基準を作らねばならない。私にはこれが大きな問題になると思われる。法人化については過去にも話題になったが、却下されたようだ。時代の変化に対応するために法人化がどうしても必要だという事態が生じるかもしれないので、断続的ではあっても、今後の検討課題とならざるを得ないであろう。

事務局への問い合わせの内容も、私が事務局長をお引き受けした当初に比べて変化している。「自分の子どもを「子どもの家」に通わせたいが、所在地を教えてほしい」というような質問ももちろん現在でも存在するが、以下のような問題にはしばしば苦慮させられている。

- ◇ モンテッソーリ法をとり入れた乳幼児向け施設の「起業」をどうしたらよいか。
- ◇ 「モンテッソーリ子どもの家」に子どもを通わせているが、その実態に疑問がある。

- ◇ 外国から日本のモンテッソーリ施設を見学に行くので、見学できる施設を紹介してほしい。(日程や人数が実際まで不明)
- ◇ 協会(学会)には、教員養成コースと実践施設が備わっているのではないか。それを見学したい。
- ◇ モンテッソーリ小学校は日本にはないのか。

このような問い合わせにはとても応じきれないので、各施設やこれらの問題に造詣の深い先生方にご協力を仰いでいる。

私はむしろ過去を継承することを心掛けてきた。いや、それさえも十分であったとは言えない。「少子高齢」という日本の現実を踏まえて、「法人化」「会員および世間の協会(学会)に対するニーズの多様化」「徹底した宣伝の必要性」「海外との交流」などが不可避となり、それが協会(学会)の在り方や活動に変化をもたらすのはやむを得ないだろう。いつか大胆な楫を切らなければならない時が来る可能性がある。その際協会(学会)は、すべての会員の知力と子どもへのまなざしによって思慮ある判断をしなければならぬだろう。

マリア・モンテッソーリの珠玉のことばから

Non si può essere liberi senza essere indipendenti: quindi alla conquista dell'indipendenza debbono essere condotte le manifestazioni attive della propria libertà, fin dalla infanzia. I bambini piccoli dal momento in cui sono slattati dalla madre, si avviano sulle strade fortunate dell'indipendenza.

(*Il metodo*, edizione critica, p.204)

独立していなければ自由ではあり得ません。したがって独立を達成するためには幼児期から自由そのものの活発な表出が行われなければなりません。離乳期から小さな子どもたちは独立への苦勞の多い道を進んでいるのです。

第2章



日本モンテッソーリ協会（学会）の使命

(1) 教員養成コースの設立

上智モンテッソーリ教員養成コース（上智コース）から NPO 法人 東京モンテッソーリ教育研究所付属教員養成コース（東京コース）へ



群馬医療福祉大学大学院教授 江島 正子

東京モンテッソーリ教育研究所理事長 天野 珠子

I. 上智コース

1968年7月21日の日本モンテッソーリ協会の設立全国大会の総会（1968年7月21日）で、モンテッソーリ教育法を実践できる教員養成が喫緊の要務であると決議されました。

これによって上智大学のペトロ・ハイドリッヒ師（Petro Heidrich SJ）が中心になりオランダのアムステルダムにある国際モンテッソーリ協会のマリオ・モンテッソーリと連絡しあって、教員養成コース設立へ向けた試みが始められました。1969年12月1日には上智大学に「モンテッソーリ教員養成コース設置趣意書」が発表され、そこにはクラウス・ルーメル師（Klaus Luhmer SJ）、平野智美、松本尚子、松本静子、赤羽恵子各氏をはじめ11名の名前が連なり、上智大学の理事会でも開設が許可されました。

それまでモンテッソーリ教育の実践を学ぼうとすれば海外へ留学しなければならなかったのが、もうその必要はなく、日本でもモンテッソーリ・ディプロマ取得可能な教員養成コースが1970年4月20日午後5時半からスタートしました。これが「上智モンテッソーリ教員養成コース」です。日本で最初の教員養成コースです。当初、理論は上智大学の四谷の校舎（旧2号館）で、実践は足立区梅田の上智大学付属保育所うめだ「子供の家」で行われましたが、その後四谷に移り、ルーメル師が1972年以後委員長を務め、34期生（2007年3月4日）まで972人の、モンテッソーリアン誕生に貢献しました。（江島正子）

II. 東京コース

上智コースが平成19年3月を以って閉じることになったと突然クラウス・ルーメルコース長より報告があったのは平成17年、新年度が始まったばかりの頃だったと思います。我々コースの実践講師は上智学院の理事会で、すでに決定したことであると聞かされました。まさに「寝耳に水」のできごとでした。それからの1年、単なる実技指導の非常勤講師という立場から、日本最初の養成コースの灯を消すわけにはいかないという共通した熱い使命感で存続の努力が続きました。幸いルーメル先生の広い人脈のお蔭で、縁あって富坂キリスト教センター（東京都文京区小石川）の一部で実践が出来る目途がつけました。また、リトミック研究センターより特定非営利活動法人（NPO）として設立するためのご指導を頂き「東京モンテッソーリ教育研究所」を立ち上げ「付属教員養成コース」の設立が実現したのです。研究所の理事長は暗黙の了解で当然ルーメル先生だと皆が思っていたのですが、神父のお立場では法人の理事長にはなれないとおっしゃり、その代わりに「教員養成コースのコース長は喜んで引き受けましょう」と言われて、そのお言葉通り命尽きる最後まで、その職をお続けくださったのです。一方で研究所の理事となった我々は、仕事を持つ傍ら実践指導に携わり、慣れない運営まで手掛けることになったのです。多くの方々のお励ましや応援と無我夢中の熱い情熱がスタッフ一同にあったことが不可能を可能にしたのだと思います。新コース長をお引き受け下さった前之園幸一郎先生をはじめお世話になった方々には、改めて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。（天野珠子）

九州幼児教育センター・トレーニングコース



コース長 藤原 江理子

1. 九州幼児教育センター・トレーニング コースの沿革

九州幼児教育センターは1974年1月、当時九州で熱い盛り上がりを見せていたモンテッソーリ教育法の研究と普及のための活動拠点として、日本モンテッソーリ協会に開所を届出しました。以後、現在のトレーニングコース40期に至る変遷は下記の通りです。

- 1974年4月 光の園保育園（福岡市）にて「九州幼児教育センター」を発足（所長 藤原元一）、モンテッソーリ教員を養成すべくセンター第1期生を募集
- 1975年3月 同保育園でセンター第1期生を送り出す。その後海外研修の為、一時閉所
- 1976年 聖ヨゼフ幼稚園（北九州市）においてセンターを再開、センター第2期生募集
- 1978年 同園内にてセンターの教員養成の活動の名称を、「九州幼児教育センター・トレーニングコース」とし、改めてコース第1期生を募集
- 1987年～ 九州幼児教育センターが現住所（宗像市）に移転、専用施設にて教員の養成を継続

2. 九州幼児教育センター・トレーニング コースの現状

当センターは本科トレーニングコースの他に理論のみの聴講や、研究を継続する専科を併設し、開所から2015年度までの41年間で、1097名のディプロマ取得者を送り出しました。開所当時よりセンターは教師自身の変革を通して、自己の確立を果すこと、幼児教育の本質を追求する態度を養い資質の向上を目指すことを目的としています。理論と実践のための各種研修会を年に数回実施しつつ、モンテッソーリ教育法

の普及と研究に取り組んでいます。

3. 教員養成コースとしての今後の展望

当コースを今後も継続していくためには、二つの課題が挙げられます。一つは教員の養成を担う人材を育成すること、もう一つはモンテッソーリ教育の多面的研究に取り組むことです。幼児の内にある能力を目覚めさせるには、まず教師自分自身の内なる「偏見」を克服し、自己の確立を目指さなければなりません。そのためにも乳幼児教育だけに留まらない広い視点でモンテッソーリ教育を捉え、多面的な研究でこの教育の本質を追及し続けることも、一層重要になるのではないかと考えています。

最後に：日本モンテッソーリ協会（学会）の50周年を心よりお祝いし、その歩みと共に当センターを開設当初よりご支援くださっている、関係者すべての皆様に御礼申し上げます。

【九州幼児教育センター HP】

<http://ktcourse-montessori.world.coocan.jp>

九州幼児教育センターで検索



京都モンテッソーリ教師養成コース

委員長 赤羽 恵子

京都モンテッソーリ教師養成コースについて語るためには、ヨーロッパで学んだ赤羽恵子が帰国してからの事を記しておかなければ、現在の姿はありえませんので以下にまとめます。

渡欧 → ★モンテッソーリ教育との出会い
→ 帰国 → JAM 発足 → 上智モンテッソーリ教員養成コース設立
→ 京都モンテッソーリ教師養成コース設立まで
驚くほど数々の★「意味のある偶然」により、現在に至っています。

1963年12月…赤羽恵子★ドイツでモンテッソーリ教師のディプロマを取得して帰国。月見ヶ丘保育園（当時 鼓常良園長。京都市）で実践

1965年4月…上智学院の職員として採用され、うめだ「子供の家」設立に向け始動

1965年9月…P. ハイドリッヒ神父によりうめだ「子供の家」開設（保育主任：赤羽恵子）
大勢の見学者が次々押しかける。月刊誌「幼児の指導」に毎月1回、1年間モンテッソーリ教育の紹介をする。この頃、モンテッソーリ教育の様々な解釈が至る所であられたので、きちんとした教師養成コースの必要性を痛感する。

1966年……モンテッソーリ教育実践講習会（うめだ「子供の家」）30名参加

1967年……同上講習会（うめだ「子供の家」）90名参加

1968年……同上講習会（上智大学講堂）500名以上参加
日本モンテッソーリ協会設立（第1回JAM 総会）

1968年 秋…モンテッソーリ教師養成コースを設立する目的で赤羽再渡欧。AMI（オランダ）の会長と日本で最初のモンテッソーリ教師養成コース設立の許可と協力を申し出る。

1970年4月…上智モンテッソーリ教員養成

コース開講 委員長：K. ルーメル神父、主任：赤羽恵子

1971年3月…第一期生卒業（P. オスワルト教授がAMIの名代としてドイツから来日）

1973年 1～3月 …赤羽恵子 うめだ「子供の家」と上智モンテッソーリ教員養成コースから身を引くことになる。

1973年4月…★富山大学幼稚園教員養成課程の助教授（当時）として奉職
★同時に月見ヶ丘子ども家の実践にかかわる。

1973年5月…★京都モンテッソーリ教師養成コース設立

JAM 教員養成委員会の審議を経てJAM 公認のコースとして発足
*この時もまさに★「意味のある偶然」により山下、林、板東各氏が関西に集まっていた。

委員長：鼓 常良 理論：山下 榮一、林 信二郎
実 践：赤羽 恵子、板東 光子

コース会場：月見ヶ丘こどもの家→京都カトリック信愛幼稚園→深草こどもの家

その後コース卒業生として熱心で優秀な方々（片山忠次、山本由美子、岡山真理子、岡部康子等）が大勢集まり、スタッフに加わる。

京都コースがスタートして以来、全国各地で、多くのモンテッソーリ実践講習会を行いました。それが基礎コースへと形を変えていきました。京都コースでは現在、専門コース（2年間 ディプロマコース）、基礎コース（札幌・東京・福岡）で多くの方が学んでいます。

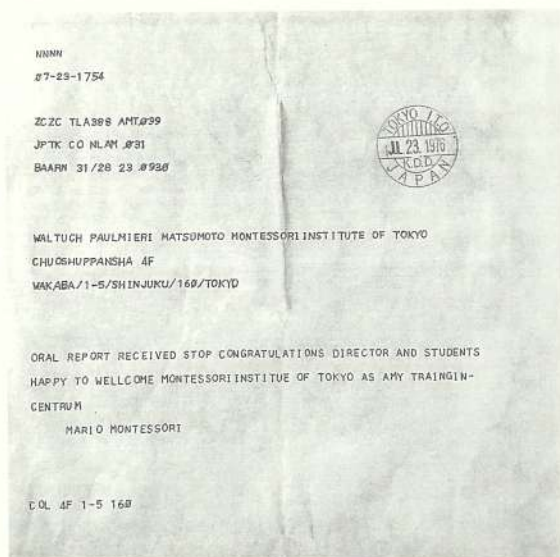
京都コース主催の夏期講習会も毎年のように行い、卒業生や初めてモンテッソーリ教育に出会う人々への門を開いています。これからは特にディプロマ取得者に対する勉強会を充実させ、京都コースが大切にしているモンテッソーリ教育の精神の理解、普及に努めたいと考えております。

東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター



所長 松本 静子

1975年10月、ロサンゼルスでの最終インターンを経て帰国した私は、四谷の聖パウロ修道会印刷所の4階5階をお借りし、10名の学生とともに東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターを始めました。翌年7月23日、AMI（国際モンテッソーリ協会）卒業試験官としてロサンゼルス教師養成所所長のエステラ・パルミエリ先生、マーゴット・ワルタック先生をお迎えし、第一期生が卒業いたしました。この卒業式を迎える3、4日前に東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターがAMIに認可されたことを知らせる電報がマリオ・モンテッソーリ氏から届きました。（下図）



1976年小田急線町田駅近くの相模原市鶴野森に当センターは移転し、1979年には夜間部が開設されました。

それから約40年を経た現在、昼間部42期生28名、夜間部34期生25名、35期生32名がこのセンターで学んでいます。開設以来の卒業生は昼間部が約1450名、夜間部約600名で、ディプロマ取得者は2016年3月現在2050名となりました。海外の留学生の受け入れも毎年のように行っており、合計50名ほどがこれまでに卒

業して世界の各地で活躍しています。また、多くの卒業生の中にはお孫様までの三世代にわたり学ばれる方、奥様やお子様が続いて学ばれるお父様など、ご家族で受講された方も多くいらっしゃいます。また、当センターの卒業生の先生に乳幼児期に保育をしていただいたという学生も近年多くなり、センター自体が一つの大きな家族のように縦横に様々につながっていることは大変嬉しいことだと思います。

AMIとして国際的に考えると、東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターの41年の歴史は決して長いものではありません。私たちがお子さまをお手伝いするためには少しだけ考えを変えて、お子さまのことを先に考える一私が夢中になったこのことをお伝えしたいだけで、気が付いたら40年にもなっていました。

この間、クラウス・ルーメル先生をはじめ古田誠一郎氏、松平頼明氏、松本修二氏、根本夫妻、川村祐一様、大勢の方々にご支援いただきましたことを深く感謝いたしております。

私たちの喜びは伝え残る喜びです。お子さまを通して日本に残る、また広くアジアにも、そして世界にも、また世代を超えても残っていくということを心に留めながら日々歩みを続けてまいりたいと思います。

信望愛学園モンテッソーリ教師養成コースから 小百合学園広島モンテッソーリ教師養成コースへ



信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース 委員 下條裕紀媛

小百合学園広島モンテッソーリ教師養成コース コース長 下條 善子

I 信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース

学校法人信望愛学園は1988年に創立20周年を迎え、幼児教育の重要性が増してきていることを考え、傘下8園にモンテッソーリ教育を採用することにした。従って良き援助者としての養成を目指して、学園内に養成コースの開設を決議した。同じく広島市内にも実施園があり「四園合同研修会」と称し自主研修を始めていたが、学園の養成に参加したい希望があったので、学園はその意向を受け入れた「設立趣意書」を日本モンテッソーリ協会会長クラウス・ルーメル師に1989年1月16日付提出した。同年1月28日、協会の常任理事会で設立認可が決定され、7月30日総会に於いて承認されると、学園の理事長リント・ホルスト師に決定が送付された。山口・広島の2会場の何れかに毎月一回6日間ずつ10回受講し、二年次に実習園4園で5日間ずつ実習し、最終段階としてディプロマ取得の試験を受け、すべての課程の修了合格をもって卒業とした。受講生は現職の先生達なので、受講内容は一年次から自園での三週間で子ども達に生かされ、各園共継続養成者が続き、確かな養成機関の役割を果たすことが出来た企画であったと感じる。当初からの講師諸先生方、下條善子主任、スタッフ方始め関係者のご協力に深く感謝する次第である。

当コースは学園理事長が委員会編成と共に代々委員長に就任した。ドメニコ・ヴィタリ師、佐々木良晴師（歴代イエズス会士）から広島教区原田豊己師によって2014年度を以って閉講となり、学校法人小百合学園に移管された。信望愛学園のコースは25周年をもって閉講になったとはいえ、幼児教育界に残した功績は大なるものがあつたと摂理的なコースとして感謝に絶えない。（下條裕紀媛）

II 小百合学園 広島モンテッソーリ教師養成コースへ

信望愛学園のコース閉講決定とほぼ同時期に、小百合幼稚園の三階にあった三篠修道院の閉鎖が決まり、宗教法人カトリック煉獄援助修道会は、設立当初から同じ精神を持って共に歩いてきた学校法人小百合学園への売却を提案された。小百合学園理事会は援助修道会の意向を受け継ぎ、幼児教育のために役立てたいと考え購入を決定し、コース移転を果たした。コース存続を強く要望される関係者に伝えるためには、現場と援助者養成のためのコースが一本化することは、コースの受講生が基礎的な学びを実践の場でどう生かすか、教師の関り方が子どもの人格形成の基盤にどう援助になるのかを体験する場として、双方のために大変有意義と考えたからである。

2014年7月、日本モンテッソーリ協会会長前之園幸一郎先生にコース名称変更届を提出し、許可を得て2015年4月から小百合学園の養成コースとして新たに出発した。2016年3月に信望愛学園コースの26期生は小百合学園コースの1期生として36名ディプロマを授与され、現在は2期生32名、3期生38名が在籍中である。在籍中に少しでも子ども一人ひとりの心の声に耳を傾け、その活動の姿に触れられることは、喜びをもって現場に働き続けられるのではないかと実感している。子どもと共に成長するため、“育てながら育ち、育ちながら育てる教師”をモットーとし、各園で預かった子ども達の為に使命感をもって巣立ってほしいと願っている。スタッフ一同は両コースの卒業生1064名と共に力を合わせ、互いに研鑽を積み、努力の実りを祈りながら歩み続けていく所存である。見守って頂いた関係の皆様のご厚誼に感謝すると共に、今後のご協力を切に願っている。

（下條善子）

長崎純心大学 純心モンテッソーリ教員養成コース (3歳～6歳)



長崎純心大学教授 青山 キヌ

本学におけるモンテッソーリ教育研究は、1972（昭和47）年のある日、シスター江角ヤス学園長が「幼児教育の研究をやりませんか」と純心女子短期大学の杉浦太一教員に声をかけたことが発端である。この言葉かけがきっかけとなり、教員達はシスター山田雅子学長のもとで、幼児のためのあるべき教育の姿を求めて、当時新しい教育として注目されていたモンテッソーリ教育を手がかりに研究しようと、同年12月「幼児教育研究会」を発会した。また、純心聖母会としても、1974（昭和49）年から「純心幼児教育研究会」を発足、本学付属純心幼稚園においてモンテッソーリ教育を取り入れていった。本学養成コースは、これらのことが基盤となり教員養成コースに発展したと言える。

2003（平成15）年2月、長崎純心大学人文学部の新学科として「児童保育学科」増設を機に、第4代の片岡千鶴子学長は、カトリック大学として懸案事項の一つであったモンテッソーリ教員養成コースについて、シスター青山キヌと共に取り組んでいった。まず、日本モンテッソーリ協会（学会）会長（理事長）クラウス・ルーメル師に相談し、「モンテッソーリ教育理論コース」案の了解を得たが、後日、「信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース」の下條善子主任より、純心として独立をとの助言と、そのための指導・援助を惜しまないとの言葉をいただき、計画を一変することになった。

養成コース申請書作成にあたり取り組んだことは、まず、純心聖母会と保育現場のシスター達、また、本学教職員の理解と協力を得ることであった。特に、下條善子主任から指導者としての条件を満たすため再養成を受ける必要があり、保育現場のシスター達の理解と協力は必須であった。下條善子主任より、指導者としての養成を受けたシスター達は、狩浦美代子、樽角セツ子、川上真理子、林悦子、藤原明美、池田洋子の6名で、特に実践理論と実技面の指導を

約2年間学び深めていった。

その結果、2004（平成16）年7月、「長崎純心大学 純心モンテッソーリ教員養成コース（3歳～6歳）」は、日本モンテッソーリ協会より設置認可を受け、翌年4月に日本で唯一、大学機関内でモンテッソーリ教員免許状を取得できるコースとして、35名の学生を迎え開設に至った。

大学4年間の学びの中で、保育現場の体験のない学生達に特に配慮していることは、モンテッソーリ教育の基礎理論と教具提供の基礎をしっかりと身につけながら、子どもとの触れ合いができるモンテッソーリ教育実施園における「幼稚園教育実習」及び「モンテッソーリ教育特別実習」を課していることである。また、卒業論文ではモンテッソーリ教育に関する内容をテーマとして研究し、積極的なボランティア活動等を通して理論と実践の体験を活かせるよう勧めている。

現在、第1期生から第8期生までの86名がディプロマを取得、第9期生から第12期生の学生が在籍し、いつでも身近に関われる学内の4名の担当教員と、本学附属純心幼稚園の指導者達のもとで日々研鑽に励んでいる。

本学養成コースの源泉は、イエス・キリストの慈しみであり、聖母マリアのやさしさと温かい愛である。学生達がモンテッソーリ教育の素晴らしさと学ぶ楽しさ、喜びを味わえるよう、親身になって学生一人ひとりの思いを聞き、励ましと光と希望を与え続けることは、今後も本学養成コースに望まれる課題の一つである。

(2) 支部の設立



北海道支部

北海道支部長・宮の沢さくら保育園園長 前鼻 百合江

沿革

・1983年（昭和58年）4月北海道支部長として鈴木キミエ氏（釧路市学校法人柏陵学園ひぶな幼稚園園長）が就任した。この年の『モンテッソーリ教育』第16号から地方支部長の名前が掲載され各支部長が明らかになった。同17号（昭和60年発行）には支部便りとして北見市での松本静子先生の研修会、釧路市での公開保育の様子などの報告が掲載された。

・1986年（昭和61年）第19回全国大会が釧路市で開催された。大会初日の午前中にはひぶな幼稚園の公開保育、午後に開会式という斬新なプログラムで道内はもとより全国から未知の国北海道へと305名の参加が集った。応用コースでは網走藤幼稚園、北見藤幼稚園、札幌西野桜幼稚園がモンテッソーリ教育への移行などをテーマに発表を行った。

・1999年（平成11年）北海道私立幼稚園連合会35回大会では、釧路ひぶな幼稚園がモンテッソーリ教育による保育を公開し、多くの道内幼稚園関係者に刺激を与えた。

・2001年（平成13年）石狩市の学校法人藤大学に於いて第34回日本モンテッソーリ協会全国大会が開催された。藤女子大学大学院に着任された甲斐仁子氏の強い勧めによる。北海道支部としては15年ぶりの開催であったが道内のモンテッソーリ教育実践園も増えていたので多くの協力が得られ、さらにその後の研修会開催の刺激にもなった。

・2002年（平成14年）北海道支部長に甲斐仁子氏（札幌藤大学）が就任した。鈴木キミエ氏には北海道支部発足以来の任に深謝し、引き継ぎをした。また、北海道の地理性を考慮し、本部の了承を得て前鼻百合江（宮の沢さくら保育園園長）を連絡員として置くこととした。

・2004年（平成16年）第37回全国大会にて「北海道幼児教育におけるモンテッソーリ教育」の歴史についての発表を8人でのリレー式方法で行った。道内でのモンテッソーリ教育がどのよ

うな経過で普及していったか、研修活動の展開などからその足跡をたどったものであった。

・2008年（平成20年）支部長、甲斐仁子氏の大学転勤に伴って、支部長に前鼻百合江（宮の沢さくら保育園園長）が、連絡会計に城由利子氏（いしやま中央幼稚園園長）が就任した。

・2011年（平成23年）第44回全国大会を札幌藤女子大学で開催した。10年前の要綱を参考に取り組み、学会様式や北海道らしさとしての構成に、会員一同が力を発揮した。

今後について

道内では1950年（昭和25年）頃からカトリック系幼稚園が開設され、その多くがモンテッソーリ教育を導入していた。そのためか研修会の開催や養成コースへの参加も積極的に行われるようになった。特に1970年（昭和45年）頃、フランシスコ会の神父によるモンテッソーリ教育に関する情報は道内の実施園に大きな影響を及ぼした。さらに1976年（昭和51年）日本モンテッソーリ教育総合研究所教師養成センターが設立され109名の1期生のうち道内から4名が受講した。その後も多数の受講者が道内のモンテッソーリ教育普及の展開に貢献している。

しかし、養成コースが地元にないため、勤務しながらの受講や長期にわたる受講は通う距離と時間と費用の面で難があること、また大学の幼児教育学科で取り入れられていない（教具はあるが）ため教育方法としての知識や情報不足から馴染みが薄いことなどがネックとなり実践園が広まらないことは否めない現実である。

研修も単発物が多いことや自園での園内研修止まりなどの問題があるがNPO法人TUDOIによる継続セミナーが6年目を迎えるなど、少しずつその成果が表れつつある。やはり学生時代にモンテッソーリ教育の方法に触れることが教師養成にとっては大きな課題と考えられる。

東北支部



前東北支部長 鷹嘴 達衛

現東北支部長・こじか「子どもの家」園長 佐々木信一郎

昭和40年4月、八戸に所在する教会附属ファミリア幼稚園の園長となった。間もなく父兄参観日を迎えた。お子さんを何人も入園させてこられたお母さんから「何年見ても保育のやり方が同じで変わり映えがない。」と批判を頂きショックを受けた。

その頃、赤羽恵子先生のモンテッソーリ教育に関する講演を聴き、そのような幼稚園になりたいと強く思うようになった。そして、東京のうめだ「子供の家」で行われ始めたモンテッソーリ教育の研修会に毎回全職員で参加するようになった。

しかし、現場で実施するためには1週間程度の研修会では不十分であることを痛感し、モンテッソーリの著書の中から「幼児と家庭」を取り上げ、日本語に翻訳しながら園内でも学びを深めるようにした。

支部としての研修会も休まずに続けた。毎年、2日間、松本静子先生に研修をお願いし、一度も休むことなくご指導下さったことに対し、心から感謝申し上げる次第である。

他方、幼児の減少も急速に進み、東北支部で最初にモンテッソーリ教育を取り入れたファミリア幼稚園が消滅してしまうことになり本当に残念に思う。

大きな傷を負ってしまった東北支部ではあるが、支部内には着実に地盤を固め、モンテッソーリ教育を継続している幼稚園・保育園もあり、今後の発展を心から祈るものである。

(鷹嘴達衛)

前支部長のご苦勞と40年間毎年東北支部のために研修をして下さった松本静子先生に心より感謝したいと思う。

1.57ショックから少子化に入り、よりよい保育が選ばれる時代になった。現代は、心理、教育、医療などあらゆる分野において、アカウントビリティ(説明責任)が求められる。特にアメリカの強い影響下にある日本においては同様の傾向にある。具体的に言うなら、その教育はどのようなものなのか、それにはどんな効果があるのか、問題点や不足部分があるのかなどを客観的に示すということである。例えば、Angeline S. Lillard, PhD(2005)は、モンテッソーリ幼稚園で学んだ子どもと伝統的な幼稚園で学んだ子どもの比較研究を行っている。モンテッソーリ教育で学んだ子どもは、読み、書き、計算において伝統的学校の子どもたちより、より良い準備がなされていたこと、また、実行機能(前頭葉にある認知機能)、特に、問題解決能力、学校への適応能力においても優れていた事を報告している。これをすぐに日本に当て嵌めることは危険であるが、日本においても、このような研究、データの積み重ねが必要な時代になっていると思う。つまり、エビデンスベースが求められている。

今後、日本及び東北のモンテッソーリ教育が発展するためには、主観的に「良い教育」と言うだけではなく、客観的な研究とアカウントビリティも重要であると思う。

参考文献

Angeline S. Lillard, PhD, *The Science behind the Genius* (Oxford University Press, 2005)
(佐々木信一郎)



関東支部

元関東支部長 町田 明

前関東支部長 松本 良子

= 沿革と現状 =

本稿を書くにあたって、何にその根拠を？と考えた時、『モンテッソーリ教育』誌上に頼る他なしと考えた故、早速第1号～47号現在までを調べた。結果は以下の通りである。

- 1968 日本モンテッソーリ協会が発足
- 1975 全国的支部ができる。
- 1979 学会誌『モンテッソーリ教育』12号に「支部報告」という事項が初めて登場
- 1980 同誌13号に「関東支部初代支部長クラウス・ルーメル先生の支部報告」が掲載される。以下その一部。

「関東支部内には協会本部もあり、本部と支部の活動をはっきり区別する事は困難であった。例えば、協会主催の夏の大会にはいつも全国の会員の協力があり、また会場を上智大学としたため、大会の企画と実施にはとりわけ関東支部スタッフに相当の負担がかかったことであった」

[主な支部活動]

- 1980 講演会(注1)
ルーメル先生はその後1992年までの12年間、当支部長としてリーダーシップをとられたが、その間、1970年に立ち上げられた上智モンテッソーリ教員養成コースの運営、1972年から同コース委員長、1977年から第3代協会長等々多忙を極め、1992年当支部長を退任された。
- 1987 調査研究(注2)
- 1989 研修会(注3)
- 1992 支部長に松本尚子を選任、1995年まで職責を果たされる。—2016年帰天—
- 1996 支部長に町田明を選任
- 1997 関東支部から東京支部を分離し、東京支部の誕生で全国10支部となる。
- 2003 研修会(注4)
- 2004 第37回全国大会を担当(注5)
- 2005 支部長に松本良子を選任
- 2009 支部長に町田明を選任
- 研修会(注6)
- 2011 3月1日名誉会長クラウス・ルーメル師没。私たちの敬愛するルーメル先生の「帰天」は深い

悲しみであった。

- 2011 研修会(注7)
- 2014 支部長に松川和照を選任
- 2015 第47回全国大会を担当(注8)

= 今後の課題 =

当支部は6県にわたり、会員数158名(2016年度協会名簿による)の大所帯のためか、協会や支部組織への意識が希薄のように思われる。協会の年次大会への参加呼びかけ等に、支部としても一工夫が必要であろう。

注1 講演会

テーマ “モンテッソーリ幼稚園ならびにモンテッソーリ学校に於ける障害児の統合教育” 講師 ヘルブリッケ先生(ミュンヘン大学教授・医学博士) 会場 上智大学(改行)

注2 調査研究

テーマ モンテッソーリ教育の実態と教師の意識調査～上智コース同窓会との協同による～

注3 研修会

テーマ “人間行動の発達についての神経学的アプローチ” 講師 山田孝先生(北海道大学作業療法学科) 会場 上智大学

注4 研修会

テーマ 「親になる準備～乳幼児期に於ける人格形成の重要性～」 講師 Q.モンタナーロ先生(Dr. med.)～上智コース主催に参加～会場 上智大学

注5 第37回全国大会担当

テーマ “子どものいのちとモンテッソーリ教育、基調講演「モンテッソーリ教育から私が学んだこと」 講師 汐見稔幸先生(東京大学大学院教育学研究科教授) 会場 千葉幕張プリンスホテル

注6 研修会 —上智東京コース・東京支部と共催—

テーマ 「日々の保育を高めるために～絵本の楽しみ～」 講師 荒井智子先生(財団法人東京子ども図書館常任理事) 会場 東京子ども図書館

注7 研修会 —上智東京コース・東京支部と共催—

テーマ 「地球の始まりから地球の仕組みと生命進化の46億年」 講師 吉田晃子先生(代々木モンテッソーリ子供の家主宰) 会場 愛珠幼稚園

注8 第47回全国大会担当

テーマ “子ども1人ひとりの思いを受けとめる、基調講演「赤ちゃんの不思議—心の発達—」 講師 関一夫先生(東京大学大学院総合文化研究室教授) 会場 横浜みなとみらいパシフィコ会議場

東京支部



東京支部の誕生

前東京支部長・(学)天野学園愛珠幼稚園理事長・園長 天野 珠子

東京支部は平成10(1998)年7月、仙台で開催された日本モンテッソーリ協会第31回全国大会の理事会および総会において、大所帯となった関東支部から東京地区を分離して新たに10番目の支部として承認され誕生して以後、江島正子氏に支部長を譲るまでの15年間、私(天野)が東京支部長職を拝命して参りました。

東京地方には研修会や実践会場も多く様々な形式で研修会や実技研修が実施されています。そこで関東支部と合同で、さらに上智モンテッソーリ教員養成コース(後に東京コース)の年一回の特別講演(毎年9月)にも参加させてもらい、研修会、施設見学、講演会などを実施してきました。一支部では経験できない多方面からの活動ができたと思います。

- ①施設見学したモンテッソーリ園…恵泉幼稚園(岩槻市)、愛珠幼稚園(世田谷区)、むくどり保育園(相模原市)、宮前幼稚園(川崎市)、むくどり風の丘保育園(相模原市)、おがやの里しもだ保育園(川越市)など。伝統あるモンテッソーリ園、新設のユニークな園、環境に配慮した園、自然を利用した園など、いずれも見学者の関心は高かったです。
- ②講演会、実践研修会の開催…講師(講演内容

および敬称は紙面の都合で省略)荻野美佐子(上智大学)、町田育弥(桐朋学園大学)、吉田晃子(代々木モンテッソーリ子供の家)、朝比奈太郎(むくどり保育園)、相良敦子(清泉女学院大学)、亀ヶ谷忠宏(宮前幼稚園)、袴田嘉夫(園舎設計士)、高山園(リトミック実践家)など。参加者の多かったのは見学とセットにした企画で園長先生からの保育方法や具体的な苦労話を伺う内容、実践家の教具実技指導などでした。

- ③上智コース特別講演への賛助参加…シルバナ・モンタナーロ先生(国際モンテッソーリ協会0～3歳コーストレーナー)の貴重な講演を伺うチャンス(2回)もありました。
- ④日本モンテッソーリ全国大会(学会)の開催
- ・第33回全国大会 於上智大学(平成11年7月)東京支部誕生後初の担当。(関東支部との合同による)
 - ・第40回全国大会 於駒沢女子短期大学(平成19年8月)初の東京支部単独開催。この大会にてクラウス・ルーメル会長(理事長)は、その職を辞し、前之園幸一郎現会長(理事長)が新たに就任された忘れられない大会となりました。

東京支部の現在

東京支部長・群馬医療福祉大学大学院教授 江島 正子

東京支部会員は2016年6月30日現在、個人会員は139人、団体会員23団体で維持会員は8団体です。

主要活動として施設見学研修は、まずスペイン・バルセロナのサグラダ・ファミリアのガウディを彷彿とさせる「フィートリツェ緑が浜保育園」や、やはり建築設計専門家の三浦直樹園長による新園舎「そののいえ保育園」などで関東支部と共同で行いました。講演・実践研修会は、第1回ルーメル賞受賞者森愛氏による子

ものの植物との関わり合い(講演と実技)の研修。桜美林大学教授山口創先生から生物としての人間を健康・身体心理学者の視点から研修。そして聖アンナこどもの家園長野村緑先生による小学校教育におけるモンテッソーリ教育についての研修等を開催しています。

歴史的なイベントは、2017年8月8日(火)～10日(木)、日本モンテッソーリ協会(学会)設立50周年全国大会の開催です。これは東京支部にとって大変名誉なことです。



北陸支部

北陸支部長・亀田平和の園保育園園長・京都モンテッソーリ教師養成コーススタッフ 板東 光子

(1) 野田実神父の時代 (1968 (S43) 年～1998 (H10) 年)

野田神父は、もともと社会福祉が専門で、幼稚園の園長になった時、当時幼児不在ともいえる教育方針が浮き彫りにされそうになったことを憂い、幼児の幸せは『個人指導』にあるとの考えを持っていた。(『モンテッソーリ教育』(第4号)の研究発表より) 1968 (S43) 年に、日本で初めてモンテッソーリ教育をドイツで学んでこられ帰国していた赤羽恵子氏を新潟に招いて記念講演を開催。当時、新潟県内で、モンテッソーリ教育に切り替えたところは、亀田カトリック幼稚園・見附天使幼稚園・白根カトリック幼稚園。しかし、モンテッソーリ教具もモンテッソーリ教育のコースにも行ったことのない先生たちでの実践が大変だった様子は、『モンテッソーリ教育』(第6号)に小林緑氏が研究発表の形で掲載。

その後も野田神父が積極的に研修会を開催。講師としてはシスター・クリスチナマリー、シスター金沢、ファニング女史など。

1984 (S59) 年には、支部会員80名、幼稚園4園・保育園1園

1987 (S62) 年野田実神父のメモより；北陸地方は、モンテッソーリ教育の導入は早いですが、教師養成が困難で、当時より実施園は増加していない。毎年のカトリック新潟教区の保育者研修会でも、理解されていないようだ。

1992 (H4) 年；日本乳児院協会関東ブロックの研修会を見附聖母乳児院が主催。松本静子氏が特別講演。

(2) 1994 (H6) 年第27回モンテッソーリ協会全国大会を長岡で開催。

参加者350名。新教育要領が施行されて間もないこともあって、個性尊重・環境による教育は、まさにモンテッソーリ教育の中心理念と、今こそモンテッソーリ教育が市民権を得る大切な時と、実行委員長の野田実神父はじめ実行委

員は、エネルギーを、使った。

その後、全国大会で共に力を合わせた主任たちが、各園をさらによく改革していこうと、現場の目線で主任会を立ち上げた。年3回、午前中は子どもの活動を見学、午後は感想を述べあった。これは、2000 (H12) 年11月8日に亀田平和の園保育園でしたのを最後に立ち消えとなった。その間に、今まで北陸支部を支えて下さった野田実神父が、幼稚園を退職され、支部長も板東光子に代わった。3年後支部長は岩田陽子。

(3) さらに3年後、支部長は前川さちえに代わり、北陸支部の活動が新潟から福井に移動。

その頃、福井では前川氏のつぼみ保育園が周りの保育園に良い刺激をされ、福井の保育園の先生たちが次々に「京都モンテッソーリ教師養成コース」で学ばれ、その卒業生で「福井若葉会」を結成され、互いに子どもにとって良い保育のあり方を学びあっていった。2009 (H21) 年、第42回全国大会をつぼみ保育園の前川徹・さちえ氏を中心に、若葉会のメンバーで、福井駅前の「アオッサ」で開催。参加者は689人に上り、主催者側も驚きの悲鳴をあげた。参加者からは、“子どものために”と一本筋の通った良い研修会であったとの、うれしい感想を何人もからいただいた。

その後、2014 (H26) 年より、支部長が板東光子に代わり現在に至っている。どこの支部も同じような悩みを抱えておられるが、北陸支部も、新潟と福井・石川・富山では、かなり離れているために、支部活動が行われにくい。しかし、福井方面は「福井若葉会」の活動に便乗させていただき、新潟方面では、徐々に「亀田平和の園保育園」の活動を中心に4～5園の幼稚園の方々と研修を重ねている。

2016 (H28) 年 支部会員数；個人会員16、団体会員42、計58

中部支部



前中部支部長（平成12(2000).8～平成22(2010).7）名古屋芸術大学名誉教授 **野原 由利子**

現中部支部長（平成22（2010）.8～）モンテッソーリ瑞穂子どもの家園長 **森下 京子**

2000年8月、協会総会にて前中部支部長小谷善二先生（愛知県立大学教授）がご病気のため、野原由利子（江南女子短期大学）が引き継ぐこととなり、同時に2年後には全国大会開催を要請され、松本良子事務局長の中部支部を活性化する機会にとの励ましにより引き受けることにした。支部活動は殆ど行われていなかったため、定期的に研究会を持つことから始めた。愛知県立大学附属幼稚園主任・黒田はる子先生、めぐみ保育園園長・都築鎮子のご指導・ご協力で、月1回研究会を持続。中部支部に潜在していたと思われるモンテッソーリ教育の理論と実践に対する学習意欲により大会の内実づくりができていった。しかし園からの組織的事務協力は得ることができず、澤村育栄、小牧和未、真野由夏さんたち母親の力をかりて準備をすすめていった。2002年8月、第35回大会は名鉄犬山ホテルで開催。テーマは「子どもたちの真に人間らしい育ちを支えるために今果たすべき大人の役割—モンテッソーリ教育の原点、平和と共生の思想をひきつぐ—」。企画・実行委員は田中稔子（マリア・モンテッソーリ幼稚園長）（実行委員長）、野原由利子（愛知江南短期大学）（事務局長）、倉田左恵子、沢田里美、森下京子、舟橋直子、村田尚子、鈴木絹子、小島清栄、田中ポール、澤村育栄、小牧和未。その他11名の実行委員、39名の協力委員を委嘱。研究発表15件、参加者500名余。基調講演は、大田堯氏「人間らしさの回復をいかにはかるか—子どもたちにゆたかな自然と人間関係と文化を—」（大田先生は今年98歳。平和の危機における教育者の役割を強く訴えておられる）。有意義で楽しかった全国大会で、中部のパワーが集まりだし、月1回の定例研究会も持続するようになった。（野原由利子）

2010年8月からは支部長森下京子、事務局長村田尚子の新支部体制が発足。9月より2年後の大会に向けて、野並保育園を会場とし定例研究会を開催。回を重ねる毎に、園相互の親睦と連携を図ることもできていった。2011年9月からは、大会に向けての実行委員会による具体的準備に入る。2012年8月3日～5日、第45回モンテッソーリ全国大会は、サンプラザシーズンズ（ホテル）にて開催。大会テーマ、「生活に根ざし生活を変える モンテッソーリ教育の探究」は、幼児期の教育の原点がどこにあるのか、幼児の生活そのものを見つめ直すテーマであった。大会実行委員長森下京子（モンテッソーリ瑞穂子どもの家）、事務局長村田尚子（野並保育園）参加者500名。実践の立場からの研究発表の重要さと、スカイプによる特別講演、AMIのポートランド世界大会実行委員長の招聘など今までにない企画を通し、モンテッソーリ教育の広がり、現場の重さを再確認した大会であった。2016年現在、大会準備から重ねてきた研究会は、大会開催後も会員の研修と連携の場として、年3回、新人研修、モンテッソーリ全国大会報告、企画講演会などを開催している。（森下京子）



近畿支部

近畿支部長・カトリック京都司教区 瀧野 正三郎

近畿では、モンテッソーリの三大著作を翻訳され、1968年に日本モンテッソーリ協会の初代会長に就任された鼓常良先生が、京都・桂の「月見ヶ丘保育園」で、子供たちにモンテッソーリ教具を提供され、実践を試みておられました。ドイツから1963年に帰国された赤羽恵子先生が、1964年から1年間、この園で、モンテッソーリ教育を試みられています。1965年には、「桂幼児教育研究所」を開設し、保育所を改組して、「桂幼児教育研究所附属月見ヶ丘子どもの家」とされました。ここで、モンテッソーリ教育法講習会が1968年4月～1969年4月までに4回開催されました。

1968年に日本モンテッソーリ協会 (JAM) が発足し、京都では、京都モンテッソーリ教師養成コース設立準備のために、1970年8月1日～3日に、JAM主催で、京都の信愛幼稚園で初級実践研究会が開かれ、8月4日には、国立京都国際会館にて、モンテッソーリ生誕100年記念講習会・第3回日本モンテッソーリ協会総会が開催されました。

1973年5月に「桂幼児教育研究所」で、京都モンテッソーリ教師養成コース(委員長:赤羽恵子)がJAM公認のモンテッソーリ・コースとして開設されました。

1975年8月1日より、全国的支部組織を作ることになり、「桂幼児教育研究所附属月見ヶ丘子どもの家」の伊藤保郎先生が近畿支部長となりました。伊藤先生は、日本モンテッソーリ教育実践の発祥のゆかりある所で、その大切な場を守り、近畿一帯に呼びかけて度々研修会をして下さいました。

1979年には、京都で「深草こどもの家」(園長:赤羽恵子)が開設され、京都モンテッソーリ教師養成コースも、こちらに移ることになりました。

1990年7月29日～31日近畿支部担当で、京都の聖母女学院短期大学で第23回全国大会を開催しました。

1995年8月1日より、当時、滋賀大学教授であった相良敦子先生が近畿支部長となられ、1999年3月7日シポジウム「幼稚園教育要領改訂とモンテッソーリ教育」、2003年1月13日研修会「3歳からの楽しい言語教育」「教育改革と幼児教育」を開催しました。

2005年7月29日～31日近畿支部担当で、第38回全国大会を兵庫県の舞子で開催しました。

2006年1月9日研修会「なぜ、モンテッソーリ教育をやりたいか」「体育における自由選択と段階的指導」「学びながら子どもと共に」「新しい時代に期待する」、2011年1月10日シポジウム「次世代への光」講演「ドイツの光」全体会「これからの近畿支部」、2013年1月14日研修会「3・11後、私は何をすべきか。私に何が出来るか」を開催しました。

2013年8月1日より、京都教区司祭の瀧野正三郎が近畿支部長となりました。

2014年1月13日講演「知的生命の発見」発表「モンテッソーリの宗教観」、2015年1月12日講義「モンテッソーリの宗教教育」を開催しました。

2015年7月30日～8月1日近畿支部担当で、第48回全国大会を奈良で開催しました。

近畿支部には、赤羽恵子先生が委員長をしておられる「京都モンテッソーリ教師養成コース」があり、コースのほかに、毎年7月に京都でモンテッソーリ教育普及のために、実践講習会を開催されています。支部としては、毎年1月の成人の日に、研修会と総会を継続して開催することを考えています。

中国支部



沿革と現状

1968年日本モンテッソーリ協会設立以前に、既に広島では「モンテッソーリ協会」が存在していた。それは西本順次郎医師による「モンテッソーリ治療教育研究会」で、日本モンテッソーリ協会設立に伴い合流し中国支部となった。確かにこの勉強会に参加した者が、当初多勢いたと思われる。西本氏は初代支部長に就任されたが1982年辞任、治療教育研究会も別れ、一時期中国支部は四国支部に組み入れられ、四国支部長山下悟師に委任された。

1983年第16回全国大会の総会決議録によれば、協会の組織の改定によって理事の任期が一期三年となり新理事に渡辺和子氏が選出された。第17回全国大会より、支部長として渡辺和子氏の報告がみられるが、支部活動ではなく、岡山のノートルダム清心女子大学に於いての研究会等の報告である。1991年第24回全国大会時の総会での新支部長村上操子氏（福山幼年教育研究所小百合園）による支部報告の中に、支部活動としての研修会報告がある。『コスミック教育の形成—インドにおけるモンテッソーリ』の著者シスタークリスティナマリー・トルドゥを講師並びに指導者として計画的に企画された研修会が行われた。それは1992年中国支部長に就任した下條裕紀媛に引継がれ、1998年迄定期的に研修会が行われた。1999年新たに支部長に就任された奥山清子氏（ノートルダム清心女子大学）により、発達障害支援のために、専門の講師による研修会が行われた。2003年第36回大会時の支部報告には、支部長前田瑞枝氏（洋光幼稚園）の職員養成の必要性を強調された研修会が報告され、2005年第38回大会時のそれによれば、再度支部長就任の奥山清子氏による多岐に亘る“学習障害”、および“発達障害”に関わる研修会が専門家を招き熱心に企画された。2012年第44回大会時の支部報告には新支部長島田美城氏（エリザベト音楽大学）による「音楽と子ども」の実践的な研

前中国支部長・援助修道会 下條 裕紀媛

修会の、更に2013年第46回大会時の支部報告によれば、「深草こどもの家」の根岸美枝子氏を招きドイツのモンテッソーリ教育の動向について学ぶ研修会の開催が報告された。

その他中国支部担当の全国大会を四回開催した。

- ・第1回—第21回大会—岡山ノートルダム清心女子大学において
- ・第2回—第25回大会—広島国際会議場において、テーマ「モンテッソーリ“平和教育”」
- ・第3回—第39回大会—岡山ノートルダム清心女子大学において、テーマ「モンテッソーリ教育の原点を見つめて—人間形成の観点から—」
- ・第4回—第49回大会—リーガロイヤルホテル広島において、テーマ「子どもと平和」

実施園が設立30周年40周年を迎え多くの卒園生が成人になっている。会員数も100名を越えて、後輩の教師、保育者が現職に活躍している恵まれた支部である。

今後の希望

日本モンテッソーリ協会（学会）となった今日、半世紀を超えた中国支部は、モンテッソーリ教育の原点に立ち帰り、実践園の発展に尽力するモンテッソーリアンの弛まぬ精進に期待したい。広島は“平和”の真の発信地である。

1981年2月25日教皇聖ヨハネ・パウロ二世の広島平和記念公園における「平和アピール」、2016年5月27日同じ場所での米国大統領オバマ氏の原爆死没者慰霊碑前での訴え「核なき世界を」と子ども達への強い思いを感じさせられたスピーチ、創造主から創られた人類、その人類は一つの家族だとの平和、喜びの願いを子どもに語りかける様子は真のメッセージと感じた。

モンテッソーリの墓に次の言葉がある。「無限の力をもっている子ども達が、世界と人間の間に平和を築くために私と力を合わせるように願っています」と。皆同じ願いを私達に託されているのだと思う。



四国支部

四国支部長・鳴門聖母幼稚園園長 乾 盛夫

初代支部長、山下悟師との二人三脚での学びから始めた。

モンテッソーリ教育への教師養成コースが京都、東京に開かれていたものの、幼稚園や保育園から教職員を養成に送ることにはゆとりを作り出せなかった時に、岡山のノートルダム清心女子大学学長、シスター・セント・ジョン渡辺和子先生から、広く幼児教育関係者に「モンテッソーリ教育、理論と実践」の講習会開催の案内が届いた。講師は同大学のシスター・クリスティーナ・マリー・トルドウという米国のAMIの元副会長の経歴を持ち、カリフォルニアの同会のベルモント・カレッジではモンテッソーリ教師養成コース所長である。その講義は英語なので、その通訳の大役には、教育哲学理論に精通された学長が立たれた。二人が私たちに心をこめて忍耐強く解説された「モンテッソーリ教育の理論と実践」の学術的な紹介は、受講者に自信を持って子どものために環境を整備したい心を芽生えさせるものだった。昭和46、47年（1971-2）の2回の講習会につづき、第3回は実習体験研修に参加の機会を与えられた。西宮にある神戸海星女子学院・マリア幼稚園での一ヶ月、午前中はクラスで、午後はシスター・クリスティーナのセミナー（主に文化領域）だった。

この実習中に出会い学んだこと。保護者たちで研究支援のチーム（夙川幼児教育研究会）を結成して、すぐに、モンテッソーリの著書、「こども・教育の再建」を翻訳・出版（エンデルレ書店）して、広く啓蒙に尽くしていたことだった。後、マッケローニ著、「モンテッソーリ博士との出会い」も翻訳・出版している。

モンテッソーリ教育導入の時

それは教師養成から始まる。四国にはこの養成機関は無かったが、九州では、相良敦子氏（日本モンテッソーリ協会理事）の積極的な力添えがあり、モンテッソーリ協会に初めての支部が認められた。その九州支部長に九州工業大学教授の藤原元一氏がなり、理論と実践のスタッフの構成と研修養成があつて、協会の教科

内容をマスターさせる養成コースができた。山下悟支部長との二人三脚はここでも歩みを共にした。この教師養成には九州幼児教育センターへの出向を進めた。その頃中央では「子どもの家」が皆無なのに無理ではないかと危惧されたコースではあったが、真の自由教育を求めている幼稚園ばかりだから、既実践している園に見学研修を頼み、子どもの観察や教師の動き・態度について、充分研究してゆく約束をして進められた。さらに、現場を重視し、受講している教師の園から要請があれば、スタッフが園に出かけて保育現場での状況やケース分析なども実習的に進められた。こうした積み重ねが四国でのモンテッソーリ教育実施園が育って来た教師と子どもの歩みである。

四国支部の現状までには、それぞれの学校法人が国際養成コースや京都のコースで教師の養成をはかり、定期的にコースの指導を重ねて初心を磨いていくことが続けられている。

こうして、四国支部は小さいながらも、第32回全国大会、香川大会を「育つ心・育てる心」のテーマで開催した。そのワークショップには信望愛モンテッソーリ教師養成コースの協力を貰った。その3年後、次期四国支部長、田井貞良氏は新世紀に向けて「モンテッソーリ教育の現状と課題」をテーマに、教育研修大会を学会の一部として開催している。

希望と展望

始まりからモンテッソーリ教育の保育の現場を目の当たりにできて、心が惹かれ、子どもの求める人間らしい平和を共に求め応えてゆく保育に身を入れることができたと思っている。この尊さを伝えて行こうと、それを内に見いだした人々からはミッションになっている。モンテッソーリ教育の普遍性には、人は自然を超えた命への可能性を求め続け、そこに平和を築くことを子どもと共に実現して行く使命がある。人類に託されたこの使命を通じる霊生をもって保育に尽くす喜びを大事にして、祝福された時を楽しんで貰いたい。

九州支部



九州支部長・八幡カトリック幼稚園園長 中尾 昌子

§ 九州におけるモンテッソーリ教育初めの一歩

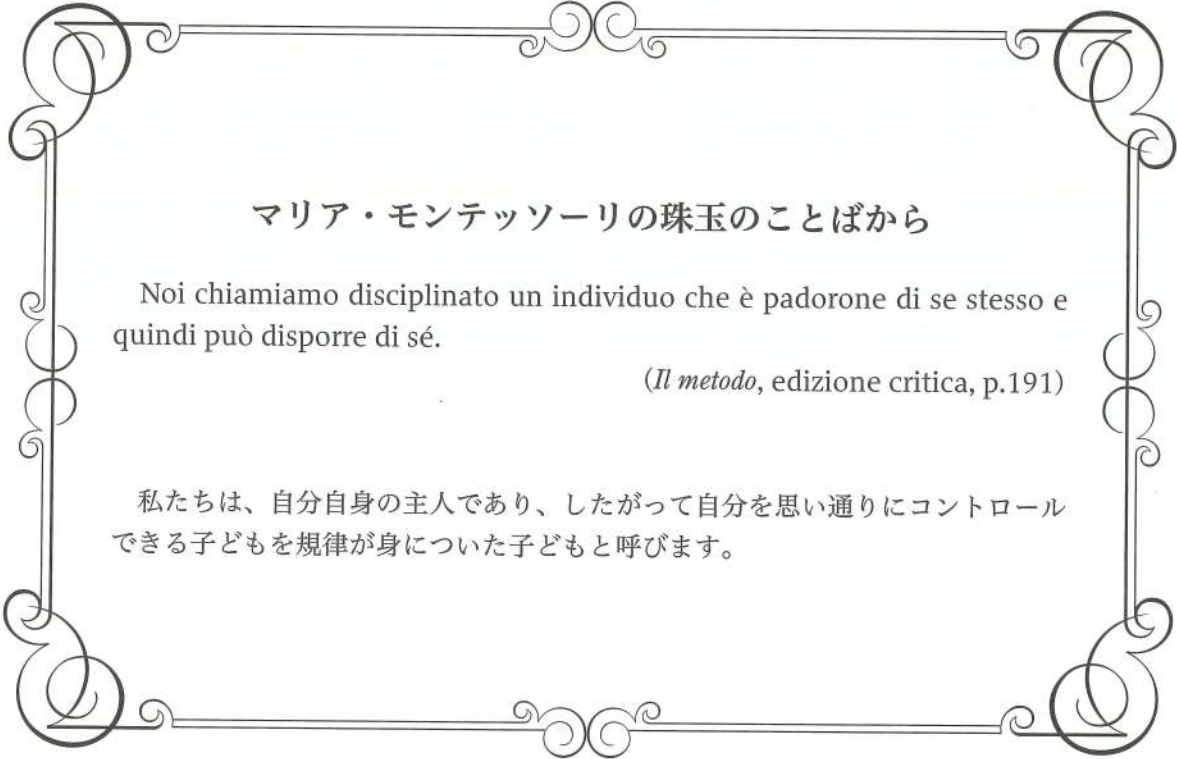
延岡市にある緑ヶ丘短期大学（後にウルスラ短大と改名）で当初のイタリア人の学長は、幼児教育学科をモンテッソーリ教育で特長づけようと相良敦子氏に教育関係科目及びモンテッソーリ教育ゼミを担当するよう要請され、相良氏は1971年4月に緑ヶ丘短大に就任しました。学長は更に短大付属の幼稚園をモンテッソーリ教育に切り替えることを企画し、主任教諭を上智コースに送りました。1971年地域にモンテッソーリを知らせる為、当時モンテッソーリ協会会長の平塚益徳氏を招いて講演会を企画、以前九州大学教授だった平塚氏は九州でモンテッソーリ教育が広がる事を喜び相良氏を日本モンテッソーリ協会の理事に任命されました。その頃、藤原元一氏は九州工業大学教授で「親の教育態度と幼児性格行動検査」という独自の検査方法により、周りの大人の育児の仕方でも正常にも逸脱しても育つことを証明する興味深い研究をされていました。1971年頃、モンテッソーリ教育に出会い幼児教育者を取り込み毎月のように会合を開き、1972年1月には、九州の各地から委員を出し地区委員を設け会則や規約を作り活動が始まりました。まずは、モンテッソーリ教育の勉強会を始めようという事になりました。この年の12月に勉強会（3日間）の案内をすると30名のつもりが200名集まり、急遽会場を西南短大に移して行われました。講師は相良氏で、モンテッソーリの著書『幼児の秘密』をテキストにモンテッソーリ教育の全体像の解説でした。

§ 九州に広がったモンテッソーリ教育熱

この勉強会を機に、九州のモンテッソーリ教育の熱が燃え上がりました。1973年東京の理事会で九州のモンテッソーリ教育の熱を相良氏

が報告、さらに九州支部の設立が提案され、藤原元一氏が九州支部長とされました。8月には藤原氏の大好きな湯布院にて、第6回全国大会が開催されました。藤原氏をはじめ市丸成人（西南学院短大教授）、相良敦子（緑ヶ丘短大教授）、乾 盛夫神父（暁の星幼稚園園長）、三村邦明神父（聖母幼稚園園長）、シスター下條裕紀媛（聖ヨゼフ幼稚園園長）、池田淑子（藤原氏の秘書）が九州のモンテッソーリ教育活動を支えたメンバーです。やがて、散発的に行われる勉強に系統性をつけることが求められ一貫したモンテッソーリ教育が学べる養成コース設立の動きとなっていきました。1974年より1年間、コース設立準備コースとして相良氏が理論を、実技はシスター目良（海星マリア幼稚園園長）が担当して行われ、その間藤原氏は、ロンドンでのモンテッソーリ教育研修に行かれました。

藤原氏は帰国後コース開設までの間すでにどこかで養成を受けた方を対象に研修生研修会を4回、各地で行われました。1978年4月聖ヨゼフ幼稚園を会場にトレーニングコース開設に至ります。1992年から九州支部長が乾氏に代わり1996年第29回モンテッソーリ協会全国大会が長崎純心大学にて行われ、2003年には第36回モンテッソーリ協会（学会）全国大会が沖縄にて行われました。2004年には関聡氏が支部長に就任、2007年より中尾 昌子が支部長となり2013年に宮崎にて第46回全国大会が行われました。こうして歴史をひも解くと、初期の方々の努力には敬服いたします。九州は、沖縄も含めて広範囲の為、それぞれの学んだコースのメンバーと研修を行っているのが現状です。今後、各地区の皆様の要望に答えながら研修を深めていくことができると感じています。



マリア・モンテッソーリの珠玉のことばから

Noi chiamiamo disciplinato un individuo che è padrone di se stesso e quindi può disporre di sé.

(*Il metodo*, edizione critica, p.191)

私たちは、自分自身の主人であり、したがって自分を思い通りにコントロールできる子どもを規律が身についた子どもと呼びます。

第3章



実践園のあゆみ

(1) 草創期の子どもの家

月見ヶ丘子どもの家（京都市）



梶山モンテッソーリスクール園長 川村 洋子

まず始めに月見ヶ丘子どもの家、設立の経緯について書きます。父、鼓常良は、旧制第八高等学校（現在の名古屋大学）を退職し、大阪市立大学で教えることになり、1950年（昭和25年）に名古屋から京都の桂に母、^{のぶ}聲と共に転居しました。聲はクリスチャンでしたので桂の教会に所属していました。1953年（昭和28年）に桂教会の牧師に、「保育所をいくつも設立しすぎて、棟上げが済んだのに大工に支払いができず工事を中止された。これを買ってくれないか。」と頼まれました。聲は夫、常良に相談し、常良は退職金もあったのでそれを譲り受けました。これが、月見ヶ丘子どもをの家の始まりです。父、常良は園長になるためには何らかの知識が必要と考え、辞書を取り扱う馴染みの書店に「今ヨーロッパで注目をあびている幼児教育の本を見つけて送って欲しい」と依頼しました。こうして取り寄せた本の中にあつたのがモンテッソーリ女史の『幼児の秘密』でした。

ここから母の助けをかりて、父、常良は月見ヶ丘子どもをの家の園長としての第二の人生に入ります。母は17歳の時に久留島武彦氏の幼稚園で助手をした経験もありましたが、先輩の方に相談したところ保母と調理師の資格があつた方が良いと言われました。母は保母試験を受けて合格し、調理師の資格も取りました。父はこのささやかな園で2、30人の小さい子どもを集め教育の実践に当たり、モンテッソーリ女史の教育理念に賛同したので、『幼児の秘密』の翻訳に取りかかり、1957年に『子どもの秘密』として出版しました。

イタリア語で書かれた本をドイツ語に翻訳したものを日本語に翻訳したわけですから、重訳でした。そのことは少し気がかりでしたが、父は生まれたばかりや、生まれかかっている孫たちに親たちが何か間違いをしでかさないうか、という焦りを感じたのも翻訳の動機の一つでした。

しばらく実践し、その後、『子どもの秘密』

を翻訳し直し、『幼児の秘密』としてその初版を1968年7月25日に発行しました。『幼児の秘密』は次々に再版されました。

モンテッソーリ女史の意図を言うとは、「世界平和」なのです。6歳以前の教育で人間を改造する、という非常に気の長い努力をするより外に「世界平和」を実現する方法はないことを感じました。「実践を伴わねば」という文句の説明は、「子ども 一わたしらの先生」でもわかるようにわたしらに必要なのは、子どもから教わる能力を身につけることであり、それは言いかえれば「子どもを観察してその心を読む力」のことです。父は、モンテッソーリ女史の『子どもの発見』と『子どもの心（吸収する心）』も翻訳しました。また、『生活教育法』、『教育のあるべき姿』の2冊の著書^{しんずい}を執筆し、モンテッソーリ教育の真髄を伝えようと思いました。

月見ヶ丘子どもをの家でモンテッソーリ教育がどこまで実践できているかは、保育にかかわる教師の日々の努力の積み重ねだと思います。私は横浜に居り、なかなか京都には行けませんので実情はよくわかりませんが、せめて横浜でモンテッソーリ教育を実践できればと努力する毎日です。

うめだ「子供の家」(東京都足立区)



うめだ「子供の家」第4代園長・現からしだね評議員 小坂 礼子

沿革・創立

1960年代、東京都足立区梅田地域には低所得者並びに夫婦共働きの世帯が密集しており、その人口密度に比例して保育に欠ける児童の数が極めて多く、区は新たな保育所を必要としていました。ドイツ人イエズス会士で宣教師・上智大学教授であったペトロ・ハイドリッヒ神父は、キリスト教的人間愛に基づく社会福祉従事者の養成を目指して上智大学に社会福祉学科を、夜間には上智社会福祉専門学校をつくりました。その学生たちの実習・研鑽の場として梅田に保育所と教会を計画、同時に福祉を学ぶ学生の人格形成の場として女子学生寮ソフィア塾を設置しました。当時西ドイツでモンテッソーリ教育を学び帰国していた赤羽恵子先生がソフィア塾で学生・職員と起居を共にし、ハイドリッヒ神父と協力しながら、保育所の設計に取り掛かりました。モンテッソーリ教育に沿って子供のための具体的教育環境を園内外に整え、1965年10月に上智大学附属保育所うめだ「子供の家」(1～5歳児122名定員)として厚生省から認可を受けました。

草創期

マリア・モンテッソーリが時代の要請にこたえてローマのスラム街から出発したように、赤羽先生も子供のいるところならどんな所でもモンテッソーリ教育で関わっていききたいとの思いで福祉事務所から措置されてくる子供たちを愛情を持って受け入れ、ここからモンテッソーリ教育が開始されたのです。

1970年に上智モンテッソーリ教員養成コースができるまで赤羽先生は週末にはスライドと数種の教具を携えてモンテッソーリ教育を日本各地に伝え回っておられたことが思い出されます。1972年4月うめだ「子供の家」は社会福祉法人からしだねに移管、赤羽恵子先生が第3代園長に就任、新館が増築され定員は222名となりました。



赤羽恵子先生提示



お給食当番のこども達

現状

2015年には、卒園生である第6代廣岡和明現園長がうめだ「子供の家」第50回目の卒園生を送り出しました。うめだ「子供の家」はキリスト教精神とモンテッソーリ教育を基礎として、姉妹園である乳幼児発達支援センターうめだ・あけぼの学園との日常的なインテグレーションを保育に活かしています。

2016年には新築の園舎で0歳児保育も復活し、定員132名として新たな出発をいたします。



善福寺子供の家（東京都杉並区）

元善福寺子供の家教員・鶴川女子短期大学専任講師 竹田 恵

「善福寺子供の家」は、1967年10月、東京都杉並区善福寺に創設されました。創立者の松本尚子（1930年－2016年）は、武市八十雄（至光社）の誘いでカトリック教育協議会内「モンテッソーリ研究会」に参加し、モンテッソーリ教育を知ることとなりました。その後、松本は研究会に出席して関連する文献を読む中で、モンテッソーリ教育に関心を持ち、本格的に学ぶためにイタリアに留学することを決意したのです。1963年にイタリアに渡った松本は、ペルージャの3歳から6歳対象の国際モンテッソーリコースとベルガモの6歳から12歳対象のコースで学び、2種類のモンテッソーリ教師国際ディプロマを取得して1967年3月に帰国しました。

帰国した松本は、同年10月に自宅のある杉並区善福寺で寺子屋のような「善福寺子供の家」を開設しました。「八畳の日本間と六畳の板の間の一部、幅四尺に長三間の廊下、それにポーチを加えたもの」が子どもたちの過ごす場所でした。煉瓦と板で作られた教具棚には、帰国する際に船便で持ち帰ったモンテッソーリ教具が並べられました。広めの廊下には出席シールを貼るコーナーが設置され、水仕事の用具やイーゼルも置かれていました。



自宅における少人数の保育実践を通して自信をつけた松本は、1968年9月に自宅近くに本格的な子どもの家となる「善福寺子供の家」を

開設しました。松本は開設準備にあたり、子どもたちの身長を測って教具棚等の高さを決めるなど、手作りで環境を整えていきました。日本での保育経験がなかった松本は、イタリアの国際コースにおける学びと実習を手掛かりにして、日本の保育資格を有する保育者の協力を得ながら手探りでモンテッソーリ教育の実践を行いました。子どもの家は自然環境に恵まれた善福寺公園の緑地帯に位置しており、園自体も都心としては珍しく園庭にも恵まれ、毎年4月には、筍を掘ることもできました。木の階段、ジャングルジム、雲梯、登り棒、鉄棒など、体を使って遊べる遊具も初期の頃から設置されており、室内活動と同様に屋外での活動も大切にされていたことが伺えます。

創設当初から松本は、子どもたちの自発性や意欲を尊重するという意味において、子どもが主人公であり、全てのことは子どもから始まると考えていました。子どもたちは園生活を楽しみながら自分を知り、社会に適応してゆく準備をし、無理なく自然に自分を創っていきます。子どもを信じ、一人ひとりの個性を見つめ、子どもの立場に立ち、心の触れ合いを大切にしながら子どもの成長を援助する、松本は子どもの家をそのような家と捉えていたのです。松本自身は「日本モンテッソーリ協会」および「上智モンテッソーリ教員養成コース」の創設に際し、発起人として準備段階から関わり、特に教員養成コースでは創立された1970年から30年間教員養成に携わってきたことから、「善福寺子供の家」には多くの実習生、見学者、研究者が訪れました。そうしたことからモンテッソーリ教育の実習園としての役割も果たしてきたといえます。

後に創立者松本尚子の養女となる宮原実江（旧姓）が、2代目園長として就任しますが、2012年3月をもって善福寺子供の家は45年にわたる歴史の幕を閉じました。

(2) 現在の実践園から

宮の沢さくら保育園（札幌市）



宮の沢さくら保育園園長 前鼻 百合江

経営母体：社会福祉法人 宮の沢福祉会

定員：120名

1980年（昭和55年）2月1日開園以来、今年2016年（平成28年）で36年目を迎えた。一貫してモンテッソーリ教育を取り入れた保育を実践し、子どもの真の自立を培っている。

○沿革

1980年（昭和55年）2月の開園に向けて園の内外ではモンテッソーリ教育の環境を作る準備に追われていた。新設された園舎は大阪でモンテッソーリ園を知っている設計士による設計で建てられた。室内には教具一式が用意されたが日常の用具など多くが手作り作業で進められた。また、当時としては先端的な3、4、5歳児の異年齢保育を取り入れるための職員研修と教材づくりの準備も進められていた。

創設者（理事長）前鼻時彦氏は幼稚園園長であったがモンテッソーリ教育と出会い1976年（昭和51年）設立された日本モンテッソーリ教育総合研究所教師養成センター1期生として卒業して以来、本格的なモンテッソーリ教育を実践するには幼稚園ではなく生活の場がある保育園であるとの考えをもって、保育園を設立したのであった。

開園当初から保育室の環境にはモンテッソーリ教具一式が配置されていたが、提示する保育士がいなくて、通信教育を受けながら手探り状態であった。姉妹園の西野桜幼稚園教諭に教材づくりなどの応援を受けながら保育士が育っていくにつれ、子どもたちの生活に落ち着きが出てきた。しかし、行政の措置で入園してくる保護者たちには、異年齢混合の保育や机と椅子での室内活動や「自分で選ぶお仕事」などが、なかなか理解されなかった。

園便りで「お仕事紹介」コーナーを作り図解したり、親子懇親会では毎日の保育でのお仕事の手順を紹介したりして、準備の大切さと最後まで取り組むことへの理解を求めた。また、ある年の発表会では「普段の子どもたちの熱中している姿を紹介しよう」との保育士側からの



現在の新園舎（26.10）

発案で、「水注ぎ」「切るお仕事」「豆のあけ移し」を実際にやって見せ、保護者の感嘆の声と同時にたくさんの拍手をもらうことができた。

子どもが育つにつれて、家庭でも話される機会が増え、保護者も「お仕事」に馴染み出したようだったが、園としては依然として試行錯誤が続いた。しかし15～16年目頃に、保護者から「こんな良い事しているのだからもっと自信をもって」の強い励ましを受けたり、卒園児の小学校から給食当番の手際よさに驚いたとの報告もいただくようになったりし、ようやくモンテッソーリ教育を取り入れていることを明言できるようになった。今後とも「一人でやるのを手伝って」という子どもの声に応えたいと願うばかりである。



新園舎の園庭で（27.2）



仙台白百合学園幼稚園（仙台市）

仙台白百合学園幼稚園主任 石岡 順子

この度は、日本モンテッソーリ協会（学会）創立50周年誠にありがとうございます。心よりお喜び申し上げます。

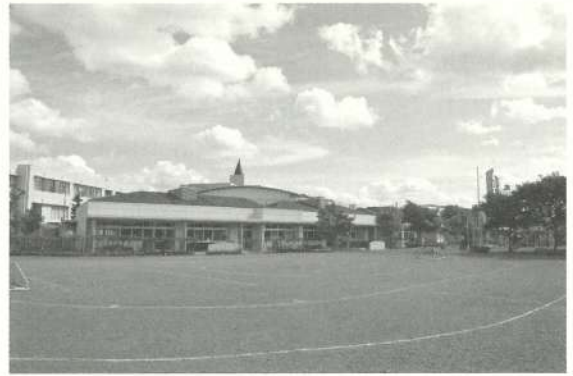
仙台白百合学園幼稚園の設立母体は、シャルトル聖パウロ修道女会で、1696年、フランスのシャルトルの近郊で創立されました。日本へは1878年にシスター達が来日し、学校、養護施設、診療所を開きました。仙台白百合学園は函館、東京、盛岡に続いて1893年に仙台市青葉区本町1丁目に創立されました。学園は小中高の一貫教育をおこなう中で、幼稚園の必要性を認め、仙台白百合学園幼稚園が1955年に開設されました。



旧園舎

幼稚園は21年間、一斉保育を取り入れ保育をおこなっていましたが、より高いレベルの教育を目指して1976年、モンテッソーリ教育法を全クラスに導入し、翌年、縦割りクラス編成になりました。

1998年、仙台白百合学園（幼小中高）は、仙台市青葉区本町から仙台市泉区の紫山に移転しました。仙台市郊外の自然豊かな環境の中でのびのびと保育をおこなう日々が、移転してから約20年たとうとしているところです。



新園舎

これまで約4800人が卒園し、現在は、園児数約160名が在籍しています。年長児、年中児、年少児、満3歳児が混合の縦割りクラス編成で5クラスあり、モンテッソーリ教具教材を使っておしごとにも充実しています。



お仕事

学校法人天野学園 ^{あいじゅ} 愛珠幼稚園 (東京都世田谷区)



愛珠幼稚園副園長 木村 悦子



<昭和9年の園舎>

昭和9年、まだ田園風景の残る現在の東京都世田谷区経堂で天野良臣（初代園長）・都（2代目園長）夫婦が小さな幼稚園を始めました。当時まだ幼稚園は珍しく、夫婦で近隣を周りようやく9名の園児を迎えてのスタート、創立当初より3年保育がありました。翌昭和10年、東京府（当時）より認可を受け、徐々に園児も増えました。お揃いの白いエプロンをつけ遊戯や砂遊びをしたそうです。

戦争のため、昭和19年度～20年度の2年間休園状態となり、昭和20年5月天野良臣の戦病死により、天野都が園長に就任。終戦の翌年に幼稚園を再開。被災者の収容施設となっていた保育室には、まだ二世帯の家族が生活を続けていたそうです。

園長の天野都は、明治37年（1904年）、父親の仕事の都合（医大留学後、現地にて開業）で米国カリフォルニア州オークランド市にて出生、小学4年で帰国するまで、アメリカで過ごし、その当時、親しくなったシスターがいた近くの修道院付属の孤児院に出入りして、モンテッソーリ教育を知ったそうです。

昭和45年（1970年）8月、京都で開催されたモンテッソーリ生誕百年祭に出席した園長の希望で、当時副園長の天野珠子が昭和47年、もう1名の教師と上智モンテッソーリ教員養成コースに通い始めました。

昭和49年（1974年）4月よりモンテッソーリ教育へと移行。3年保育のクラスで、手作りの補助教材で見よう見まねの実践を行います。戦後のベビーブーム、園舎の増改築により、園

児数は120名に増えていましたが、100名に減らし、教師を1名増やし、徐々に一斉保育から、縦割り自由活動のオープンクラスへと数年かけ、移行していきました。その後、コースの卒業生を採用したり、新卒の教師にコースに通ってもらいながら教師を確保していき、上智コースの実習園にもなりました。

モンテッソーリ教育へ移行した当初は、カリキュラムによる一斉保育が一般的で、在園の保護者には、父母会や勉強会を開き理解を深める努力をしました。教具・教材は父母の協力で毎年バザーの収益金から買い足したり、教師の手作りによって増やしていきました。

平成16年1月天野都の他界により、天野珠子が個人立設置者・園長となり、平成21年4月には学校法人立となりました。

平成26年6月1日創立80周年を迎え、平成28年4月現在、園児数105名、縦割り4クラスと週1回2コースの2歳児クラス29名、教職員も常勤・非常勤合わせて16名、専科講師3名の大所帯(?)になりました。

元々、廊下のない造りの園舎のため、ホールを中心に4部屋を2つのクラスに分けて活動し、ホールからは他の部屋の様子が伺え、100名ほどの子ども達は全員顔見知りです。3学期になると全ての部屋をオープンクラスにし、それぞれの部屋には異なる教材が置かれます。

創立当初より規模はあまり変わらず、現在も毎日「ひとりで出来るように」小さな子ども達の手助けをする、小さな幼稚園です。

*愛珠幼稚園記念誌より



<現在の保育の様子>



<現在の園舎>



世田谷聖母幼稚園（東京都世田谷区）

世田谷聖母幼稚園園長 高橋 興子

世田谷聖母幼稚園が創立された1949年（昭和24年）といえば、日本のカトリック教会にとって記念すべき大きな出来事の年でした。聖フランシスコ・ザビエル渡来400年に当り、この聖人の右腕がインドから日本に渡って来て北から南まで教会を巡り、日本の地を祝福されました。それはまるで400年前の戦国時代、ザビエルの宣教によって人々が新しい価値観に触れ、生きる意味を見出して立ち上がった時のように、太平洋戦争の敗戦で疲弊した人々の心を励まし、新しい風を送って日本の再起を促すかのような出来事でした。

時を同じくして、カナダ・ケベック州で創立された無原罪聖母宣教女会の修道女たちが来日しました。ザビエルのように宣教の熱意に燃えた彼女たちは、日本の子どもたちが愛である神様を知って幸せになって欲しいと願って世田谷聖母幼稚園を開園したのです。1949年（昭和24年）10月1日のことでした。日本人として最初の会員であるシスター本郷幸子は、日本の事情にも日本語にも覚束なかったカナダ人シスター達を支え、桜新町界限を訪問して園児募集に奔走し28名が一期生として入園しました。英語教室が併設されましたので、この辺りでは新しい風が流れる幼稚園として一気に人気が高まりました。



開園初期の園児とカナダ人シスター達

1969年のある日、当時の園長シスター本郷は、上智社会福祉専門学校の掲示板で珍しいポスターを目にしました。子どもが数のカードを夢中で並べている写真の上に「上智モンテッソーリ教員養成コース案内」と書かれていました。子どものために何かよいことが始まりそう

な直感で引付けられるように応募し、1970年度第一期生として夜のコース1年を修了しました。翌年、早速教具一式を購入し、3歳児1クラスで導入を始め、次の年はもう1クラス、そして1973年4月には3、4、5歳児縦割り2クラスでモンテッソーリ教育を行いました。その頃は一斉の横割り2年保育が主流でしたから、同じ幼稚園に横割りと縦割りのクラスが共存することになり、保護者は選ぶ自由と共に迷いがあったようにも見受けられました。職員はというと異なる保育のクラスを横目に見ながら、それぞれの保育に力を注いでいました。徐々にディプロマを取得する教員が増え、1976年には縦割りが5クラスになり、翌1977年度はついに全9クラスが縦割りでのモンテッソーリ教育実現に至ったのです。実に7年の歳月を要しました。無理をせず少しずつ着実な歩みをしたことが、今の聖母幼稚園の礎になったと思います。



数の棒と数字カードの一致

現在の園児数は280名で、モンテッソーリ教育を受けた卒園生は2016年3月で3881名になりました。カトリック教育を基幹にして、国際性を生きる自立した子どもたちが日本のみならず世界各地で活躍しています。卒園生が、他者の幸せのために労を惜しまない人であるよう願ってやみません。そのために教職員は全員がディプロマ取得のために努力するだけでなく、マリア・モンテッソーリ先生が目指した平和の種が子どもたちの心に根付いていくよう祈りながら、研鑽を積み重ねる日々です。

梶山モンテッソーリスクール（横浜市）



梶山モンテッソーリスクール主任 河田 敏子

梶山モンテッソーリスクールは1974年（昭和49年）横浜市鶴見区梶山の地に設立されました。園長である川村洋子は、日本モンテッソーリ協会初代会長であり、モンテッソーリの3部作（幼児の秘密・子どもの心・子どもの発見）を翻訳した故鼓常良の長女であります。夫である故川村祐一が理事長として後押しをし、閑静な住宅街の一角にある自宅を増築し開設しました。

折しもモンテッソーリ教育の教師育成のトレーナーとしてイタリアから帰国したばかりの松本静子先生が開設された、東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターの一期生として学び、モンテッソーリ教育の道が開かれ、今日に至っております。現在も、園長は東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターの同窓会会長として役目を果たし、また、実習園として、実習生を受け入れて、優秀なモンテッソーリ教師育成に貢献しております。

昨年、梶山モンテッソーリスクールは、創立40周年を迎え、在園児・卒業生・その保護者そして歴代の教職員が一同に会し、園長と理事長を囲み盛大にお祝いいたしました。今年卒業した11人を加え、総勢407名を送り出しております。中には親子2代で卒業生であったり、教師として園に戻ってきた卒業生、トレーニングセンターに学んだ保護者も何名もいて、モンテッソーリ教育を通して園がもたらすことのできたご縁の広がりを楽しみ感じております。

さて、園長を中心とした40年の実践の積み重ねは、随所に確立された独自のシステムにみることができます。個人記録や領域別記録は、提供の足跡が一目瞭然に把握でき、次の提供にいかされるように工夫され、教師が子供たち個々の成長を見逃さないよう、成長に見合った提供ができるように活かされています。子供たちが提供を受けたら、少しずつ一人でできるような、教具への工夫があったり、環境が子供にとって分かりやすく、魅力的な状態になってい

るように心がけています。この40余年に梶山モンテッソーリスクールに携わった教職員は、32名に上りますが、全員が東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンターの卒業生であります。

ところで日本モンテッソーリ協会で長らく会長を務め、梶山モンテッソーリスクールでも2011年3月まで顧問をしてくださったルーメル神父様を忘れてはなりません。毎年の卒業式でのユーモアたっぷりの祝辞と祝福はどれほど子どもたちの門出にふさわしく、保護者にとっては感謝の念にたえないものだったでしょう。すでに天に召され、いらしていただけないのは残念ですが、天国から梶山モンテッソーリスクールを理事長と共に見守ってくださっていることでしょう。

さて、昨年の日本モンテッソーリ協会（学会）全国大会が地元横浜で開催され、私ども職員も微力ながらお手伝いをさせていただきました。理論・実践のみならず経営に関するところまで、いろいろな角度でモンテッソーリ教育を考えることができ、視野が広がる良い機会となりました。50周年を心からお祝い致しますとともに、日本モンテッソーリ協会の発展と、より多くの方々にモンテッソーリ教育を理解していただけますように切に望んでやみません。

梶山モンテッソーリスクールの現在の園児数は、2歳児2名、3歳児6名、4歳児12名、5歳児10名、6歳児30名です（2016.6.1現在）。



教室の風景（2016）

社会福祉法人イクソス会 大船ルーテル保育園（横浜市）

大船ルーテル保育園顧問 白井 克榮

日本モンテッソーリ協会50周年おめでとうございます。

私が上智モンテッソーリ教員養成コースの4期生として卒業後、43年を経てきたのかと思うと感慨もひとしおです。

44年前、大船ルーテル保育園に私が就職したところ、当時園長であった（現在は法人の理事長）松川和照先生がモンテッソーリ教育の導入を模索しておられました。早速に私が指名され、上智コースに通うことになりました。

当時のコースは一年間で所定の勉学を修め、修了となりました。私は修了したものの、全くゼロ、白紙からの出発でした。

昭和49年4月、まず教具を集めることから始まりはしたものの、他に修了者がなく、孤軍奮闘しました。5年間必死でした。あわや挫折かと思われた時、園長先生には遠大な計画があったのです。この5年間は試行期間でした。再度、国際コースへの勉学の道が開かれ、終えて帰った時には、「すべての職員にディプロマを」というスローガンのもとに、新卒の保育士には夜間の上智コースを、在職中の保育士には国際コースへ、それぞれの事情に応じた勉学への道が用意されました。5年、10年計画で20年後には正職員のほぼ全員40名近くがディプロマを取得しました。この間退職していく方々も多く、常に補充されていったのです。

平成12年に社会福祉法人茅ヶ崎学園の傘下

にあった保育園から独立し、社会福祉法人イクソス会となり、昭和42年の大船ルーテル保育園（定員190名）に加えて平成12年につづきルーテル保育園（定員120名）、平成17年にとつかりルーテル保育園（定員240名）、平成23年にいいじまルーテル保育園（定員60名）、平成24年西大島ルーテル保育園（定員120名）、平成25年出来野ルーテル保育園（定員120名）の6園となり、いずれも同じ方針のもとにモンテッソーリアンの育成には力が注がれ、今も100名以上がディプロマをもってモンテッソーリ教育に携わっています。



保育の現場では開園当初から50年変わらぬ柱であるキリスト教保育を土台として乳児保育、幼児保育、延長保育があります。そこにモンテッソーリ教育が溶け込んで全体を融和させているかに思われます。初めの5年間は3-5歳児、次からは1歳児から徐々に導入して、3-5歳児の縦割り保育へと移行していきました。さらに乳児保育の重要性を考え、手探りの0歳児モンテッソーリ教育も始め、1歳児につなげています。

ないものづくしから始まったモンテッソーリ教育でしたが、今では人的、物的環境に豊かに恵まれています。大きく変わって行く世界、社会の変革、家庭環境、価値観等に戸惑いつつも、マニュアルではなく、個々に応じた手作りの保育に勤しむ我が園のモンテッソーリアンに心からのエールを送ります。



つぼみ保育園（福井県坂井市）



つぼみ保育園園長 前川 徹

当園は昭和41年4月1日、社会福祉法人親渉会を経営母体として開園された。当時の園児の定員は60名であった。昭和57年4月1日には定員150名とし、同年モンテッソーリ教育への移行が行われた。現在0歳児から5歳児までの183名が在籍している。モンテッソーリ教育法に移行する際、特に配慮されたことは以下の3点である。

①整えられた環境づくり

保育園に来た子どもたちには、ゆっくりした生活リズムの中で、1日の出来事が自分のよく知っている順序で、決められた通りに運ばれるようにする。室内のものはすべて、子どもに合わせて低くして、手の届くところに置くようにする。3つの大きな縦割りクラスを作り、その生活空間の中で子どもが好きな活動をできるようにした。「子どもの驚くべき集中力」「子どもの発達の中に訪れるいろんな敏感期の大切さ」を保育者たちは学びあった。

②園での食事

自分で食事の準備をして、楽しい時間になるようにする。まず好きなのところに座る自由を確保する。そして、子どもたちは自分の食べたい量をよそう。準備が出来たグループから挨拶をしていただく。全員に本物の陶器の茶碗、皿を使う。片付けも自分で出来るような環境づくりをする。子どもたちは秩序を好み、食器類を同じところにきれいに片づけるようになり、自分でよそったものは、最後まで責任を持って食べ終える。



子どもたちが整えるランチタイム

③子ども中心の生活を大切にする保育

子どもの心は敏感に外界を吸収していく。自分に合った活動に出会うと、それに没頭する。子どもは長い時間をかけて徐々に発達する。そのことから、子どもがゆっくりと成長するために、子どもが自由に活動できるような生活の流れを作り、室内・園庭の環境を整備し、そこに関わる保育者もモンテッソーリ教育を学び続けている。



室内で活動する子どもたち

現在の園舎は、平成2年に田んぼの真ん中に新築移転したもの。園は平成28年には創立50周年を迎えた。近辺に子どもは少ないが、モンテッソーリ教育を取り入れているつぼみ保育園を選んで180人の子どもたちが集ってきている。自然に恵まれた環境を生かし、四季折々の保育を工夫し楽しんでいる。



現在の園舎。園は創立50周年を迎えた。



社会福祉法人 野並福祉会 野並保育園（名古屋市）

野並保育園副主任 村田 尚子



本園は昭和44年9月、名古屋市南区のボランティアグループが中心となり、寄付された土地を保育園用地として出発をした。昭和45年6月、保育園の事業許可を受け、社会福祉法人 野並福祉会 野並保育園が設立された。

初代園長舟橋正明よりモンテッソーリ教育の導入に向けた、教具の準備、職員の研修に力を注いできたが、モンテッソーリ法を保育の中に定着させることが難しい状況が続いていた。平成13年に開催された日本モンテッソーリ協会中部支部の全国大会を機会に、前中部支部長野原由利子先生のお力のもと月例定例研究会が実施され、現在の中中部支部長である森下京子先生のご指導や、モンテッソーリセミナーへの参加などによって、モンテッソーリ教育の学びを深めながら、保育理念『子どもの持つ限りない豊かな可能性を伸ばし、今をもっともよく生き、未来を切り開く力を育む』のもとで保育を進めている。

3つの保育方針を柱として、日々の保育を実施している。

- (1) 子どもたちの「生きる力」を伸ばし、心と身体の調和の取れた円満な人格の発達を促す。
- (2) モンテッソーリ教育法により集中力・自立性・思考力を高め、園児それぞれの個性を伸ばすための援助を促し、子どもたち自らで「生きる力」を育むように導く。
- (3) 土に触れ苗植えから収穫そして調理を自ら行う体験等、食育を通して「健康なからだ」を作っていく。

特に乳幼児期の子どもたちが、自然体験や季節体験を通して獲得した感性、知性を大切に、モンテッソーリ教育とつながりがもてるように保育の中で援助している。

現在の園児数は、幼児クラス189名、乳児クラス123名、合計312名である。

『さつまいもの収穫』（写真参照）

さつまいもの苗植えから収穫、焼き芋パーティーへと季節の移り変わる中で、自然事象を肌で感じ、苗の生長のお世話をしながら様子を観察していく過程で、子どもたちは多くの発見や驚きを友達同士で伝え合っている。収穫後のさつまいもの大きさ分けから算数教具、金ビーズや数字カードを使い収穫数を数えていく過程では、「すごい！大収穫！」と喜び合う姿が見られるなど、子どもたちにとって魅力的な活動となっている。



さつまいも堀



金のビーズで数える。



焼き芋パーティー

深草こどもの家（京都市）



深草こどもの家園長 根岸 美奈子

- ・1979年1月「深草こどもの家」創立 京都モンテッソーリ教師養成コースの実習園として設立
- ・園児数は、3~6歳児40名前後
- ・友好学園 京都モンテッソーリ教師養成コース附属「深草こどもの家」（幼稚園型保育施設）

1973年 京都モンテッソーリ教師養成コースを立ち上げた赤羽恵子は、教員養成をするためには実習園の存在が絶対条件であると考えていました。そこでまず、富山大学に勤務している間、「月見ヶ丘こどもの家」と京都嵐山の自宅にて、試験的に小さなこどもの家を開き実践（実践担当：岡山真理子）。そして京都伏見の地にこどもの家の候補地を見つけると、助教授（当時）の職を退き、本格的にこどもの家設立に向けて動き始めました。

1979年1月「深草こどもの家」創立と同時に嵐山の子どもたちを受け入れ、3月、「深草こどもの家」第1回卒園生として送り出しました。

赤羽恵子（深草こどもの家1980年代）



岡山真理子（深草こどもの家1980年代）

伏見区深草の地は、京都東山の尾根の一番南側に位置しています。竹林に囲まれ、傾斜した土地に、くぬぎ、もみじ等の大木が何本もそそ

り立っています。四季折々の自然に恵まれ、多様な生き物が生息しているので、子どもたちの興味はつきません。

「深草こどもの家」は、最初から京都コースの実習園として設立された園ですので、モンテッソーリ教育が行われているこどもの家とはどういうところなのかを、多くの方々に知っていただくため、また、コースの学生が実習を行うために、できるだけ子どもたちの活動の妨げにならないようにという配慮のもとに、中二階に見学席が設けてあります。

玄関を入ると、ホールには暖炉があります。12月になると暖炉の炎は、ゆったりと暖かい空気で部屋全体を包みこみます。炎には子供たちの心と身体を暖めてくれる不思議な力があります（口絵で写真を紹介）。

子どもたちは毎日園庭でも室内でも、たっぷりの自由時間（午前中いっぱい）を使い、たてわり（異年齢混合）クラスの中で、心と身体を動かしています。特別活動として例えば、年間6~7回ずつ料理活動、音楽会（発表会ではなく、音楽を楽しみ、本物の美しい音を聴き、音楽の好きな子どもになって欲しいという趣旨）などを行っています。

創立以来、昔も今も変わらず、子どもたちの自由（時間・空間・活動）を保障し、子どもたちが本来持っている感性を十分伸ばせるように、私たちは日々環境を整えることに全力を注いでいます。また、その中で子どもが（自分で自分を育てる）ことが出来るように援助することが、私たち保育者の役目と思っております。

学校法人 奈良カトリック学園 奈良カトリック幼稚園（奈良市）



奈良カトリック幼稚園園長 東 裕子



設立当初。初代園長とともに。

1947年（昭和22年）12月3日設立。設置者をカトリック京都司教区とし、初代園長に杉原重憲神父が就任。

1964年（昭和39年）、シスター・メリー・ポール（善きサマリア人修道会）が園長に就任。

翌年、母国（オーストラリア）での実践で、素晴らしさを確信していたモンテッソーリ教育を直ちに始める。日本では初の試みであった。

当時、一斉保育、画一的な教育を最善と思っている先生、保護者の中での新理論への理解と実践は大変困難だったという。まず先生の養成を先決とし、トレーニングを始めるが、当時の先生方は最初、「本当かしら」と疑っていた。だが、「子どもたちが、園長の言われた通りに成長するので」たちまち夢中になり、モンテッソーリ教育について深い研究と実践をしていくこととなる。



1972（昭和47）年の教室の様子

数、言語、感覚の教具を順次そろえ、1971年（昭和46年）に保育時間すべてを自主的に行動できるシステムに切り替える。

1975年（昭和50年）に同一年令のクラス編成から、縦割りクラス編成切り替え、1977年（昭和52年）には、1人の先生が自分の担当クラスの子どもだけを見るのではなく、3人グループでより多数の子どもを多角的に見る念願のオープンシステムを導入（作業別コーナーの確立）する。



1981年（昭和56年）に設置者、学校法人奈良カトリック学園に移管。

2015年（平成27年）現在、在園児数は130名である。

50年前に当時のシスター、先生方がモンテッソーリ教育の精神を学び研究され、そこからモンテッソーリ教育の道を歩んできました。今もその精神を引き継ぎ、子どもに寄り添い、一緒に育ち合い、成長できていることに感謝いたします。

洋光幼稚園（広島市）



洋光幼稚園園長 前田 瑞枝

園児数：年長児50名、年中児64名、年少児54名、三歳児6名（計174名）

経営母体：学校法人洋光学園

（2016年5月30日在）

沿革

1950年10月1日、初代園長楠田授一が「洋に光を！」と東洋工業（現マツダ）従業員住宅の集会所を借用して開設。

同年12月、個人立の幼稚園として認可を受ける。

1951年3月、現在地に移転。

1980年、初代園長楠田授一退任、新園長前田瑞枝就任。モンテッソーリ教育導入。広島での研修会でモンテッソーリ教育に出会い、園長とその頃一斉保育に疑問を感じていた主任が大きな感銘を受ける。教員養成もなく、教具購入も不十分なまま無謀とも思える導入の仕方、園内は大混乱。

保護者の不信感から園児が大きく減少した。園長主任はあちらこちらの実施園の見学、教員全員を連れての園行事の見学を始める。教員養成の必要性を強く感じる。

1981年、初めて九州幼児教育センタートレーニングコースに2名の教師を送り養成を始める。

1983年、園長自身も学びの必要性を感じ、九州幼児教育センターに入所する。この年学校法人の認可を受ける。

1984年、未就園児のクラス「つぼみ教室」

を開室。100名近くの2歳児が集まる。

1986年、広島モンテッソーリ教育実施園、聖母幼稚園、小百合幼稚園、あさひ幼稚園、洋光幼稚園の4園合同研修会をSr.下條裕紀媛先生を中心に聖母幼稚園で始める。園では、春休み、夏休み等の長期休暇は教職員全員出勤し、教具教材作り、棚や椅子などのペンキ塗り等、環境作りに励む。

1989年、信望愛学園モンテッソーリ教師養成コースが始まり、新採用の教師が必ずトレーニングコースで学ぶことが定着する。

1990年、信望愛学園モンテッソーリ教師養成コースの実習園となる。現場を大切に信望愛学園モンテッソーリ教師養成コースの指導のもとに、実習指導、子どもの観察の勉強会、また園長主任会や卒業生研修会等で学び続ける毎日を送っている。

ふり返ってみれば、モンテッソーリ教育導入にはいろいろなことがあり、たくさんの苦勞もしました。初期の頃は職員の反発に心を痛めたこともありました。Sr.下條裕紀媛先生、下條善子先生をはじめとして諸先生方の温かい御指導のもと、園長職員が心を一つにすることができ、ただひたむきに歩き続けることができたことに感謝しています。



創立当時の園舎



現在

学校法人信望愛学園 山口天使幼稚園（山口市）



山口天使幼稚園園長 上田 真由美



現在の園舎



1970年（昭和45年）旧園舎

1957年（昭和32年）10月 児童福祉施設としてサビエル児童会館が発足

1960年（昭和35年）4月 山口天使幼稚園として開園

1980年（昭和55年）4月 学校法人「信望愛学園」12園のうちの1園として認可

1987年（昭和62年）4月 モンテッソーリ教育を取り入れ縦割りクラスを編成

この時の園長、ドメニコ・ヴィタリ神父は聖イグナチオ教会で子どもの会を指導するにあたり、ルーメル神父に出会いモンテッソーリ教育について知り、山口に赴任されてからもモンテッソーリ教育をどのように活かしたら良いか考え続けられました。その頃聴かれた、九州コースの藤原元一先生の講演や保護者へのアンケートは大きなヒントになったそうです。そしていよいよ1987年の春休みに柵や机などを改造したりペンキを塗ったりして新学期に備えました。この頃は、8クラスの子ども達が時間になると縦割りクラスから一斉に横割りクラスに分かれ、移動と準備に大変な苦勞がありました。

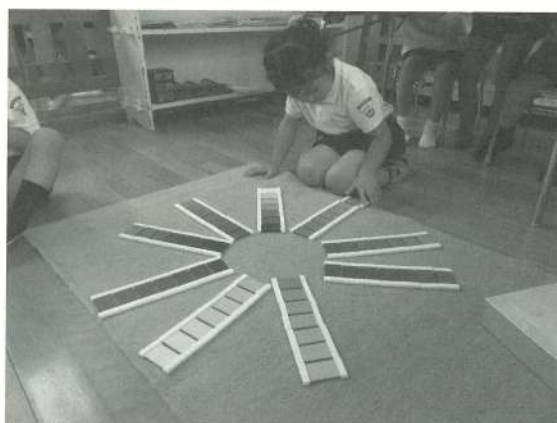
1989年（平成元年）4月 下條善子先生、シスター下條裕紀媛先生を中心に信望愛学園モンテッソーリ教師養成コースを立ち上げ、学園の本格的なモンテッソーリ教育のスタートとなる。

1995年（平成7年）10月 別館「もりの家」

落成 信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース山口会場としても使われる

1998年（平成10年）4月 未入園児対象の「てんしぐみ」が発足

2016年（平成28年）現在 在園児数は260名
ヴィタリ神父はじめ、たくさんの神父様方、先生方の教育に懸ける思い、学びと努力のおかげで今があることに感謝し、コースでの学びを基礎として、目の前にいる子どもをよく見て寄り添い、その必要性に答えることができる教師になれるよう職員一同これからも一致団結して、努力していきたいと思ます。



現在の子ども（9色を1人で並べました）

鳴門聖母幼稚園 (徳島県鳴門市)



鳴門聖母幼稚園園長 乾 盛夫

開園からモンテッソーリ教育移行へ

昭和33年(1958)、鳴門聖ヨゼフ・カトリック教会に所属して開園した。B. N. シルバー師が教会と幼稚園双方の司牧者だった。シルバー師は、学校法人暁の星学園に合併した1983年頃から、学園の建学指針である、モンテッソーリ教育に関心を抱いていたようで、教具を買ったり、維持会員になっている。しかし教師の養成にまでは職員の方になれなかった。36年間園長として頑張った。1998年、同じオペレート会のA. シアニ師が園長に就任した。

モンテッソーリ教育への移行・その方策

A. シアニ師は「ひとりで出来るように手伝ってね」のことばどおり、思い切っていたい事に突破口を明けた。僅か17年前である。暁の星学園の6園の学園研修大会の後、園長から養成担当者に要請が出されて、次年度から職員の研修計画を含めた新学期を始めることに決まった。

学園本部、福岡の暁の星幼稚園が九州支部の幼児教育センターの教員養成コースのスタッフや実習園であった実績を生かして、学園の教員養成を各園の現地で図ってきている。鳴門聖母幼稚園でもそのプログラムに沿って研修が始められた。毎月1週間、通常の保育(年齢別クラス)のあとに研修時間を取った。夏期には特別に時間を確保して研修した。

教育原理と実践論、「M. モンテッソーリの生涯」は古賀の暁の星幼稚園園長乾が受け持ち、全領域の実技と子どもの理解には教頭廣渡千代子氏が担当し教授にあたった。また、クラス担任の経験者のフリーの教諭が同伴して、鳴門聖母幼稚園の子どもたちとクラス体験に入ることも研修した。

各領域の科目の研修が終わると、試験をする。全教師の前で、籤を引いて当たった科目の提示をする。これは九州コースで藤原元一所長の下で覚えた道筋である。

特記すべき伝承の実践

当幼稚園での子どもの自我の形成の土台になるようにと願っている視点に、全科目の源となるコスミックな捉え方がある。聖書の天地創造の物語に教示されている、現実と人間の命とのつながりを吸収し、自己存在の現実=自我の捉え方にしてこそ、モンテッソーリの言う平和構築への働きに資する人が育つとみているからである。これは、インドで、M. モンテッソーリが子どものために全ての命のつながりを教材化して、自然と人との繋がりを知り、平和への人の使命に言及した保育の足跡である。これを、「コスミック教育研修会」として、本部幼稚園でSr. クリスチーナマリー・トルドゥ(Sr. Christina Marie Trudeau)が1998年までに3回研修会を開き紹介されたことと、当園でも実践してその実績をみてから踏襲して来ていることである。

実践の日々

モンテッソーリ教育を指針とする園での子どもとの関わりに、子どもがだいにされるためのキー・ワードが二つある。

1. 一対一の対応：始めから=子どもとの面接、一人ずつの導入保育、室内での対応など、たとえ集団の中でもそう徹してゆく。特に乳幼児期の自然な成長の道はこれで本当である。

2. 本当に、自分で体験をしているかを診る。それを守る心遣いを惜しまない。

こうして自立してゆく子どもに、他の人をだいにする心が実るようである。

子育て支援と言われる仕事がある。モンテッソーリ教育の実は、子どもと共に育つ家族に及ぶことが明示されなければならない。子どもの果たす役割がそう実るはずである。毎月の母親教室で子どもが園で体験していることを母親と分かち合う。

共に育つ喜びと平和が家庭と地域に実ることを願っている。



八幡カトリック幼稚園（福岡県北九州市）

八幡カトリック幼稚園園長 中尾 昌子

§ 幼稚園の創設

1955年、戦後の傷跡がまだ癒されていない社会状況にある中で、近隣の子ども達が裸足で路上や野原を駆けまわる姿をみて、パリ外国宣教会フランス人宣教師のドルエ神父は、次の世代を担う子どもがこれではいけないと、子ども達の為に良い環境と教育の場を与えなくてはと思われ、当園を設立されました。

§ モンテッソーリ教育の導入

その後1971年頃から九州でも藤原元一先生、相良敦子先生を中心に研修会が始められました。当園の教育理念とぴったりであると感じた当時の主任松本重子先生は、この教育法を導入したいと心を動かされました。しかしモンテッソーリ教育の実施園が近くにないため、ヨーロッパへの見学研修の計画を知り参加され、この教育の実践を視察されました。帰られて間もなく相良先生をお招きしてモンテッソーリ教育について保護者に説明をしていただき、この教育を導入したいと思っていることが保護者に伝えられました。

ところが、なかなか踏み出せず迷っている時、3歳児の一人が入園後教室にも入らず、ずっと砂場で一日を過ごしていました。バス通園の子どもなのにバスにも乗らず遊び続けて、いつもおじいちゃんが迎えに来て、ゆっくり待って下さったそうです。すると、満足そうにニコニコ顔でおじいちゃんと帰って行くのを見て先生は、やはりモンテッソーリ教育を導入しようと思ったと話して下さいました。長年の経験を持たれたベテランの主任先生なので、決定するとまず、オランダから教具を徐々にそろえて行かれたそうです。1974年には従来の制服も廃止され、個性に見合った自由で色彩豊かな服装に変えられました。その後、1980年には1人の教師を九州の養成コースに送られました。しかし1人だけでは厳しかったようでディプロマを取るには至らずコースを止められまし

た。幼稚園生活では基本横割りクラスだが行き帰りのバスを待つ間は縦割りとなり、自然と縦の人間関係が出来て仲良く過ごしていたようです。1982年にはモンテッソーリ実施園の園長、シスター下條裕紀媛先生の助けを借りて保護者に説明をしていただき、縦割りクラスへ移行されます。1982年には3人の教師が九州コースに送られモンテッソーリ教師として養成を受けることになりました。一方縦割りクラスへの戸惑いを感じた教師は殆ど退職し、園の在籍数も200人を越していたのが150人くらいに落ち込みました。そんな時、上智のコースを卒業した教師が主任として派遣されました。そして、次の年3人に続いて2人がコースに送られ、1988年には全員の教師がディプロマを取得する事が出来ました。やはり教具がそろっていても子どもが安心して活動できる人的環境の大切さを感じさせられました。ところが、当園には教育熱心な保護者が多く、自由の問題や一斉でしていた絵画の経験が少ないなど、連絡帳で疑問が寄せられました。質問には一人ひとり丁寧に答えながら、保護者に正しいモンテッソーリ教育を分かって欲しいので、親の勉強会を始め現在も続けています。1989年、永年園長を勤めてくださりこの教育のよき理解者でいらっしやった、デシャンブ神父がパリの本部に掛け合ってくださいって、緑地地帯で自然に恵まれた環境の中でモンテッソーリ教育に適した園舎を新築して下さいました。卒園生は創立以来5099名を送りだしていますが、幼児期から学びの基本を身につけてそれぞれ希望する道で活躍しています。近年、少子化の煽りを受け2006年には5クラスに、2015年には4クラスに縮小しましたが、この教育に出会った子どもたちの在園中は勿論卒園後の成長を見るにつけ、大切な幼児期に多くの子どもが出会えるよう祈ってやみません。

幼保連携型認定こども園 長崎純心大学 附属純心幼稚園（長崎市）



純心幼稚園園長 池田 洋子



初期の園舎

1937（昭和12）年4月、シスター江角ヤスは純心聖母会を経営母体とし、幼稚園から大学まで一貫したカトリック教育に基づき、子ども一人ひとりが神の存在に気づき、健全な心身の発達を助長することを目指して純心幼稚園を設立、初代園長として就任した。

1945（昭和20）年8月9日、原子爆弾が投下され園舎が消失、しかし、翌年には新築した園舎に子ども達を迎え本格的に保育を実践していった。

モンテッソーリ教育との出会いは、1973（昭和48）年、シスター小川京子とシスター中村メリが「上智モンテッソーリ教員養成コース」で学んだことがきっかけである。翌年、シスター小川京子は、純心幼稚園の3歳入園児10数名を対象にモンテッソーリ教育を開始、縦割りクラスを編成しながら、教員達の園内研修にも力を入れ、基礎を築いていった。また、「九州幼児教育センター・トレーニングコース」藤

原元一所長、下條善子主任、久留米信愛女学院短期大学の相良敦子教授を招き研修会を開催、実践・理論を深めていった。

1982（昭和57）年、10クラスすべてを縦割りクラス編成とし、夏期にミニコースの形で4年間、下條善子主任から実技面の指導を受ける一方、教員は、順次「モンテッソーリ教師養成コース」で免許を取得し、本格的にモンテッソーリ教育を実践していった。

1987（昭和62）年には、創立50周年記念事業としてモンテッソーリ教育環境を配慮した鉄筋コンクリート新園舎が落成、1991（平成3）年、純心聖母会第8回定期総会において純心系の幼児教育は、「宗教教育とモンテッソーリ教育」であることを確認した。

1998（平成10）年以降、社会環境の変化に応じて預かり保育、2歳児、0歳児保育をスタート、2007（平成19）年には純心幼稚園に併設して純心保育園を開設、翌年、認定こども園 長崎純心大学附属純心幼稚園・純心保育園となった。また、「純心モンテッソーリ教員養成コース」の実習生を受け入れ、養成にも携わるようになった。

2015（平成27）年に園舎増改築、幼保連携型認定こども園 長崎純心大学 附属純心幼稚園と改称して、現在、240名の子どもを対象に、宗教的雰囲気の中でモンテッソーリ教育を通して保育に関わっている。

今後も、カトリック園としてモンテッソーリ教育の精神を深めながら、子ども達のよき援助者としての使命を果たしていきたいと決意しています。



現在の園舎とクラス風景



マリア・モンテッソーリの珠玉のことばから

Il bambino costituisce insieme una speranza ed una promessa per l'umanità. Curando dunque questo embrione come il nostro tesoro più prezioso, noi lavoriamo alla grandezza dell'umanità.

(Educazione e pace, p.41)

子どもは人類にとっての希望であり約束である。したがってこの精神的胎児を私たちの最も大切な宝として養い育てながら、私たちは人類の偉大さのために努めているのです。

第4章



モンテッソーリ教育の未来と
日本モンテッソーリ協会（学会）

(1) モンテッソーリ教育が日本の幼児教育実践に果たす役割



駒沢女子短期大学名誉教授・愛珠幼稚園園長 天野 珠子

はじめに

戦後の我が国にモンテッソーリ教育が、しっかりした形で根付いたのは上智大学の中に初の「モンテッソーリ教員養成コース」が設立されたことが大きいと思う。草創期のコースで学び、その後、要請されてコースの教員養成に携わるようになった。さらに上智コースの閉鎖に伴い、講師陣で研究所を立ち上げる結果となったこれまでの40数年を足掛かりに考えてみたい。

(1) 我が国草創期のモンテッソーリ教育の教員養成と実践

昭和30~40年代、我が国の幼児教育は6領域に沿った週案・日案に基づき、カリキュラム通り保育できたかどうか反省し、次の指導案に活かすことが重要だった。縁あって上智コースで学ぶことになり、「個の尊重」とか「自主性」「敏感期」「秩序感」など耳新しい言葉を通してその理念に感動し、私自身の保育や講義の裏付けともなり大変魅力的であった。

私はコースで学んだ知識とその感動を、自分の授業の中にも活かしたかった。ところが「ある特殊な教育者の考えを講義の中で紹介するのはいかがなものか」と学内で注意を受け戸惑う私に同僚の教師が「ここは仏教系の大学だから、他の宗教の教育を持ち込むのは如何なものか」と教えてくれた。当時はこのような認識がかなり強く、研究発表や論文にしたことが禍いしたのである。その後約20年、私は授業の中でモンテッソーリの名前や理論をストレートに紹介することはしなかった。

一方自園の方では着々とモンテッソーリ教育に切り替えていったが、従来の保育を希望する退園者が2名出た。やがてディプロマ(資格)を取得した教師も増えていったが、その実践は幼く試行錯誤の日々が続いた。

(2) 教育界の意識変化とモンテッソーリ教育

平成元年、幼稚園教育の世界に変化が起こった。「幼稚園教育要領」の改訂である。(保育所

保育指針は平成2年の改訂)。これはモンテッソーリ教育を学び実践し始めたものの、なかなか理解してもらえなかった我々を、大げさに言えば歓喜させたのである。なぜなら「子どもの主体性」「環境による教育」などまさにモンテッソーリの理念そのものが「幼稚園教育の基本」の総則に書かれていたからである。

この頃から幼児の親を媒介としてモンテッソーリ教育は次第に一般にも知れ渡っていった。モンテッソーリ園に切り替える人や新たに子どもの家を開設する人なども増え順調にその理念と共に理解者が増え、頭から否定したり、誤解をされることは少なくなっていく。当初、教具を購入するのに同窓生が集まり、まとめてオランダの業者に注文し、船便の到着を首を長くして待ったものだが、日本でも購入できるようになった。私事だが、当初批判されたモンテッソーリ教育を、ゼミのテーマにしたり、研究費で教具購入をすることも理解され、平成19年夏、日本モンテッソーリ協会(学会)第40回全国大会(東京支部担当)会場に駄目もとと勤務校(仏教校)に交渉したところ学園全体で応援・協力してくれたのである。

モンテッソーリ教員の養成機関も幾つか設立され、協会の支部活動も活発化していった。モンテッソーリ関係の出版物も増え、学ぼうとすれば道は幾つもあるようになったのである。

(3) 子育て支援政策とモンテッソーリ教育

近年、移行園や新設園は、あまり増加していない。関心は持つても資格取得や教材購入のことを知ると二の足を踏む園が多いように思う。加えて10年ごとに改定される「教育要領」や「保育指針」の文言が一斉保育から「個の重視」や「遊び中心の保育」に意識転換した。敢えてモンテッソーリ教育に切り替える必要性を減少させているように思われる。保育者を目指す学生達も、保育士は売り手市場で、これ以上学ぶ必然性を感じない人が多いのではないかと思う。

働く母親支援で「待機児ゼロ作戦」など勇ま

しく行政側が職を立て幼保一体化を宣言した。しかし待機児の多くは三歳未満児である。施設の増設のみでは解決できず保育士減少の慢性化を起こしている。そこで無資格者の人数比率を緩和するなど、望ましい保育以前に最悪の場合、幼い命の危険性さえ予測される。

ある母親から切実な訴えを聞いた。「出産のため仕事を辞めました。少なくとも2歳くらいまでは自分で子育てしたいと思っていたからです。けれど出産したらすぐ保育園を予約して欠員待ちしないと入れず、2歳まで待っていたらどこにも入れてもらえない、と言われました。どこか矛盾していませんか」と。確かにおかしい現象である。子育て支援の大前提であった子ども・子育て関連3法案（平成24年8月成立）の趣旨には、『保護者が子育ての第一義的責任を有す』という基本的認識の下に、幼児期の学校教育・保育・子育て支援を総合的に推進」とあるが、この文言はお飾りなのであろうか。乳児期だけでも自分で子育てしたいと希望する母親も多い。復職を考えると早く預けなければならないのは親に対して、いたずらに子育てを放棄させる風潮を作り出していると言えないだろうか。アタッチメントの理論を今更持ち出すまでもないが、子どもにとって生後2~3歳までは母親またはそれに代る愛情深い養育者に育てられることが人格形成上、重要なことは周知のことである。

働く母親支援施策が「物言わぬ乳児」を犠牲にして成り立つことは心外である。多様な子育てが保障されることこそ重要なのではないだろうか。

(4) モンテッソーリ教育実践への期待

保育園の増設は今後ますます続くと思われる。そして保育士不足は深刻な社会現象となるだろう。慢性化した保育者不足は保育の質の低下につながりかねない。10数年前、多くの保育関係短大が4大に移行して、小学校教諭資格と保育士資格の同時取得が可能となったのである。この時点で保育士資格取得が切り捨てられたところが多い。平成21年には「免許更新」制度も発足した。文部科学省は幼稚園教諭の質の向上を目指し、厚生労働省は幼稚園教諭に保育士資格を取得させようと単位数の緩和を図っている。統一性のないドタバタ劇を見るようで

ある。また、保育園にはキャリア・アップ制度を導入し、保育士の質を高めるために補助金が出ると聞いた。これを利用してモンテッソーリ教育のディプロマ取得者を増やそうというモンテッソーリ園の努力も始まっているようだ。質の高い保育は保育者の高い資質に比例する。現代の親は子どもを預けられればそれで良いと思う人は少ない。良質な幼児教育を求めることは自明の理といえよう。現在の幼児教育は多様化している。特にフレーベルにおける「遊び」を中心に据えた方針が受け入れられやすく自然や運動を通した「遊びこむ」保育が一般にも理解されやすく簡単に導入される。反対にモンテッソーリ教育は知的な面が目立つため受験などに取り入れられやすく誤解を招きやすいことは残念である。私は長い保育経験で、モンテッソーリ教育に出会った子どもの幸せを実感してきた。ひとりでも多くの子ども達に正しいモンテッソーリ教育に出会えるよう保育の裾野を広げていきたい。

年長児が自然な姿で年少児をフォローする姿には、戦争のない世界を幼児に託したモンテッソーリ教育誕生の原点を感じる。世界平和に対するモンテッソーリの強い思いである。たった一度しかない幼児期を大人の都合により翻弄されるのではなく、安定した環境をモンテッソーリ教育で満たせる社会を期待したい。このような情勢だからこそ、モンテッソーリの精神をこれからも息長く未来に向けて発信し続けていけたらと思う。

おわりに

日本モンテッソーリ協会が学会になることにより、若き研究者も増加している。モンテッソーリ教育の普及発展には、理論的研究と実践が車の両輪のようにバランスを取って質の向上と信頼を社会全般に認めてもらうことが重要であろう。と同時にモンテッソーリ教育に対する誤解とモンテッソーリアン自身の閉鎖性を取り除き、一般に広めていく努力が必要であろう。我々にできることがいかに小さいかを実感するが、ひとりひとりの実践者が真摯に日々の保育を続けることが、結果として最善の道といえるのではないだろうか。

(2) モンテッソーリ教育が日本の幼児教育研究に果たす役割



元滋賀大学教授 相良 敦子

1、モンテッソーリ教育リバイバルは、日本の幼児教育界に何を与えたか。

日本にモンテッソーリ教育が本格的にリバイバルしたのは1964年だと筆者は勝手に考えている。それは、赤羽恵子氏がドイツでディプロマを取得して1963年12月に帰国し、本格的に実践に取り組んだのが1964年だからである。赤羽恵子氏は帰国するや鼓常良氏の所にあったモンテッソーリ教具を使って京都で実践を始めたが、その後すぐにうめだ「子供の家」で本格的にモンテッソーリ教育の実践と教師養成に取り組んだ。これが導火線となって、日本中にモンテッソーリ教育熱が広がっていった。その1964年といえば、日本の幼児教育界は、1956年以来の幼稚園教育要領が「告示」になり、日本の幼児教育がカチカチの一斉保育になっていく元年であった。1964年は、日本の幼児教育界に二つの対照的な保育形態が開始した年だと言える。一方に、国の指針が画一的な一斉教育形態を確立した年であり、他方で、一人ひとりの自由意志とリズムを尊重するモンテッソーリ教育が日本社会に誕生していく元年であった。

それから20年を経た1984年に、日本の教育界は中学生の校内暴力に悩まされ、臨時教育審議会を開催。この審議会は、「荒れの元凶は一斉画一教育にある」と判断し、教育形態を抜本的に変えることを提唱した。その先頭を切ったのが幼児教育だった。

1989年に抜本的に改定された新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針が発表され、1990年からの施行となった。抜本的改定と言われるのは、冒頭に「環境を通してする教育」という言葉が打ち出されたことである。この考え方は、改定を担当する人々が欧米諸国の幼児教育現場を視察し、モンテッソーリ教育現場から大きな示唆を受け、モンテッソーリ教育を下敷きにして作成したのだという。

国が出した指針の冒頭に「幼児教育は環境を通して行う」という大原理が打ち出された

き、モンテッソーリ教育関係者は、「モンテッソーリ教育の時代が来た」と大喜びしたものである。

ところが、それから5～6年を経た1990年代後半になって、小学校に「新しい荒れ」という社会現象が生じた。それまで学校で荒れるのは思春期で自分を御するのが難しい中学生たちだと思っていたのに、小学生たちが教室に入らない、座ってられない、先生の話を聞けない、暴れる、等で先生たちを驚かせることになった。「なぜ、こんな子どもたちが日本中で現れたのか」が問われ、「このような小学生の荒れは、新しい教育指針になって以来の現象だ」と言う人は多かった。しかし、公的な立場の人は、国の指針のせいだとは絶対に言えず、副次的な諸理由を挙げて弁明した。国の指針を実施するにあたり何が間違っているかが言えなかったのである。

「環境を通してする教育」というモンテッソーリ教育の中心原理が国の指針に採用されたにもかかわらず、出てきた結果は、モンテッソーリ教育が大切にしてきたものとは大違いであった。国の指針を解説し指導する人たちは、「環境を通してする教育」は「遊び」によって実現するのだと、専ら「遊び」の大切さを強調した。フレーベルの思想が日本の幼児教育界を主導した頃から変わらない「遊び」至上の幼児教育論は、今も日本の幼児教育界の王道である。モンテッソーリが発見した「環境を通してする教育」の背後にある科学的・哲学的根拠を日本の教育界は研究し、理解することが出来ないうで今日に至っている。

ところが、モンテッソーリ教育の実践は年月と共に深まっていった。モンテッソーリ教育実践の技術と精神を身につけた教師のもとで育った子どもたちは、学童期に入って秩序と方向性を顕わし、人格として調和のある姿が特徴となった。(『モンテッソーリ教育を受けた子どもたち』相良敦子著、河出書房新社、2009 参

照)。そして、「遊び」中心の自由保育で幼児期を過ごしてきた子ども達との間に対照的な相違が現れることになった。(『お母さんの発見』文春文庫 234～237頁 相良敦子著 2013年)

モンテッソーリ教育リバイバルから半世紀を経て、子どもの育ちそのものが、幼児期の教育に必要な諸要素を明らかにすることになったと言える。

2、モンテッソーリ教育実践の成熟が日本の幼児教育界に貢献する新たな側面

前述したようにモンテッソーリ教育はこの半世紀に、日本の幼児教育界に理論的貢献をすることはできなかった。ところが、50年間をかけて深めてきたモンテッソーリ教育実践は、それによって育った子どもの生き方によって日本の教育界に新たな側面から貢献する時代に至ったのではないかと思う。

日本の教育界の近代化は、欧米の近代教育思想の導入で始まった。J. J. ルソーを、「近代教育の幕を開けた人！」と称賛し、「自然の力」を楽観的に信頼し、「自由」を手放しに評価した。その考え方は日本では21世紀に至った今日も未だ検証され修正されないままである。この検証の欠落が、1990年にモンテッソーリ教育を下敷きにして「抜本的改訂」と銘打って出された国の新しい指針を骨抜きにしたのである。「遊びが大事！」という国の指針には、ヨーロッパでは既に厳しく検証された18～19世紀の「自然主義」の根本思想が無反省のまま生きている。「人間性とそれ特有の能力や傾向が善である」という形而上学的な自然観と、「人間の原始状態」は自然であるという形而下的自然観を混同して、人間の本来の正常状態は、放任することによって現れ得るという論理をたてたのが自然主義であった。ヨーロッパのキリスト教社会で生まれた自然主義は、同じくキリスト教哲学によって批判され、修正された。モンテッソーリの人間観と教育方法は、この自然主義教育論の過ちを見極め、乗り越えたものである。モンテッソーリが明らかにした人間本来の姿が現れる「正常化」は、放任する教育によるのではなく、人格が備えた「自由意志」と「知性」のエネルギーを秩序づけることによる。モ

ンテッソーリ教育によって「人格」が育つ道筋とそれを支える教育環境や援助技術が明らかにされた。しかし、前述したように哲学的基盤が弱い日本の教育界に「人格」としての育ちを掲げ、理論的に影響することは極めて難しいのである。

ところが、教育は実践の結果として育った人間の生き様がものを言う。モンテッソーリ教育実践のおかげで、この半世紀に「人格」が育った人たちの共通した生き様が注目され評価される時代になった。それだけではない。何らかの障害を抱えた子どもが、モンテッソーリ教育によってバランスを取り戻し、良い方向に育つ事実が明らかになってきている。

発達障害をはじめ何らかの障害をもった子どもたちが増えてきた今日、そのような子どもを包摂した教育＝インクルーシヴ教育は、否が応でも現場の重要な課題となっている昨今である。障害児教育からスタートしたマリア・モンテッソーリが、幼児教育の本質を世に示したように、日本の幼児教育界にモンテッソーリ教育が真に貢献するのは、インクルーシヴ教育の時代に入って、そこで発揮する教育技術や環境構成を支える論理であろう。

日本モンテッソーリ協会は、モンテッソーリ教育の正統性を庇護する役割の時代を経て、モンテッソーリ教育の普遍的な力を一般化し、活かしていく新たな貢献の時代に入ったと思う。

(相良敦子先生は、本誌校了間近の平成29年6月26日に急逝なさいました。心から哀悼の意を表します。)

(3) 日本モンテッソーリ協会（学会）の今後の在り方

日本モンテッソーリ協会（学会）会長 前之園 幸一郎

根本的でありにも大きなテーマが記念誌企画委員会から与えられた。本協会の将来像を描くための基本的出発点は、今日の社会的現実の中でなぜ今モンテッソーリ教育が大きな意味を持ち、かつ必要とされているのかを改めて冷静に考えることであり、その十分な理解の上に確信と情熱をもってモンテッソーリ教育の発展と普及のために真剣に取り組むことにあると思われる。なぜモンテッソーリ教育は時代の変化や流行にかかわりなく常に新しいのか。

今日の世界の状況は、昨今の不幸な事件に見られるように残念ながら不信にもとづく分裂と敵対が渦巻く混沌の中にあると言っても過言ではない。モンテッソーリは、かつて戦火の絶えない厳しい現実の中にあって宇宙的視点を提示することによって子どもの教育の可能性と世界平和の確立への方向を指し示した。彼女によると、この宇宙的視点こそが混沌の背後にある真実を明らかにし、多くの示唆を与えてくれる。

モンテッソーリの宇宙的視点とは、我々が住むこの世界は宇宙有機体であって、人類はその有機体の一つの器官であるとする考え方である。我々は日々生起する混沌とした目前の現実を目を奪われて、雑然としたその現実の背後にある真実の世界の姿を見ることができないでいる。しかし、宇宙的視点によれば、地球上のすべての存在は相互に依存しながら全体として統一と調和に満ちた地球を構成している。人類の生命も当然ながら他の被造物に依存している。しかもその相互依存は無意識の奉仕活動として展開されている。蝶が花から蜜をもらい、他方で植物は蝶に花の受粉を手伝ってもらっている事例を考えればよい。

人間社会も同様である。衣食住について考えるなら、すべての人が他者である誰かに依存して生活している。同時に我々も仕事を通じて見知らぬ他者への奉仕を行っている。日本人が意識することなく口にするエビのほとんどはインドネシアやヴェトナムやアルゼンチンなどの漁

師たちの手によるものだ。世界のどこかに住む誰かが私自身のために働いていてくれる。これらの事実を通じてモンテッソーリは、人類社会にはすでに連帯、調和、一致が存在していると述べている。しかし、悲しいことに人はそれを認めようとしなない。なぜなら国境と国土中心主義による伝統的な意識が、眼前にすでに存在するものに目をふさいでいるからだ。しかし、子どもたちは大人とは異なる。まだ愛国心や国民意識や人種の偏見などの固定観念に支配されていないからである。

子どもたちは、宇宙全体を統一して成り立たせている普遍的なものの存在を自ら知る機会が与えられるならば、その事実に素直に感嘆し畏敬の念を抱く。また、自身の観察を通して自然界の創造の神秘を納得しながら感受するならば、子どもたちはコスミックな調和を謙虚に受け入れ吸収することができる。モンテッソーリによれば、子どもにはコスミックな視点による世界の現実の背後の連帯、調和、統一の存在を知覚的、身体的に受容する準備が整っているのである。

この宇宙的視点に加えて、モンテッソーリは教育を可能ならしめる根拠としての人間の傾向性について強調している。人間は、民族や種族などの違いや文化的多様性にもかかわらず、身体的にも精神的にも基本的要素は変わらない。アフリカに住む子どもも北極圏に暮らす子どもも成長発達のプロセスは不変である。モンテッソーリは、その不変の要素を「人間の傾向性」と呼んだ。新生児は2歳までに通常「話す」ことができる。新生児自身の内部の「目に見えない先生」が導いて、新生児に言葉を吸収させ「話す」ことを可能にするからだ。「話す」言語の内容は環境によって決定される。この目に見えない先生がモンテッソーリの言う人間の傾向性である。どのような社会であれ、読み書きのできない人は存在しても、「話す」ことへの特別の教育を必要とする人はいない。この事実が

傾向性の存在を物語っている。

傾向性はすべての人間に普遍的に見られる特徴である。それは時代が変わっても変わることのない人間の内部からあふれ出る強力なエネルギーであり傾向である。その最も基本的なものとしてモンテッソーリは「見当識（オリエンテーション能力）」をあげている。これは人間が出生の直後から持っている能力である。すなわち、自分が今どこにいるかの位置確認をする能力であり、自分の存在の座標軸を見定める羅針盤ともなる能力である。『幼児の秘密』によれば生後6か月の乳児が自分の見慣れた環境であるベッドの部屋の変化に不機嫌になり、泣き出した事例が記されている。この乳児は、自分の見当識による秩序感の乱れに反応したのである。この見当識を基本にして新しい環境の探求、観察、秩序づけ、他者との関係、コミュニケーション、創造、抽象化などの傾向性が、相互に作用しながら発達していく。さらに、自己完成への傾向性である向上心は、自発的活動を通して練習の繰り返し、間違いの自己訂正、正確さの追求などの欲求を触発し、自己コントロールに向かう。しかしながら、モンテッソーリは傾向性がいくつあるかについては言及していない。ただそれが、子どもの本来的な自然に属するものだとされているのみである。

さて、6歳児はすでに家庭生活が営まれている身近な環境については吸収している。児童期の子どもたちは、乳幼児期の感覚的探求だけではもはや把握できない世界を観察と想像力を駆使して理解しようと努める。モンテッソーリは、6歳以降の子どもたちには世界への鍵を与えなければならないが、その扉を開くのは子どもたち自身であると述べている。まさにその援助が教師の重要な役割となる。子どもたち自身が、匿名の隣人の無意識の善意と連帯とによって成り立っている調和的な人類社会の仕組みを自ら認識するように援助することが教師に課せられているのだ。その成果による新しい子どもの出現が平和への希望の灯となるだろう。つまり、子どもは人類が新たに進むべき国境を超えた発展の方向を指し示してくれる。子どもは人類の希望であり未来への約束であるとモンテッソーリが述べたのはこの意味においてである。

本協会の未来像について語るべき内容が、モンテッソーリ教育の時代を超えた新しさと、その揺るぎない教育原理を要約することに終始した。未来を創造する新しい子どもの育成のためにはモンテッソーリ教育の精神を深く体得した教師の存在が不可欠の前提となるからである。本協会は、全国各地のモンテッソーリ教育の教師、研究者が学び合い磨き合った共通の成果の上にモンテッソーリ教育がさらなる発展を遂げることを念願している。協会創立50周年を機に会員各位の一層のご研鑽とご活躍をお祈り申し上げる。

(4) 日本でのマリア・モンテッソーリの幼児教育の受け入れについて思うこと



カトリック幟町教会司祭 ドメニコ・ヴィタリ (Domenico Vitali SJ)

戦前からモンテッソーリ教育がいろいろな国に広がっていきました。日本でも、特に戦後ずいぶんモンテッソーリ教育を受け入れる幼児教育施設が増え、一般の関心が広がってきました。しかしながら、まだまだ満足することはできません。それは日本だけではなく他の国でもそうだと思います。イタリアのシシリア、カルタジローネ市市長だったルイジ・シトゥルゾ神父は、1909年にローマに行った時に、モンテッソーリに会って聖ロレンゾの子どもに家に招かれてそれを見学し、モンテッソーリが亡くなるまで長い付き合いをしました。そして自分が市長であった街に是非ともモンテッソーリ教育を受け入れる子どもの施設を持つとうとしました。彼は45年の間にモンテッソーリ教育方法がなぜイタリアの教育施設や学校で広まっていかと、何回もその疑問に答えようとし、その結果、次の原因があげられると言っています。「イタリアの教育界では自由がない」と。官僚の人たちが考え、またそれを政治家たちが賛成する自由しかありません。それは、イタリアの根本的な問題です。その一様性の中ではモンテッソーリ教育は根付きにくいのです。更に一般の市民が教育の問題について関心が少ないと指摘しています。自由の精神や人格の独立性を受け入れず、学校の教育の全てが国家から独占され、官僚と政治家によってすべて指導されています。現代まで私立学校はある程度自由が認められていますが、試験の時にいつでも文部省から特別な監督が送られています。日本では私立の幼稚園から大学まで国から建物を建てるためや教育のために大きな援助を受けています。イタリアではそのような制度はありません。日本では戦後、モンテッソーリ教育の普及に力を入れ、外国でモンテッソーリ教育を勉強した赤羽先生や松本静子先生、また外国人でそこに力を注いだルーメル神父などの先生方のお陰でかなり普及してきました。毎年モンテッソーリ協会全国大会が開催され、700人位の参加者が集まる事は

他の国には見られないのではないかと思います。しかしながら、更に広がるにはいろいろな妨げがあるように思われます。また次の困難にぶつかるのではないかと考えられます。今の社会は、日本だけではありませんが、どちらかという子どもよりも大人を中心にした社会です。街作りにしてもその大人の便宜が絶えず図られ、日常の生活も子どもよりも大人の生活が大事にされています。それを、モンテッソーリは「大人と子どもの間の戦い」という強い言葉で表しています。子どもたちが出来るだけ長く幼稚園で、また学校で活動してくれるとありがたいと思っています。そのために幼稚園と保育園の保育時間が延び、24時間子どもの面倒をみってくれる保育園も生まれているようです。モンテッソーリはUNESCOの世界人権宣言に賛同するように求められて1951年10月31日に出された「忘れられた市民」というメッセージの中で次の2つの指摘をしています。

- 1 子どもたちは大人に接する時間も欠けている。
- 2 更に自然界の中で過ごす時間も失った。

そういった指摘は現代の日本の社会に特にあてはまることだと思います。しかし、子どもたちを育てるのに人的および物的な環境を欠かすことはできません。子どもたちは家族の皆さんに接することによって、単なる知識ではなく生き方を学んでいかなければなりません。そういう意味でモンテッソーリは教育を「生命への援助」と呼びます。家族、周りの人々の生活などを見て、子どもたちが必要なことを身につけていくということです。自然界で動物は自分の子どもたちが自立できるまでそばに置き、生き方を学ばせます。それが終わったら突き放して自立させます。人間の子供たちは動物と違って、自立に達するまでに長い年月がかかります。その間に特に家庭、他の大人の刺激と模範

が大切になります。

どんな教育の施設でも教師が欠かせません。日本では他の国よりも幼児教育のために教師がよく教育されています。そのために教師は教育についての考え方をしっかり持っていますし、子どもたちにさせるいろいろな計画をも考えています。しかしながら、モンテッソーリは「よい先生になるのに勉強したことや自分の考え方にとらわれないで、子どもたちを良く観察し、その現れるニーズに応えるようにしなければなりません」と言っています。教師に向かって「いろいろな知識や考え方など、身につけたことをふるい落とししてしまいなさい」とも指摘しています。その様な先生になるのはどこの国でも難しいことです。特に日本の場合です。運動会の時に見られることですが、子どもたちがいかに楽しく力を出すかよりも、参加されるご父兄がいかに満足してくれるかを意識しています。

子どもたちはだんだん変わって行って、新しいことを求めていきます。しかし幼稚園の生活の中で先生たちは同じような行事を繰り返してしまうという傾向があります。もちろんそれに対して周りの社会の考え方も大きな影響を及ぼしています。しかし、いつも新しい目で子どもたちを見ることを忘れてはいけません。どんな保育に対しても言えることですが、特にモンテッソーリ教育では去年の子どもたちではなく、目の前にいる子どもの要望と必要性を考えて、行事を絶えず新しく考えていくということは必要だと思います。このチャレンジに応えるために、私たちも新しくなって行って、特に日本では難しいことですが、毎年同じことを繰り返すのではなく、その時の子どもを見つめていくべきです。

モンテッソーリは子どもを「父」や「教師」とまで呼んでいます。そのことを納得するのは簡単ではありませんが、胎児の時から子どもは自分の力で自分を作り上げる、人間を作り上げると言えるでしょう。そのために「人類の父」と呼ぶことができると思います。したがって、

親であっても自分が作り上げた子どもではないので胎児の時から好き勝手することはできませんし、生まれてからもそれを尊重し、よく観察してその成長を見守るということになります。「教師」と呼ばれるのは、自分の成長にあたって子どもたちは自ら生き方を示すことによって、生命は何であるかをあらわし、どの様に成長していくかも大人に教えてくれるのです。そういう意味では、イエス様がおっしゃった言葉と関係があるような感じがします。「子どものようにならなければ、天の国へ入ることはできない」。イエス様は子どもを見なさい、中心にしなさいということを言われています。


日本では日本モンテッソーリ協会と AMI (国際モンテッソーリ協会) がありますし、また先生方の間にモンテッソーリ教育の解釈について対立を生ずることもあります。モンテッソーリの基礎的なものを大切にし、みんな一緒になって子どものためにもっと頑張れるのではないかと思います。それによってモンテッソーリ教育も広がりやすくなっていくことでしょう。

参考文献：

Grazia Honegger Fresco,
Montessori: perché no?, (Franco Angeli,
Milano, 2000) P.67

Scocchera, A,
Maria Montessori Una storia per il nostro tempo, (O, P, M Roma 1997), P.174

VITA DELL` INFANZIA 誌 N.7-8 2015
P.24



マリア・モンテッソーリの珠玉のことばから

Il fanciullo segue la via naturale dello sviluppo del genere umano.
(*Il metodo*, edizione critica, p.314)

子どもは人間の発達の自然の道筋をたどります。

5つの「マリア・モンテッソーリの珠玉のことば」は、前之園幸一郎がイタリア語文献から選び、翻訳した。

資料編



日本モンテッソーリ協会（学会）の紹介

日本モンテッソーリ協会（学会）は、国際モンテッソーリ協会（本部所在地：オランダ アムステルダム）より友好関係団体として認められ、1968年3月に発足しました。母体は、当時の上智大学文学部教育心理学科教授たちによるモンテッソーリ研究会で、以来上智大学とは深い関係を保っています（下記の沿革参照）。

なお、当協会（学会）は、日本学術会議第17期（平成8年9月10日）、第18期（平成11年9月14日）、第19期（平成14年9月13日）、各申請の結果同会議に登録されました。平成17年10月以降は、新体制の独立行政法人日本学術振興会に学術研究団体として登録され、現在に至っています。

－ 記 －

≪日本モンテッソーリ協会（学会）沿革≫

- 1 昭和40年4月（1965年） 上智大学教授ペトロ・ハイドリッヒにより東京都足立区梅田に、モンテッソーリ教育による「うめだ・子供の家」を設立、9月より保育所を開所（園児数8名）。
- 2 昭和42年8月4日（1967年） 「日本モンテッソーリ協会」設立準備会発足。発起人は鼓常良、平塚益徳、クラウス・ルーメル、ペトロ・ハイドリッヒ、菊野正隆、神藤克彦他10名、連絡事務局を上記に置く。
- 3 昭和43年3月（1968年） 「日本モンテッソーリ協会」発足、初代会長 鼓常良、事務局長 坂本堯。事務局は上智大学上智会館1階「キリスト教文化研究所」と同室に置く。（注）当時、坂本堯教授は、上智大学キリスト教文化研究所所長であったため。
- 4 昭和45年3月（1970年） 日本モンテッソーリ協会承認国内最初のコースとして、「上智モンテッソーリ教員養成コース」発足、初代委員長 菊野正隆教授、事務関係を坂本堯教授が上記の場所にて担当。
- 5 昭和46年7月（1971年） 平塚益徳が第二代会長に就任。
- 6 昭和52年8月（1977年） クラウス・ルーメルが第三代会長に就任。
- 7 昭和53年4月（1978年） 平野智美が二代目事務局長に就任。
- 8 平成4年8月（1992年） 松本良子が三代目事務局長に就任。
- 9 平成8年9月（1996年） 第17期日本学術会議に学術研究団体として登録を許され、以後第18・第19期連続登録。平成17年10月より、中央省庁改革による新体制となり、現在は「独立行政法人日本学術振興会」の協力学術研究団体となっている。
- 10 平成10年4月（1998年） 平成10年4月より上智大学上智会館5階において執務に当たる。
- 11 平成17年8月（2005年） 事務局は上記10項からうめだ「子供の家」3階（足立区梅田7-19-23）に移転。
- 12 平成19年5月（2007年） 事務局は上記11項から富坂キリスト教センター2号館内（文京区小石川2-17-41）に移転現在に至る。
- 13 平成19年8月（2007年） 前之園幸一郎が第四代会長に就任、現在に至る。
- 14 平成22年8月（2010年） 鈴木弘美が四代目事務局長に就任、現在に至る。
- 15 平成24年8月2日（2012年） 「ルーメル・モンテッソーリ奨励基金」を創設。
- 16 会員数（2017年6月1日現在）
 - 1）個人会員：日本全国他、台湾、ドイツ等の会員を含め707人（海外会員は3名）。
 - 2）団体会員：196団体。登録口数265口。
 - 3）維持会員：52団体。口数54口。
- 17 役員数（2017年6月1日現在）
 - 1）選挙理事：14名（任期3年、全国支部ごとに会員による選挙で選出され、各支部の最高得票者が支部長を務める。現在支部は10支部）。
 - 2）役職理事：7名（本協会（学会）の承認した教員養成コースの代表者・事務局長）。
 - 3）任命理事：6名（理事改選時の新理事会により必要に応じて任命する。）。
 - 4）常任理事：理事の互選による。現在は14名。
 - 5）監事：2名、理事会の委嘱による（年間2回本会計を当該年度開催の大会会計及び事業の各監査を行い、理事会・定期総会に報告する。）
- 18 運営
 - 1）定期総会：全会員によって構成、本協会の最高議決機関。毎年7月末または、8月初めに開催し、事業・決算報告・事業計画・予算案の審議、会則の変更等、その他本協会が必要と認めた事項を議決する。
 - 2）常任理事会：毎年1月と4月に行い、中間の活動並びに会計状況、また全国大会の素案審議等、その他、必要事項の審議を行う。時には決定する。
 - 3）全国理事会：毎年全国大会の前日に行い、常任理事会よりの報告等を受け、総会への提案等の審議を行う。

日本モンテッソーリ協会設立趣意書

子供は自然から与えられた性情をそなえており、自然の法則に従って十分に発育する権利を持っている。この子供の正常な成長を助けて、かれらの幸福を増進させる努力をなすのが大人の義務であり責任である。

しかるに大人は一般に正しく子供を理解していないため、子供の正常な成長がさまたげられ、かれらの多くが障害児となっている。この実状を思うとき、これに関する根本的な育成原理とその原則の確立が急務と感ぜられる。

幼児の世界や子供の教育法の研究は現時盛んであるが、往々にして正しい生命観を欠くため、実際的成果をあげているとは言えず、この領域に関する限り、なお思索の域をでていないかに見えるのが現状である。

この中であって、生命の神秘に根ざす子供の内在力を発見し、これの発展拡大の可能性を実証することにその生涯をかけたモンテッソーリ女史の教育法の原理こそ、現代の幼児教育界に真の光を与えるものに外ならないと我々は信じる。

女史の遺した業績の継承と発展をめざすモンテッソーリ協会が世界諸国にあってそれぞれ顕著な実績をあげているにもかかわらず、我国にいまだその機関がないのを思い、ここに我々は日本モンテッソーリ協会を設立して、我国に広く女史の原則が研究実践されるよう期するものである。

以上の趣旨に基づき、本協会は次の各項を活動の綱領とする。

1. 子供の心理を研究し、そのすべての能力を尊重して、児童が自然の法則に従って発育することができるよう援助する。
2. 社会における子供の地位を明らかにして、その基本的権利を確立し、子供の幸福を増進する活動を行なう。
3. 児童の正しい育成を通じて人類の福祉に貢献し、人間相互の理解と協力を深めることによって世界平和に寄与する。
4. 進んでは教育全体の刷新をめざし、人間社会を改造し未来のよりよい世界をきづくことを志す。

(本趣意書は昭和43(1968)年4月1日から暫定発効とされ、同年7月21日、総会で確定成立した。なお、ここに『モンテッソーリ教育』(第1号)71頁に記載されている通り掲載した。)

日本モンテッソーリ協会（学会）会則

- 第1条（名 称）
本会は、日本モンテッソーリ協会（学会）という。
- 第2条（事務局）
本会は事務局を〒112-0002東京都文京区小石川2-17-41
富坂キリスト教センター2号館に置く。
- 第3条（目 的）
本会は、日本におけるモンテッソーリ教育研究者間の連携協同により、モンテッソーリ教育原理と実践を研究し、その普及を図ることを目的とする。
- 第4条（事 業）
本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
(1) モンテッソーリ教育法の実践及び普及。
(2) モンテッソーリ教育法の指導者の養成及びモンテッソーリ教員養成コースの認定。
(3) 日本モンテッソーリ協会（学会）全国大会の開催。
(4) モンテッソーリ教育の普及・発展を目的とする奨励金制度の設定。
(5) モンテッソーリ教育教材の研究作成及び普及。
(6) 講演会、研修会及び研究発表会の開催。
(7) モンテッソーリ教育に関する印刷物の発行。
(8) 海外諸国のモンテッソーリ協会との交流及び情報の交換。
(9) その他、必要な事項。
- 第5条（会 員）
1. 本会の会員は、本会の目的に賛同して所定の入会手続きを経た個人及び団体とする。
2. 会員は本会則第19条に定める会費を納入しなければならない。
3. 会員には本会発行の印刷物を配布する。
4. 第1項に定める会員以外に、本会の運営水準を保つ賛助金出資者を、維持会員という。
ただし、維持会員は、理事選挙の選挙権、被選挙権を持たない。
5. 会員が次の各号の一に該当する場合には、その資格を失う。
(1) 会員である個人が死亡、又は一身上の事由によるとき。
(2) 会員である団体が消滅したとき。
(3) 1年以上会費を納めないとき。
- 第6条（支 部）
1. 本会は、会員の希望により、一定地域の中で、支部を設置することができる。
2. 支部の設置及び運営に関しては、理事会に申請し、理事会及び総会の承認を得るものとする。
3. 支部は、本会の理事選挙規定に則って理事及び支部長の選出を行う。
- 第7条（役 員）
本会に次の役員を置く。
- | | |
|-----------|-----|
| 名誉会長 | 1名 |
| 会長（理事長） | 1名 |
| 副会長（副理事長） | 2名 |
| 常任理事 | 若干名 |
| 理 事 | 若干名 |
| 監 事 | 2名 |
| 顧 問 | 若干名 |
- 第8条（役員の仕事）
役員の仕事は次のとおりとする。
(1) 名誉会長は、本会の活動理念に基づき、会長（理事長）に対して意見を述べ、若しくはその諮問に答え、又は報告に徴することができる。
(2) 会長は、本会を代表し理事長となり、本会を総督する。
(3) 副会長（副理事長）は、会長（理事長）を補佐し、会長（理事長）に事故ある時にその職務を代行する。
(4) 常任理事は常任理事会を構成し、

本会の常務を審議し、職務を行う。

- (5) 理事は、理事会を構成し、本会の重要な事項を審議し、職務を行う。
- (6) 監事は本会の会計及び業務の執行状況を監査し、その結果を総会に報告する。
- (7) 顧問は、会長（理事長）が委嘱し本会の諮問に応ずる。

第9条（役員を選出）

1. 理事の選任は次のとおりとする。
 - (1) 本会の定める選挙規定に従って各支部ごとに選出された者14名。
 - (2) 各モンテッソーリ教員養成コースの代表者又はこれに代る者、並びに事務局長。
 - (3) 上記1、2号の理事によって推薦され、会長（理事長）の任命による者、若干名。
2. 会長（理事長）、副会長（副理事長）、常任理事は、理事の互選とする。
3. 監事は、理事又は本会の職員以外の会員から会長（理事長）が推薦し、委嘱する。理事又は本会職員をかねてはならない。

第10条（役員任期）

役員任期は3年とし再任を妨げない。

第11条（機関）

1. 本会は次の機関を置く。
 - (1) 総会
 - (2) 理事会
 - (3) 常任理事会
2. 必要に応じて、各種委員会をおくことができる。

第12条（総会）

1. 総会は、本会の最高の議決機関であって全会員をもって構成する。
2. 総会は、年一回以上会長（理事長）が招集する。
3. 総会に議長を置き次の事項を議決する。
 - (1) 事業計画及び予算
 - (2) 事業報告及び決算

(3) 会則の改正

(4) その他、本会が必要と認めた事項

第13条（理事会）

1. 理事会は、理事をもって構成する。監事は、理事会に出席するものとする。
2. 理事会は、総会に属する議事決定事項以外でこの会が必要とする重要な事項を議決する。ただし総会を開くいとまがない時は、総会に代わって議決することができる。
3. 理事会は会長（理事長）が招集する。

第14条（常任理事会）

1. 常任理事会は理事の互選によって選ばれた者で構成する。監事は、常任理事会に出席するものとする。
2. 総会又は理事会を開くいとまのない時は、総会又は理事会に代わって議決することができる。
3. 常任理事会は会長（理事長）が招集する。

第15条（各種委員会）

1. 本会は必要に応じて委員会を設置することができる。
2. 委員会は理事2名以上が委員となり、当委員会の課題によって会員の協力を求めて委員会を組織する。
3. 委員会は経過、結論を理事会に報告するとともに、その目的を達成したときは、これをすみやかに解散する。

第16条（表決）

総会及び理事会と常任理事会の決議は出席者過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議又は会長（理事長）の決するところによる。

第17条（事務局）

本会の事務を処理するために事務局を置く。

2. 事務局には次の職員を置く
 - (1) 事務局長 1名
 - (2) 書記 若干名

(3) 会 計 1名

3. 前項第2号及び3号の事務局職員は常任理事会が委嘱する。

第18条 (会計年度、帳簿等の保存および廃棄)

1. 本会の会計年度は、毎年7月1日に始まり、翌年6月30日に終る。
2. 本会の会計帳簿、伝票類は7年間保存する。
3. 第2項の保存期間経過後の会計帳簿、伝票類は事務局長の決裁を得て廃棄するものとする。

第19条 (経 費)

- (1) 本会の経費は、入会金2000円、個人・団体年額5000円。入会金不要の維持会費年額一口10,000円、寄付金、その他の収入による。
- (2) 維持会費は、個人・施設とも一口以上、上限は定めない。

第20条 (規 定)

- (1) この会則に定めない事項で、本会の運営のために必要と考えられる規定(別表参照)は、理事会の議を経て総会で定めることができる。

この会則に定めない事項で本会の運営のために必要と考えられる規定(別表参考)は以下のとおり。

[別 表]

- (1) 選挙管理委員会規定
- (2) 理事選挙規定(投票要領は別にあり)
- (3) 編集委員会規定(投稿・査読に関する規定・要領は別にあり)
- (4) 支部規定
- (5) モンテッソーリ教員免許取得証明書規定
- (6) 役員費用弁償内規
- (7) 日本モンテッソーリ協会の収支報告書における勘定科目について
日本モンテッソーリ協会の収支報告書における勘定科目は、平成21年

度当協会収支報告書を基準に下表のように確定する。(表は別にあり)

(8) 役員旅費規定

(9) 日本モンテッソーリ協会(学会) ルーメル・モンテッソーリ奨励基金規定

(10) 全国大会 経費運用規定

[創 立] 日本モンテッソーリ協会の
創立年月日

昭和43年(1968年)7月
21日

附 則

1. この会則は、昭和43年 4月 1日から施行する。
1. この会則は、平成 7年 8月 1日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成10年 1月10日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成16年 7月30日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成17年 8月 1日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成19年 1月27日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成20年 8月 1日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成21年 8月 1日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成23年 8月 7日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成24年 8月 4日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成25年 7月30日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成26年 8月 6日から一部改正し、施行する。
1. この会則は、平成28年 8月 9日から一部改正し、施行する。

以上

全国大会のあゆみ

第	年	月日	担当支部	開催地	会場	テーマ	大会準備委員長 /実行委員長	*実践研修コース /ワークショップ担当コース
1	昭和43 (1968)年	7/21、22		東京	上智大学・うめだ「子どもの家」			
2	44年	7/27、28		東京	上智大学		宮下 郁司	
3	45年	8/1-8/4		京都	京都国際会館			
4	46年	7/21-7/25		東京	上智大学・うめだ「子どもの家」			
5	47年	8月27日		東京	上智大学・うめだ「子どもの家」	モンテッソーリ教育を通じて幼児教育の原理を探る	藤原 元一	
6	48年	8/18-8/19		大分	湯布院中央公民館	モンテッソーリ教育を日本に導入する際の諸問題	坂本 秀	
7	49年	7/31-8/1		東京	上智大学	モンテッソーリ教育の科学性		
8	50年	7/27-8/1		川崎	聖マリアンナ医科大学	モンテッソーリ教育における人間性の再発見		
9	51年	7/27-7/29		川崎	聖マリアンナ医科大学			
10	52年	8/1-8/3		東京	上智大学		平野 智美	
11	53年	7/30-8/1		東京	上智大学		平野 智美	
12	54年	7/29-7/31		東京	上智大学		平野 智美	
13	55年	7/29-7/31		東京	上智大学		平野 智美	
14	56年	7/29-7/31		東京	上智大学		平野 智美	九州コース
15	57年	7/29-7/31		東京	上智大学		平野 智美	上智コース
16	58年	7/29-7/31		東京	上智大学		平野 智美	九州コース
17	59年	7/29-7/31		東京	上智大学		藤原 元一	AMI
18	60年	7/29-7/31		福岡	都久志会館・ガーデンパレス		鈴木 キミエ	上智コース
19	61年	7/29-7/31		釧路	市民文化会館・ひぶな幼稚園		平野 智美	九州コース
20	62年	7/29-7/31		東京	上智大学			AMI
21	63年	7/29-7/31	中国	岡山	ノートルダム清心女子大学			上智コース
22	平成1年	7/29-7/31	関東・東京	東京	上智大学		平野 智美	AMI
23	2年	7/29-7/31	近畿	京都	聖母学院短期大学			上智コース
24	3年	8/1-8/3	関東・東京	東京	上智大学		平野 智美	信望愛学園コース
25	4年	7/29-7/31	中国	広島	広島国際会議場		クラウス・ルーマル	AMI
26	5年	7/29-7/31	関東・東京	東京	上智大学		野田 実	京都コース
27	6年	7/28-7/30	北陸	長岡	ホテルニューオオタカ長岡		クラウス・ルーマル	上智コース
28	7年	7/29-7/31	関東・東京	東京	上智大学			九州コース
29	8年	7/29-7/31	九州	長崎	長崎純心大学		クラウス・ルーマル	信望愛学園コース
30	9年	7/29-7/31	関東・東京	東京	上智大学		鷹宿 遥衛	AMI
31	10年	7/29-7/31	東北	仙台	仙台百百合学園		山下 悟	信望愛学園コース
32	11年	7/29-7/31	四国	高松	マツノイハルス			信望愛学園コース
33	12年	7/29-7/31	関東・東京	東京	上智大学	子どもに学ぶ自然の法則	クラウス・ルーマル	京都コース
34	13年	8/1-8/3	北海道	石狩	聖女子大学	モンテッソーリ教育で学ぶ子どもの見方・たすけ方	甲斐 仁子	京都コース
35	14年	7/31-8/2	中部	大山	名鉄大山ホテル	子どもたちの真に人間らしい育ちを伝えるために果たすべき大人の役割	田中 穂子	AMI
36	15年	7/29-7/31	九州	神岡	ハーバードビューホテル	子どもとともに目指す平和	佐 盛夫	九州コース
37	16年	7/29-7/31	関東	千葉	常葉プリンスホテル	子どものいのちとモンテッソーリ教育	町田 明	東京コース
38	17年	7/29-7/31	近畿	兵庫・鳴鶴子	ホテル舞子ヒラ	モンテッソーリ教育と次世代育成力	相良 敦子	京都コース
39	18年	8/7-8/9	中国	岡山	ノートルダム清心女子大学	モンテッソーリ教育の原点を見つめて	奥山 清子	信望愛学園コース
40	19年	8/7-8/9	東京	那城	駒沢女子短期大学	「子どもの家」開設100周年	天野 珠子	東京コース
41	20年	8/1-8/2	東北	仙台	仙台百百合学園	よりよいモンテッソーリ教育を！	鷹宿 遥衛	AMI
42	21年	8/1-8/3	北陸	福井	アオッサ	教育に希望をつなぐために	前川 さちえ	京都コース
43	22年	7/28-30	四国	徳島	あわぎんホール	子どもの探しているものを求めよう	佐 盛夫	九州コース
44	23年	8/6-8/8	北海道	札幌	藤女子大学	大自然からの恵みと愛のまなざしを	前鼻 百合江	京都コース
45	24年	8/3-8/5	中部	名古屋	サンアラザシズンズ	生活に根ざし、生活を変えるモンテッソーリ教育の探求	森下 京子	AMI
46	25年	7/30-8/1	九州	宮崎	パシフィック会議センター	新しい子ども、新しい教師、新しい教育	中尾 昌子	長崎純心コース
47	26年	8/6-8/8	関東	横浜	リージェンシーホテル	子ども一人ひとりのおもしろいを受けとめる	松川 和照	東京コース
48	27年	7/30-8/1	近畿	奈良	日龍奈良ホテル	未来への責任	藤野 正三郎	京都コース
49	28年	8/8-8/10	中国	広島	リーガロイヤルホテル広島	子どもと平和	高田 美城	広島コース
50	29年	8/8-8/10	東京	東京	東京都庁センターホテル	子どもによりそう大人たち	江島 正	東京コース

*教員養成コースの名称につきましては、次のように短縮させていただきました。上智モンテッソーリ教員養成コース→上智コース、NPO法人東京モンテッソーリ教育研究所付属教員養成コース→東京コース、九州幼児教育センター・トレーニングコース→九州コース、京都モンテッソーリ教師養成コース→京高コース、(学)信望愛学園モンテッソーリ教師養成コース→京高コース、純心モンテッソーリ教員養成コース→純心コース、東京国際モンテッソーリ教師養成コース→AMI

注) 事務局に保存されている『モンテッソーリ教育』と「大会発表要旨取録」を参照いたしました。調べられない箇所もありましたし、誤りもあるかもしれませんが、ご容赦ください。

学会誌『モンテッソーリ教育』の目次 (第38号~49号)

ISSN 0913-4220

モンテッソーリ教育 第38号

巻頭言 モンテッソーリ教育における「教育と平和」……前之園 幸一郎 (1)
 通 俣 藤原元一先生、また会う日まで……クラウス・ルーメル (2)
 モンテッソーリ未発表資料 子ども社会党の目標……マリア・モンテッソーリ 訳 江島正子 (3)
 講演 乳児のための環境づくり……シルヴァーナ Q. モンターネロ 訳 三浦 勢津子 文責 鈴木弘美 (6)
 0歳からの発達……ジュディ・オライオン 訳 深津高子 (14)
 公開対談 次世代育成力をめぐる動き：メディアと子ども……清川輝基、相良敦子 (53)

シンポジウム
 モンテッソーリ教育と次世代育成力
 第1シンポジスト 次世代育成力……名村晋史 (62)
 第2シンポジスト 「幼稚園における障害のある幼児の受け入れや指導のあり方」から……池田和子 (66)
 第3シンポジスト 次世代育成支援時代の保育園の役割……海道洋子 (70)
 司会者としての報告……天野珠子 (76)

論文
 モンテッソーリ、フェミニズムの変遷……最上 学 (79)
 実践報告・事例報告
 IT社会におけるモンテッソーリ教育の展開……田中昌子 (90)
 モンテッソーリ教育に学ぶ家庭教育力再生への道のり……三上恵子 (100)
 園芸療法立場から見た「モンテッソーリ教育」……森 愛 (110)
 2歳半から親子で始めるモンテッソーリ教育……上村瑞枝 (121)

海外情報
 イタリアにおけるモンテッソーリ教育の動き……ドメニコ・ヴィタリ (130)
 第25回国際モンテッソーリ協会主催シドニー世界大会に参加して……深津高子、廣津香織、三浦勢津子 (134)

図書紹介
 松村祐三著 『見つける！伸ばす！幼児の潜在能力』……鈴木弘美 (140)
 江島正子著 『世界のモンテッソーリ教育』……クラウス・ルーメル (143)
 第38回全国大会参加報告……相良敦子、小池良枝子、大塚悦子 (145)
 支部報告…… (149)
 教員養成コース報告…… (161)
 事務局報告……松本良子 (169)
 <<英文摘要>>……訳 クラウス・ルーメル (175)

2005
日本モンテッソーリ協会

ISSN 0913-4220

モンテッソーリ教育 第39号

巻頭言 「子どもの家」設立100年……クラウス・ルーメル (1)
 モンテッソーリ未発表資料 モンテッソーリからアドレナへ(インド発)……マリア・モンテッソーリ 訳 江島正子 (2)
 講演 モンテッソーリ教育の現代的性について……渡邊和子 (7)
 超少子化時代の幼児のくらし……江岸安彦 (21)

シンポジウム
 人格形成と環境
 第1シンポジスト 五感体験、感情体験が心を育てる……船 明子 (33)
 第2シンポジスト 児童精神医学の臨床から見えてくるもの……古元輝子 (39)
 第3シンポジスト モンテッソーリ、シュタイナー、そして神智学……前田吉則 (45)
 司会者としての報告……前之園幸一郎 (47)

論文
 モンテッソーリ教育思想にみる神智学的パラダイム-シュタイナー教育思想との接点……高藤吉則 (50)
 実践報告・事例報告
 人間関係の正常化についての考察……高月教恵 他 (69)
 モンテッソーリ教育における年長児の保育……天野珠子 (79)
 学習期の学習活動に必要とされる幼児期に培われるべき力の検討……野原由利子 (91)
 小さな備だまりで始めた母と子のモンテッソーリ教育……倉田左恵子 (102)
 心身の調和的発達と自立を援助する体育活動……北高唯美 (111)

海外情報
 「子どもの家」100年祭ローマ国際会議 I……松本藤子 (119)
 「子どもの家」100年祭ローマ国際会議 II……ドメニコ・ヴィタリ (122)
 ラウンド・テーブル
 A 0-3歳児……村上貞子、久万美子 (127)
 B 3-6歳児……前田瑞枝、秋田加代 (132)
 C 障害児を受け入れて……水島智次 (138)
 D 子育て支援……水島解子、荒山恵子 (140)
 E 学童保育……戸田恵子、竹田輝子 (142)
 F 園内研修、指導者育成……佐藤良子、林基子 (146)

図書紹介
 「モンテッソーリ教育用語辞典」……荻野美佐子 (151)
 佐々本信一郎著 『子供の潜在能力を101%引き出すモンテッソーリ教育』……林信二郎 (154)
 池田政純、池田則子著 『ひとり、で、できた！』……甲斐仁子 (158)
 第39回全国大会参加報告……奥山清子、高月教恵、福原史子、堀内秀子、下條善子 (163)
 支部報告…… (168)
 教員養成コース報告…… (182)
 追悼 メアリー・ヘイズさんの偉業……クラウス・ルーメル (192)
 追悼 塾村恵先生を偲んで……川村洋子 (193)
 事務局報告……松本良子 (194)
 <<英文摘要>>……訳 クラウス・ルーメル (201)

2006
日本モンテッソーリ協会

ISSN 0913-4220

モンテッソーリ教育 第40号

巻頭言 生きる喜びと感動を子どもたちに……赤羽恵子 (1)
 新田会長代について……ドメニコ・ヴィタリ (2)
 モンテッソーリ未発表資料 カルフォルニア・レクチャー(1915年9月13日)……マリア・モンテッソーリ 訳 クラウス・ルーメル、江島正子 (4)
 講演 マリア・モンテッソーリの教育改革……ヨゼフ・ピタウ (14)

シンポジウム
 モンテッソーリ教育の継承と創造
 第1シンポジスト 日本の幼稚園に奉仕できる喜びと感謝……乾 雅夫 (22)
 第2シンポジスト モンテッソーリ教育の継承と発展について……江口浩三 (27)
 第3シンポジスト 教師養成コースの使命……下條善子 (32)
 第4シンポジスト モンテッソーリ教育の継承と創造……林 信二郎 (37)
 司会者としての報告……天野珠子 (41)

論文
 モンテッソーリ教育の歴史的歩みと今日への問題提起-前之園幸一郎 (44)
 実践報告・事例報告
 モンテッソーリ治療教育における給食当番活動の実践からの一考察……岡本仁美、藤岡田万喜 (57)
 日本におけるモンテッソーリ教育の動向……福原史子、奥山清子、高月教恵 (71)
 6歳までの教育をその後の教育内容から俯瞰してとらえる重要性……本田 豊 (82)

海外情報
 モンテッソーリ百年祭幼児教育国際交流大会報告……野原由利子、池田和子、村上 隆 (91)
 ラウンド・テーブル
 A 保育者の育ち合い……野村 経、朝比奈太郎 (100)
 B 適切な強固のための観察力を身につけるには……奥山清子、木島幸子 (103)
 C 子どもが自己活動を育てる……田中弘美、安藤雅美 (108)
 D 子どもを育む園庭の意味……中尾昌子、藤原江理子 (111)
 E 保育者と保護者の育ち合い……杉山 智、前田辰彦 (116)
 F 障害児との育ち合い……鈴木弘美、森田倫代 (120)

図書紹介
 前之園幸一郎著 『モンテッソーリと現代-子ども・平和・教育』……林 信二郎 (125)
 相良敦子著 『親子が輝くモンテッソーリのメッセージ』……島田英城 (130)
 藤原元一・桂子・江理子共著 『モンテッソーリ教育-やさしい解説』……岡 聡 (134)

第40回全国大会参加報告
 第40回全国大会に参加して……天野珠子、町田 明、田中正治、帆高壽社、帆高圭子 (138)
 支部報告…… (145)
 教員養成コース報告…… (159)
 事務局報告……松本良子 (169)
 『モンテッソーリ教育』総目次第1号~第40号…… (183)
 事務局報告……松本良子 (200)
 <<英文摘要>>……クラウス・ルーメル (209)
 編集後記……天野珠子 (220)

2007
日本モンテッソーリ協会

ISSN 0913-4220

モンテッソーリ教育 第41号

巻頭言 子どもたちを「忘れられた市民」にはせならない……ドメニコ・ヴィタリ (1)
 講演 人間の可能性を発達させるモンテッソーリ教育の普遍性について……シルヴァーナ Q. モンターネロ 訳 深津高子 (2)
 子どもが生き、成長するよりよい環境をめざして……ドメニコ・ヴィタリ (21)

シンポジウム
 いま日本の幼児教育にもとめられていること
 第1シンポジスト 幼児教育と食育……藤村文文 (31)
 第2シンポジスト 軽度発達障害の特徴に寄り添った幼児教育を……司馬理英子 (38)
 第3シンポジスト 丁寧な日本の暮らし……深津高子 (43)
 第4シンポジスト 保育界の動向に伴うモンテッソーリ教育界の取り組み……甲斐仁子 (51)
 司会者としての報告……林信二郎 (58)

論文
 モンテッソーリの「いと小さきもの」へのまなざし……前之園幸一郎 (62)
 モンテッソーリ教育を基盤とした音楽指導について……渡子かおり (80)

実践報告・事例報告
 小児科臨床医としてモンテッソーリのアプローチが効果的であったAD/HD症例に関する考察……青木 正 (94)
 話しことばから書きことばの獲得……野原由利子、森下京子、村田尚子 (103)

教育エッセイ
 モンテッソーリ教育40年を顧みて(1)……クラウス・ルーメル (116)

図書紹介
 森良子著 『音楽する？』……前田瑞枝 (133)
 ヨーン・スウェンソン著 渡邊幸勝訳 『ノンニとマンニの不思議な冒険』……鈴木弘美 (138)

第41回全国大会参加報告
 第41回大会を振り返って……米島幸子 (145)
 支部報告…… (147)
 教員養成コース報告…… (161)
 事務局報告……松本良子 (170)
 <<英文摘要>>……クラウス・ルーメル (180)
 編集後記……江島正子 (201)

2008
日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第42号

ISSN 0913-4220

巻頭言 ここまでおいで—第42回全国大会に学ぶ— 町田 明 (1)

講 演
子どもは未来の希望—モンテッソーリの教育思想から学ぶもの— 片山忠次 (2)

シンポジウム
モンテッソーリ教育に取り組んで学んだこと
第1シンポジスト 高田カトリック幼稚園での取り組みを通して 友井桂子 (14)
第2シンポジスト 藤幼幼稚園での取り組みを通して 白井祥子 (20)
第3シンポジスト つばき保育園におけるモンテッソーリ教育を通しての保護者支援 海邊洋子 (26)
司会者としての報告 林信二郎 (31)

論 文
子どもの発達と援助—子育て支援をめぐる— 前之園幸一郎 (35)
モンテッソーリの音楽教育—「ドルメツシュ(Dolmetsch)」とは— 藤 愛 (56)
開業医として「静産の療育」等が効果的であったアスペルガー症候群症例に 青木 正 (64)
関する考察
モンテッソーリ教育法における「見える実践」と「見えない実践」について 孫 秀洋 (73)

実践報告・事例報告
DVD「深草子どもの家の一年—いちばん良いものを子どもたちに—」 赤羽恵子 (89)
「三つ編み」の習得過程における幼児の心の育ち 福原史子・峰谷里香・岡本純子 (99)

教育エッセイ
モンテッソーリ教育40年を顧みて(2) クラウス・ルーメル, S.J. (115)

海外情報
アムステルダム「マリア・モンテッソーリ—子どもたちのための生涯—」 オムリ聖子 (133)

図書紹介
「100年あとの、家と学校での子供の食生活についてのマリア・モンテッソーリのレシピ」 ドメニコ・ヴィタリ, S.J. (138)
クラウス・ルーメル著 Von Koeln nach Tokyo Lebenserinnerungen 1916-2008 Boehm, Koeln (Germany), 2008 江島正子 (142)
相良教子著「モンテッソーリ教育を受けた子どもたち—幼児の経験と証」 野原由利子 (149)
ピアンカ・マッテルン著「高齢者のためのモンテッソーリ教育」 江島正子 (156)
マリア・モンテッソーリ著 クラウス・ルーメル, 江島正子共訳「カリフォルニア・レクチュア—モンテッソーリ教育の実践理論」 鈴木弘美 (162)

第42回全国大会参加報告
全国大会を終えて 前川さちえ, 塩谷庸子, 大西小夜 (169)
英文摘要 クラウス・ルーメル, S.J. (174)
教員養成コース報告 (181)
支部報告 (186)
事務局報告 松本良子 (201)
編集後記 松本静子 (222)

2009 日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第43号

ISSN 0913-4220

追 悼 クラウス・ルーメル先生の帰天— 前之園幸一郎 (1)
巻頭言 誰の、何のためのモンテッソーリ教育でしょうか 松本良子 (3)

講 演
創造のうちに育つ子どもたち— 光延一郎, S.J. (4)
セガンとその教具について 津由裕次 (18)

シンポジウム
健全な自我を求めて
第1シンポジスト 幼児期に育むべき子どもの自我とは 田村隆史 (27)
第2シンポジスト 発達障害の知識を生かした子育て 司馬理英子 (29)
第3シンポジスト 健全な自我の構成を求めて 乾 盛夫 (34)
司会者としての報告— ドメニコ・ヴィタリ, S.J. (41)

論 文
マリア・モンテッソーリにおける子ども観の転換— 前之園幸一郎 (45)
モンテッソーリのリズムの練習と「音楽鑑賞」— 藤 愛 (56)
子どもの「幸福」観についての考察— 江口浩三 天野珠子 (62)
— ベスタロッテとモンテッソーリの比較— 濱崎久美 (75)
モンテッソーリ教育における「子どもの家」と人間形成— ケア論の視点から— 津津真香 (91)
コスミック教育と植物— 森 愛 (102)

実践報告・事例報告
広島市のモンテッソーリ園からほじまる卒園の一歩— 三川美穂 島田美城 (113)
モンテッソーリ教育を保育者養成に活かすために— 岡田 暁 (124)

教育エッセイ
モンテッソーリ教育40年を顧みて(3) クラウス・ルーメル, S.J. (134)

海外情報
AMI トレーナーミーティングに参加して— 松本静子 (147)
AMS 2010年全国大会参加とHorizon Montessori Schoolへの訪問— 福原史子 (152)

ラウンド・テーブル
A モンテッソーリ教育の導入と教師の養成— 江口浩三 野原由利子 (157)
B 「保護者との連携および子育て支援」報告— 江口浩三 天野珠子 (162)
C 入浴時間における感覚訓練— 下地ちか子 水島輝子 (167)
D 幼児教育におけるコスミックな見方— 岡 聡 綿貫真実 (170)
E 発達支援への取り組み— 佐々木信一郎 藤田まづ代 (174)

図書紹介
大江漢明著「世界—の子ども教育モンテッソーリ」 大原青子 (178)
藤原静子監訳「モンテッソーリ法と関係療法を用いた痴呆性老人の機能改善のための援助」 江島正子 (182)

第43回全国大会参加報告
第43回大会を終えて— 乾 盛夫 孫占教之 堀田和子 (188)
支部報告— (192)
教員養成コース報告— (206)
事務局報告— 松本良子 (214)
英文摘要— クラウス・ルーメル, S.J. 鈴木弘美 (223)
編集後記— 江島正子 (246)

2010 日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第44号

ISSN 0913-4220

巻頭言 生命に魅せられて— 松本静子 (1)

講 演
モンテッソーリ教育との出会い— 赤羽恵子 (2)
私とモンテッソーリ教育の出会い— 松本静子 (13)
私とモンテッソーリ教育との出会い— 歴史 新しい人間形成— 平和教育— 下條節紀 (25)
モンテッソーリ教育との出会い— 歴史— 「正常化」現象— 相良教子 (37)

シンポジウム
子どもから学ぶ保育の本質
第1シンポジスト 情緒支援教育とインクルーシブな保育— 進田浩明 (47)
第2シンポジスト 保育者養成における現状について— 品川ひろみ (54)
第3シンポジスト 「主体性のある子ども」をめざして— 石井聖子 (60)
コーディネーターの報告— 岡本純子 (66)
司会者としての報告— 東 重満 (70)

論 文
モンテッソーリのコスミック教育思想における子ども観— 前之園幸一郎 (73)
モンテッソーリ教育的観点に基づく「子ども理解」評価の必要性— 甲斐仁子 (91)
マリア・モンテッソーリの組織に対する考え方に— その言説からの考察— 森 家 (104)
コスミック教育期間の可能性を探る— 福原史子 (118)
— コスミック教育とESD(持続可能な社会のための教育)— 須山めぐみ (131)
モンテッソーリにおける「知性 (Intelligence)」の概念—

教育エッセイ
自由と規律— 伊ハネ・アルテラ, S.J. (143)
モンテッソーリ教育とルーメル先生— 江島正子 (155)

海外情報
MAPAのオープニング研修会— 相良教子 (172)

ラウンド・テーブル
A モンテッソーリ教育の普遍性と普及— 青木昭子 小田進一 (176)
B 若手保育者で語るモンテッソーリ教育— 報告— 岡野尚子 高橋真由美 (181)
C モンテッソーリ教具が育てる力— 城 由利子 酒藤良し (182)
D 保護者との協働するモンテッソーリ教師の主体性— 平目理恵子 前島英城 (186)

図書紹介
In giardino e nell'orto con Maria Montessori, la natura nell'educazione dell'infanzia— その理論と実践— 育ちが知らぬ子の子育て支援体系— 鈴木弘美 (193)

第44回全国大会参加報告
第44回大会を終えて— 前島百合江 杉浦篤子 (200)
支部報告— (204)
教員養成コース報告— (219)
事務局報告— 鈴木弘美 (228)
英文摘要— フランツ・コゼビ, モール S.J. (237)
編集後記— 江島正子 (257)

2011 日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第45号

ISSN 0913-4220

巻頭言 格差の連鎖を振り切るために、モンテッソーリ教育の層の普及を— 野原由利子 (1)
追 悼 レルデ・モンテッソーリ先生の帰天— 松本静子 (2)
講 演 脳科学から見るモンテッソーリ教育の意義— 水江誠司 (4)

シンポジウム
変動する日本の保育情勢とモンテッソーリ教育の果たすべき役割—
第1シンポジスト 子どもの仕事— 町田 明 (15)
第2シンポジスト 多様化する変動の要素に対応する人材育成のポインタ— 江口浩三 (22)
第3シンポジスト 障害児教育とモンテッソーリ教育— 佐々木信一郎 (28)
第4シンポジスト 保育・教育に関する国際的動向と日本の動向の比較— 野原由利子 (35)
司会者としての報告— 天野珠子 (40)

論 文
モンテッソーリの人間像と子どもへのまなざし— 前之園幸一郎 (44)
モンテッソーリ教育における教具の意義— 系統性に焦点をあてて— 花園隆行 (66)
モンテッソーリ教育における「自由」と「運動」の関係について— 濱崎久美 (76)
幼児期におけるファンタジーの諸相— 岡本直子 (87)
— モンテッソーリ教育の見解と心理学的考察を踏まえて—
J. Millerに基づくモンテッソーリの音楽教育— 歌唱活動についての考察— 黒西 希 (97)

実践報告・事例報告
コスミック教育の実践— 「創造のおはなし」を通して— 福原史子 峰谷里香 岡本純子 (107)
モンテッソーリ教育に基づく音楽療法— その理念と手法— 小島 薫 (119)

海外情報
韓国のモンテッソーリ教育の状況— 韓国モンテッソーリ教育総連合会— 李 晋玉 (132)

ラウンド・テーブル
A モンテッソーリ教育の導入— 武石協子 林 豊子 沢田里美 (137)
B 生活と遊びの中にかず教具活動— 森本悠代 瀬原千香子 (145)

図書紹介
高田敏明編著「ルーメルファミリー— 回想— クラウス・ルーメル神父」 鈴木弘美 (149)
赤羽恵子著「自分で考え、自分で育てるモンテッソーリ教育」— 林 信二郎 (154)
Renato Foschi, MARIA MONTESSORI— ドメニコ・ヴィタリ, S.J. (158)
スーザン・メイクリン・スティーブンス著 中村博子訳「デタダでできた」— 江島正子 (165)

第45回全国大会参加報告
第45回全国大会を終えて— 森下京子 (171)
第45回全国大会準備、運営にあたって— 村田尚子 (172)
支部報告— (174)
教員養成コース報告— (188)
事務局報告— 鈴木弘美 (199)
英文摘要— (209)
編集後記— 江島正子 (236)

2012 日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第46号

巻頭言 九州における40年の歩みと思う... 藤原江理子(1)
シンポジウム
新しい子ども、新しい教師、新しい教育ーモンテッソーリならではを語るー
第1シンポジスト 子どもから学ぶ教育の復讐... 菅原太郎(2)
第2シンポジスト 現代の動向とモンテッソーリ教育に関する研究的視点の持ち方... 甲斐仁子(7)
第3シンポジスト モンテッソーリ教師養成の立場から... 板垣美子(16)
第4シンポジスト 今を生きて、新しく生まれる... 藤原江理子(22)
司会者としての報告... 関 聡・中尾昌子(27)
論文
「子どもの家」とモンテッソーリ... 前之園幸一郎(30)
モンテッソーリ教師論の現代的意義... 中田尚美(47)
戦後日本におけるモンテッソーリ教育の展開過程に関する研究... 有田 恵(59)
セガシ教員からモンテッソーリ教員へ... 有田 恵子(75)
モンテッソーリ教育における音楽活動ーわらべうたから合奏へー... 野萩万佐未・置子かおり(88)
実践報告・事例報告
モンテッソーリ子どもの家の教育活動への茶道導入に関する考察... 瀧口 洋 他2名(102)
「作業に時間制限を設けない」取り組みを通して... 川満すむ子(113)
教育エッセイ
子どもが英語に親しむ第一歩... レモン・ブルゴアン(125)
「ルーメル賞」授与
第一回「ルーメル賞」授与について... 江島正子(132)
海外情報
モンテッソーリ国際大会に参加して... 松本静子(138)
ラウンド・テーブル
A 保育園・幼稚園におけるモンテッソーリ教育の取り入れ方について... 戸田恵子(143)
B 教師養成・園内研修のあり方について... 松本良子・奥野智子(149)
C 保護者支援のあり方について... 岡本仁美(154)
D 特別な支援を要する子どもとの関わりについて... 力丸純光・村上真子(159)
E モンテッソーリ教育の理論研究について... 前良敦子・島越文明(163)
市民公開講座
今を深く生きるモンテッソーリ教育ー皆が楽しみー... 相良敦子(166)
図書紹介
松本静子著「よこばちの中に生きるモンテッソーリ教育」... 深谷麻理(181)
相良敦子著「お母さんの発見ーモンテッソーリ教育で学ぶ子どもの見方」... 島田美城(184)
第46回全国大会参加報告
第46回全国大会を終えて... 中尾昌子(191)
ワークショップについて... 林 俊子(193)
支部報告 (196)
教員養成コース報告 (212)
事務局報告 鈴木弘美(222)
英文摘要 (232)
編集後記 江島正子(256)

2013 日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第47号

巻頭言 次世代トレーナーへの期待... 松川和照(1)
講演
赤ちゃんの不思議ー心の発達... 関 一夫(2)
子ども一人ひとりのおもいを受けとめるために... 榎部真美子(14)
シンポジウム
子ども一人ひとりのおもいを受けとめる
第1シンポジスト 子どものニーズとおもいに応えるためにーヴィタリ・ドメニコ(23)
第2シンポジスト 現地に赴く子ども... 相良敦子(31)
第3シンポジスト 今日のモンテッソーリ教育とモンテッソーリ教師ー坂田由美子(37)
第4シンポジスト 未知との遭遇... 松川和照(49)
司会者としての報告... 甲斐仁子(55)
論文
モンテッソーリ教育における宗教と子ども... 前之園幸一郎(61)
「良い平穏いのか」としてからの発展ーモンテッソーリ教育法に基づくー江島正子(73)
モンテッソーリ教育における「知」と「行」ー東洋思想からの考察ー瀧口 洋(98)
実践報告・事例報告
[モンテッソーリ]の導入が10年の軌跡ー表現活動の舞台で観る子どもたちの成長の家ー木本裕子(113)
モンテッソーリ教育に基づく音楽療法第2報ー「観察」「感覚」「発声」の3点おー小島 薫(125)
教育エッセイ
モンテッソーリ教育を学んだ親たちー情報化社会における新たな試みー田中昌子(136)
ルーメル賞
第2回「ルーメル賞」授与... 江島正子(149)
ラウンド・テーブル
1 実践に生かすためのモンテッソーリ教育の理論... 松本静子・下條裕紀(151)
2 教師の仕事についてー5つのテーマー 赤羽恵子・島田美城(157)
図書紹介
天野珠子著「あいじゅだよりII」... 岡田耕一(162)
第47回全国大会参加報告
日本モンテッソーリ協会(学会)第47回全国大会報告... 榎部真美子(167)
大会を終えた今の想念... 松本良子(169)
第47回全国大会ワークショップ報告... 千葉和恵(171)
支部報告 (175)
教員養成コース報告 (168)
事務局報告 鈴木弘美(197)
英文摘要 (207)
編集後記 関 聡(225)

2014 日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第48号

巻頭言 いのちの尊さ... 渡野正三郎(1)
講演
子どもの生きる力を信じて... 中村桂子(2)
シンポジウム
未来への責任ー自然・子ども・社会のハーモニーー
第1シンポジスト 自分幼稚園の現場から... 高野洋子(17)
第2シンポジスト 「深草子どもの家」の発展... 榎部真美子(24)
第3シンポジスト 多様な世界のニーズに応えるモンテッソーリ... 津路高子(30)
第4シンポジスト 「未来と今」ー「グローバル」とローカルー... 藤原史子(36)
司会者としての報告... 友井桂子(44)
コーディネーターとしての報告... 相良敦子(47)
論文
戦前日本におけるモンテッソーリ教育の歴史... 前之園幸一郎(52)
幼児期における親美とファンタジ... 岡本直子(64)
母語・母国語の獲得における伝承わらべうたの意義をモンテッソーリ教育理論から考察... 野萩万佐未(75)
「モンテッソーリ会議」に見る40年におけるモンテッソーリ教育法の検討... 中田尚美(92)
実践報告・事例報告
モンテッソーリ教育と音楽教育... 森 貞子(104)
ルーメル賞
第3回「ルーメル賞」授与... 江島正子(115)
教育エッセイ
ネパール・ボカラでのモンテッソーリ教育の一例... 川岡俊子・戸田恵子(117)
海外情報
「ルーメル通り」の誕生... フランツ・ヨゼフ・モレル SJ(127)
図書紹介
「オルカウー まんがで読む 知っておくべき世界の偉人 ⑧ モンテッソーリ」ー関 聡(132)
「マシュマロ・テスト：成功する子、しない子」... 松本静子(136)
「うづは仕事で治る なびきの人はいうづにならなかったのか」... 早田由美子(141)
第48回全国大会参加報告
日本モンテッソーリ協会(学会)第48回全国大会報告... 榎部真美子(146)
第48回全国大会(奈良)ワークショップ報告... 榎部真美子(148)
支部報告 (150)
教員養成コース報告 (164)
事務局報告 鈴木弘美(173)
英文摘要 (184)
編集後記 江島正子(203)

2015 日本モンテッソーリ協会

モンテッソーリ教育 第49号

巻頭言 広島で語る平和教育としてのモンテッソーリ教育... 島田美城(1)
講演
平和と教育... 沙見絵幸(2)
平和な心を持った子どもたちー平和な世界ー... リリアン・ブライアン(14)
(訳 齋藤昌哉)(14)
シンポジウム
子どもと平和
第1シンポジスト 平和のために教育を... ヴィタリ・ドメニコ(38)
第2シンポジスト 平和教育ー未来への課題... 高橋修人(43)
第3シンポジスト いま、モンテッソーリ教育を平和教育として実践しよう... 島田美城(49)
司会者としての報告... 深津高子(56)
論文
モンテッソーリにおける子どもと平和... 前之園幸一郎(60)
モンテッソーリ教育における「活動」の意義... 花岡隆行(73)
M. モンテッソーリの音楽教育観の変遷... 藤尾かの子(83)
幼児期におけるインクルーシブ教育の実質化に向けての研究... 岡本仁美(100)
実践報告・事例報告
子どもの平和と教師の関わり... 佐々木洋子(114)
図書紹介
野原由利子他著「現代に生きるマリアーモンテッソーリの教育思想と実践」... 関 聡(124)
田中昌子 監修「こどもせいけん百科」... 大野智子(128)
高田敏明編「ルーメル神父94年歳日アルバム集」... 江島正子(133)
マリオ・星・モンテッソーリ著AMI友の会NIPPON BR・監修「人間の構内性とモンテッソーリ教育」... 鈴木弘美(139)
第49回全国大会参加報告
第49回全国大会報告... 島田美城(144)
事務局長として... 村上 隆(146)
オプション報告... 河本真紀(148)
ワークショップ報告... 下條祥子(150)
支部報告 (152)
教員養成コース報告 (166)
事務局報告 鈴木弘美(174)
英文摘要 (185)
編集後記 松本静子(204)

2016 日本モンテッソーリ協会

ルーメル賞



日本モンテッソーリ協会（学会）「ルーメル賞」選考委員会委員長 江島 正子

「ルーメル賞」の名称は日本モンテッソーリ協会（学会）の第3代目の会長（理事長）クラウス・ルーメル（Klaus Luhmer SJ, 1916-2011）先生の名前に由来します。ルーメル先生の多大な功績を記憶し、併せてわが国におけるモンテッソーリ教育の普及と発展のために貢献された日本モンテッソーリ協会会員に賞状と賞金5万円を授与する賞です。

ルーメル先生は1968年、日本モンテッソーリ協会発足当初から、最初副会長としてわが国におけるモンテッソーリ教育の普及・発展に寄与され、1977年から2007年まで会長（理事長）としてしっかりした礎、強固な組織体を築かれ、3千万円の基金を残されて、2011年3月1日に享年95歳で帰天されました。

2011年8月5日、札幌の藤女子大学で開催された第44回全国大会の理事会において、天野珠子理事とドメニコ・ヴィタリ SJ 副会長から本会の繰越金・余剰金の毎年の有用な用途として「ルーメル賞」が提案されました。

2012年8月4日、名古屋で開催された第45回全国大会総会で「ルーメル・モンテッソーリ奨励基金規程」が承認され、それにもとづき2013年1月26日常任理事会で理事5名（前之園幸一郎会長 町田明副会長 関聡理事 甲斐仁子理事 江島正子理事）が選考委員会を成し、理論と実践の両分野から受賞者を選ぶことになりました。授与式は大会の総会で行われることも同時に取り決められました。

今までの受賞者は以下のとおりです。

第1回（2013年宮崎第46回全国大会）受賞者と受賞理由

赤羽恵子 第2次大戦後、ドイツのケルンでモンテッソーリ教育運動と関わり合う。日本人として初めて国際モンテッソーリ協会のモンテッソーリ・ディプロマを取得して、わが国におけるモンテッソーリ教育の普及と発展に重要な役割を果たした。

松本静子 第2次大戦後、主にイタリアのペルージャやアメリカのロスアンゼルスでモンテッソーリ教育の教員養成を受け、オランダのアムステルダムにある国際モンテッソーリ協会から最初に公認された日本人トレーナーとして活躍している。

森 愛 幼児期にモンテッソーリ教育を体験し、その後モンテッソーリ教育を園芸療法士の立場から独自の新アプローチを試みた独特な研究を行っている。（「モンテッソーリの園芸に対する考え方について—その著述からの考察—」『モンテッソーリ教育 第44号』日本モンテッソーリ協会（学会）、104-117頁）。

第2回（2014年横浜第47回全国大会）受賞者と受賞理由

下條裕紀媛 s. a. 1965年春、北九州聖ヨゼフ幼稚園園長としてモンテッソーリ教育に向き合い、大宮小百合幼稚園園長、広島小百合幼稚園園長兼理事長としてモンテッソーリ教育の実践分野で研鑽を重ね、現在も広島でモンテッソーリ教員養成に関わる。

第3回（2015年奈良第48回全国大会）受賞者と受賞理由

竹田 恵 日本モンテッソーリ協会（学会）の学会誌『モンテッソーリ教育』第46号の掲載論文「戦後日本におけるモンテッソーリ教育の展開過程に関する研究—カトリック教育協議会内『モンテッソーリ研究会』の活動展開を手掛かりにして—」、59-74頁、2013年の論文が賞の対象になった。

日本モンテッソーリ協会（学会） ルーメル・モンテッソーリ奨励基金規定

（主旨）

第1条 日本モンテッソーリ協会（学会）（以下「本協会」という。）は、昭和52（1977）年から平成19（2007）年まで本協会の会長（理事長）としてモンテッソーリ教育の普及・発展に寄与されたクラウス・ルーメル師の多大な功績を記念し、本協会会則第4条、第4号に基づき、「ルーメル・モンテッソーリ奨励基金」（以下「本基金」という。）を設け、これに関する必要な事項を定める。

（目的）

第2条 モンテッソーリ教育の発展を期して、本基金の果実収入によってモンテッソーリ教育の研究を奨励する。

2 毎年度若干名の対象者に「ルーメル・モンテッソーリ奨励金」（以下「本奨励金」という。）を給付する。

（本基金の財源）

第3条 本基金は、寄付者（本協会）が寄付金1千万円を財源として設定する。

（本基金の保有及び増加）

第4条 本基金は、銀行預金・金銭信託・その他安全確実な保有方法によりこれを保有する。

2 本基金の財源は、寄付金品・給付されない果実収入等をもって増加させる。

（本基金の管理運営）

第5条 本基金の保有管理運用は、本協会の常任理事会の指導により事務局が行う。

2 本基金の管理運営のための必要経費は、本協会の予算によって負担する。

3 本基金の目的変更については、本協会の理事総数の3分の2で議決する。

（本奨励金の給付額）

第6条 本奨励金を給付する額は、原則として、本基金の果実収入範囲内とする。

2 本奨励金給付額を本協会の予算によって増額することは妨げない。

（選考委員会）

第7条 本協会は、本奨励金の対象者を選ぶため、選考委員会を設置する。

2 選考業務に要する経費は、年度毎に予算化し、本協会の常任理事会の承認を経るものとする。

（選考委員会の構成）

第8条 本協会の理事会の互選による5名以内の委員をもって、選考委員会を構成する。

2 本協会の機関誌編集委員長は、職務上委員となる。

3 選考委員の任期は2年とし、再任は妨げない。

4 選考委員長は選考委員の互選による。

（本規定の改廃）

第9条 この規定の改廃は、本協会が解散、その他の理由で目的の遂行が不可能になった場合に、本協会の理事会により決定される。

（付則） この規定は平成（24）2012年8月4日より施行する。

ルーメル先生を偲ぶ —「ルーメル通り」の誕生—



上智大学名誉教授 フランツ・ヨゼフ・モール SJ (Franz-Josef Mohr SJ)
(日本モンテッソーリ協会 (学会) 前監事『モンテッソーリ教育』欧文校閲担当)

「私は1916年9月28日ケルン近郊プルハイム市に誕生し、3日後の10月1日ニコラウスという名前でプルハイム教区教会で洗礼を受けられました。」このように自叙伝に記しているイエズス会士クラウス・ルーメル師は、2011年3月1日東京で帰天しました。

ルーメル師誕生後100年近くたって、プルハイム市立資料館の職員ニナ・ホーマン (Nina Homann) 氏から、2015年11月10日プルハイム市議会はプルハイム市内の一つの通りを『ルーメル神父通り』と命名することが満場一致で議決しました」と連絡がありました。さて、どのようなゆえんなのでしょうか。

ルーメル師は2007年11月、東京都練馬区にある高齢なイエズス会士向けのロヨラハウスに移るちょうどそのころ、当時ドイツのノルドライン・ウストファーレン (NRW) 州首相であったユルゲン・ルッツガース博士 (Dr. Jürgen Rüttgers) が日本を公式訪問なさいました。同首相は、いろいろなところで耳にしたプルハイム出身の同郷人ルーメル師にお会いすることを強く希望し、それで上智大学の SJ ハウスで面会を実現させました。

プルハイム出身者の2人は強烈に互に魅かれ合いました。ルーメル師はそのとき病院から退院し上智大学 SJ ハウスに戻ったばかりだったので、首相ルッツガース博士のホテルニューオタニでの夕食へのご招待を断らなければならず、とても残念がっておられました。

ルーメル師帰天後、ルッツガース博士は『プルハイム市史』第37巻 (2012) 321-325頁にプルハイム市出身のルーメル師について詳しく尊敬の念を込めて執筆しました。広島での被爆体験、長期にわたる上智大学の理事長 (2回)、副学長、SJ ハウス院長 (2回) などの役職、教育学科教授としての日本モンテッソーリ協会 (学会) への協力などを紹介し、また、ドイツのカトリック教会と国家や経済界への多種多様

な諸活動について報告しました。

最後に、「ルーメル師は広島での被爆証人として2つの国 (日本とドイツ) の橋渡しを行った」と著しました。

ルッツガース博士は、小生モール神父宛ての2013年1月23日付け書簡に「そのように素晴らしい功績を残した人がプルハイムにいたことを、多くのプルハイム市民が末永く驚き喜び忘れないように、『ルーメル神父通り』と命名した道路を適宜つくろうという計画が浮上しております」と伝えてきました。

この計画が成就しました。これが何故ドイツのプルハイム市中心街に日本モンテッソーリ協会 (学会) 第三代会長と同じ名前の「ルーメル神父通り」が誕生したかのゆえんです。



*「ルーメル通り」と「ルーメル賞」の名称の由来や「ルーメル」先生はどんな人物なのかを知るための文献：

- ①上智学院理事長 高祖敏明編『ルーメル神父94年歳アルバム集』学苑社 2016年。
- ②上智学院理事長 高祖敏明『ルーメルファミリー回想』学苑社 2012年。
- ③赤羽孝久著『ルーメル神父来日68年の回想』学苑社2004年。

日本モンテッソーリ協会（学会）歴代理事ならびに監事

創立時（昭和43（1968）年7月21日）の理事ならびに監事

（理事） 鼓常良、神藤克彦、小谷善一、赤羽恵子、ペトロ・ハイドリッヒ、平野智美、伊藤保郎、菊野正隆、クラウス・ルーメル、マルコム・マックファーデン、松本尚子、宮下郁司、萬代彰子、中沢儀三郎、尾形利雄、坂本堯、鷹觜達衛、竹村一

（監事） 川村浩一、長谷川きぬ子

創立以後、上記の先生方を中心に協会が運営されました。平成4（1992）年には規則が整備され、第1回理事選出選挙が実施されました。その後理事選出選挙は3年ごとに実施され現在に至っています。

以下に平成4年以降平成29年3月現在の理事・監事歴任者を掲載します。

（理事）

K・ルーメル	H4年8月～H23年3月	天野珠子	H7年8月～H25年7月 H28年8月～
赤羽恵子	H4年8月～	高祖敏明	H7年8月～H10年7月
井田範美	H4年8月～H7年7月	林信二郎	H7年8月～H25年7月 H28年8月～
乾盛夫	H4年8月～	山本由美子	H7年8月～H10年7月
伊藤保郎	H4年8月～H7年7月	江島正子	H10年8月～
小谷善一	H4年8月～H12年7月	正田幸子	H10年8月～H13年7月
相良敦子	H4年8月～H28年7月	奥山清子	H10年8月～H13年7月 H16年8月～H22年7月
下條裕紀媛	H4年8月～H25年7月	板東光子	H10年8月～H22年7月 H25年8月～
下村徹	H4年8月～H16年7月	野原由利子	H12年8月～H22年7月
鈴木キミエ	H4年8月～H13年7月	岩田陽子	H13年8月～H19年7月
鷹觜達衛	H4年8月～H19年7月	荻野美佐子	H13年8月～H19年7月
V・ドメニコ	H4年8月～	甲斐仁子	H13年8月～
野田実	H4年8月～H10年7月	前田瑞枝	H13年8月～H16年7月
藤原元一	H4年8月～H17年11月	田井良貞	H13年4月～H16年7月 H19年8月～H22年7月
松本静子	H4年8月～	小池良枝子	H13年8月～H25年7月
松本良子	H4年8月～	関聡	H16年8月～
村上操子	H4年8月～H10年7月	中尾昌子	H16年8月～
山下悟	H4年8月～H13年4月	前之園幸一郎	H16年8月～
松本尚子	H5年1月～H7年7月	片岡千鶴子	H16年8月～H20年4月
町田明	H5年1月～H28年7月	藤原江理子	H18年4月～

佐々木信一郎	H19年8月～	吉武久美子	H24年4月～H28年7月
佐々木良晴	H19年8月～H24年3月	原田豊己	H24年4月～H27年3月
前鼻百合江	H19年8月～	阿部真美子	H25年8月～
前川さちえ	H19年8月～H25年7月	瀧野正三郎	H25年8月～
松川暢男	H20年4月～H22年8月	早田由美子	H25年8月～
島田美紀	H22年8月～	廣澤弓子	H25年8月～H28年7月
石田憲一	H22年8月～H23年3月 H28年8月～	松川和照	H25年8月～H28年7月
松本巖	H22年8月～H25年7月 H28年8月～	下條善子	H27年4月～
鈴木弘美	H22年8月～	谷田佳育	H28年8月～
森下京子	H22年8月～	長谷川美枝子	H28年8月～

(監事)

高橋宏公	H4年8月～H7年7月	山本雅子	H16年8月～
赤羽孝久	H7年8月～H16年7月	F-J・モール	H24年1月～H26年7月
篠原常久	H7年8月～H16年7月	G・ケルクマン	H26年8月～
鈴木成一	H16年8月～H24年1月		

以上は就任年順に記載。また、敬称は省略。Hは元号平成を表す。

なお、創立時から理事選挙が始められるまでの間に、上記理事のほかに平塚益徳、堀田康人、霜山徳爾、保田史郎、西本順次郎、渡辺和子各氏が理事の任に就かれています。また、守安伸之、竹村和子、新井次男、高橋宏公各氏が監事を務められました。

他学会におけるモンテッソーリ教育研究の現況について —学会発表における現状から—

甲斐 仁子、三浦 直樹、廣澤 弓子

企画主旨

モンテッソーリ教育の理論および実践に関する研究は、本学会を中核として確実な発展を遂げてきた。さらに、他学会におけるモンテッソーリ教育の状況を捉えることにより、本学会の意義を見出すことも必要と考える。この試みとしては、本学会誌第33号に掲載された故吉岡剛会員による「我が国におけるモンテッソーリ教育の諸動向（2）—学術・学会等に見られる状況—」（2000年、70頁-94頁）がある。今回は、日本保育学会を主とした国内の学会における発表に焦点をあて、その特徴を捉える。

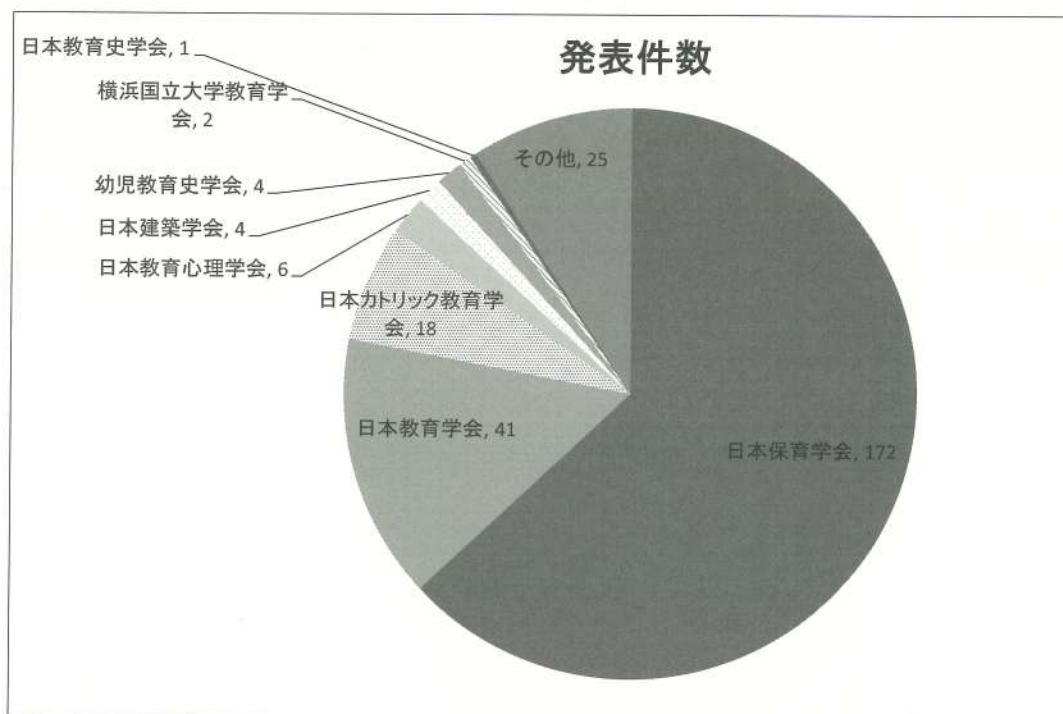
データ収集方法について

各学会発表要旨集、各学会誌掲載大会発表内容、各学会ホームページ公開情報、日本保育学会事務局・上智大学図書館・東洋英和女学院大学図書館蔵書、CiNii 情報、国会図書館公開情報を基に検索を試みた。

発表件数の特徴

本学会会員のみならず多岐にわたる学会における非会員の活動が見られる。モンテッソーリ教育が含む多様な学問分野・研究要素と捉えることができるだろう。冒頭吉岡会員報告に記載された日本モンテッソーリ治療教育研究会、日本教育方法学会、全国保母養成協議会、日本乳幼児保育学会、日本心理学会、応用心理学会に関しては検索を省いた。国際的発表活動を加味すれば、さらに増えることになる。

なお、本データ収集において、各学会での発表件数を統計しているが、発表件数不明の学会については、学会誌掲載論文数を「その他」としている。



学会における口頭発表数の推移の特徴

モンテッソーリ教育の理論および実践に関する発表数を年代別に統計し、その推移を調査した。1960年代後半から日本保育学会を中心に発表数が増加している。2000年初頭に減少傾向も伺えるが、近年においては再び発表数を維持している。日本保育学会では、第20回（1967年）小谷善一氏に始まり、第24回（1971年）公開講演「西ドイツにおける保育事情」でクラウス・ルーメル名誉会長が通訳、また、「日本の幼児保育に思想を」でシンポジスト、第36回学会賞を上野慶子会員が受賞している。その後、1件～10件とほぼ継続しているが、発表総数の4%にも満たない状況である。今後、多岐にわたる学会で理論・実践など多様な視点の研究が期待される。



編集後記

『日本モンテッソーリ協会（学会）50周年記念誌』をお届けいたします。

平成26（2014）年9月27日（土）の午後、初めての「記念誌企画委員会」を開催したとき、それはあたかも大海に小舟を漕ぎ出したようなものでした。一応船頭であった私は、立派なお客様方をお乗せしてこれからどんな船旅をしたらよいのか、大変不安でした。

しかし、この船旅も目的地に着こうとしています。これまで、たくさんの「助け船」のお世話になりました。企画委員の先生方には、12回の委員会にご協力いただきました。ご祝辞をはじめとする原稿のご執筆依頼に対しては皆様から快くお引き受けをいただき、期日までにご入稿いただきました。

原稿の締め切りからすでに1年以上も過ぎました。ご執筆の先生方には大変お待たせをいたしました。

協会（学会）の50周年を擲り上げることができたのか、当初の「資料となりうる記念誌を」という目的はどこまで達成できたのか、自信がありません。

この50年の間には、各コースや各施設の周年事業として多くの立派な記念誌が編まれました。本記念誌は、日本モンテッソーリ協会（学会）の「50周年記念誌」としては物足りないかもしれません。どうぞお許してください。また、資料編の一部には不明な部分がありました。誤り等をご指摘いただき、今後本誌をもとに正確な歴史がとどめられますよう祈念いたします。

本誌の制作にあたり、ヨシダ印刷株式会社の滝口祐司様には長きにわたる制作期間を誠実にご対応いただきました。事務局スタッフの龍野真知子会員には校正等、様々なご協力をいただきました。また、表紙のデザインにつきましては、第50回大会事務局長であり、そらのいえ保育園園長の三浦直樹会員をお願いいたしました。そして、ご執筆いただいた先生方をはじめ、写真を送ってくださった会員の皆様、加えて目には見えないところで支えてくださったすべての皆様に感謝をいたします。

日本モンテッソーリ協会（学会）の一層の発展を祈りつつ、今日から未来に向かって歩き始めましょう。（鈴木弘美）

.....

日本モンテッソーリ協会（学会）50周年記念誌企画委員

天野珠子（愛珠幼稚園）、江島正子（群馬医療福祉大学大学院）、甲斐仁子（東洋英和女学院大学）、鈴木弘美（日本モンテッソーリ協会（学会））、林信二郎（元埼玉大学）、廣澤弓子（東京モンテッソーリ教育研究所）、前之園幸一郎（日本モンテッソーリ協会（学会））、松本静子（東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター）、三浦直樹（そらのいえ保育園）（50音順）

平成29（2017）年7月30日 発行

発行所 日本モンテッソーリ協会（学会）

〒112-0002 東京都文京区小石川2-17-41 富坂キリスト教センター2号館内

Tel・Fax (03) 3814-8308

代表者 日本モンテッソーリ協会（学会）会長（理事長） 前之園幸一郎

印刷 ヨシダ印刷株式会社東京本社

〒130-0014 東京都墨田区亀沢3-20-14

Tel (03) 3626-1301 (代表) Fax (03) 3626-1300

